252
M69c

靈界の妙趣

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS
URBANA

靈界の妙趣

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS.
URBANA.

252
M69c

8D28 Cha

靈界の妙趣

目錄

第一章　元始論……………………………………一頁
第二章　基督論……………………………………二三
第三章　十字架の眞意……………………………四三
第四章　祈禱の眞意………………………………六一
第五章　新生命……………………………………八二
第六章　永遠の生命………………………………一〇五
第七章　靈覺の妙…………………………………一二九
第八章　聖書論……………………………………一五〇

637651

UNIVERSITY OF ILLINOIS LIBRARY URBANA

第九章　幸福よりも聖德……一七七
第十章　健全なる信仰……一九五
第十一章　愛人……二一〇
第十二章　聖潔なる生涯……二三三
第十三章　感化の源泉……二五〇
第十四章　死の榮……二七二
第十五章　實驗の價値……二九二

目錄終

靈界の妙趣

宮川經輝述

第一章　元始論

元始に神天地を創造たまへり（創世記第一章第一節）

今日の題は元始論と云ふので、是れは事物の根原を論ずると云ふ意味である、北の端なるグリーンランドに住める「エスキモー」だの、また亞弗利加の熱き砂漠に住める土人の如きは、一向この世界が如何して出來たものか、人間が如何にして始つたものか、爾う云ふ奧深き事に就いては何をも考へないのである、然れども少しく進歩した人間

は仰いで天象を瞻め、俯して地上を見るときに、是れは如何にして出來たものであらうか、またその地上を歩む我自らは如何して始つたものであらうかと云ふ問題を考へることになる、希臘哲學の發達を見れば三期に分れてある、その第一期は萬有の理即ち造化史の研究である、紀元前六百四十年に生れたミレトのテールが『水は則ち万物の基である』と敎へて居る、同じくアナクシマンデルは『地球は元流動物より發せり』と申して居る、波斯の「ゼンダウエスタ」と云ふ古い書物にも万物の元始は、種々に說明してある、近くは支那の易と云ふ書物に矢張り事物の元始を示して『大極兩儀を生ず』と錄いてある、老子の道可道章に於いては『無名は天地の元始、有名は万物の母』と錄いてあるが、何所の國でも右の如く申して元始を研究したのである。

我日本に於いて太古から傳はつたと稱へられる古事記の首章に『天地

の元始のとき高天ヶ原に成りませる神のみ名は天御中主神、高皇產靈日神、神皇產靈神、この三柱の神は獨り神にて隱身に在しませり』と錄いてある、斯くの如く種々萬物の元始を論じて居る中では、古事記の說く所は如何にも興味がある、天地の元始のときに目に見えない三柱の神が高天ヶ原にお出來なされたと云ふのであるが、たゞ少しく工合が惡いと思ふのは、高天ヶ原は三柱の神よりも先に在つたと云ふ事の如くに思はれる一事であるけれども或る神道家は天御中主神と云ふ題で、斯う云ふ歌を詠んで居る

天となり地となりけるそのさきを
幾代ひさしく知ろしめしけん

是れは天御中主神が天地の出來ない、先をば、どれくらゐ久しくれ治めなさつたであらうかと云ふ事である是に據つて見ると天地よりも先

に天御中主神が在らせられたと云ふ意味になる、蓋し餘程面白い眞理を申し得たと云つても宜からう、扨て創世記なるものは總て物の元始を敎へた書物であつて、是れは球上無比の一大珍書であると申しても、決して過言であるまい、凡そ世界に種々なる珍しい書物があるかなれども、創世記くらゐに珍しい書物は少ない、その創世記の中でも第一章が一番面白い所で、また天地開闢の事に就いては一番明なる敎を示したものである、即ち『元初に神天地を創造たまへり』とある、其所に深き意味が存するだらうと思ふ。英吉利のアルガイル公が申された言葉に「創世記一章の由來とその記者に就いては、新しき說もあるかなれども、此創世記は人類の口碑中にては驚くべき單純と豪壯なる文字に充されたるもの也」と、また一人の學者は『たゞ驚くべきは科學が進步すればする

程創世記の文字の意味が明瞭になつて來る』と曰つた一寸之れを讀んで見たときには、第一日には何が出來た、第二日には何が出來たと云ふ工合に錄いてあるから、何だか詰らない昔話のやうに思はれるなれ共星學、地質學、人類學などが進んで來て、この地の底に踏入り、研究に研究を加へて見れば今より三千年の太古に著はされた書物としては、今日の進んだ科學が云はうとする事を云ひ得て實に鮮明であると云はねばならぬ、またライエルと云ふ學者の申した言葉には『地質學の調査に據つて明瞭となりしこの世界の地層を段々探ねて見ると、この世界の地層のなかつた時代がある、また植物の大元始を探ねて行くと植物のなかつた時代がある、動物を探ねて行くと動物のなかつた時代がある、この世界の有ると有らゆる物の中で何一ツとして限りなき前から在つた物はない、皆元始がある』と云つてあるが、私共はその元始を

研究しなければならない。

その元始と云ふのは何であるか、創世記第一章一節の『元始に神天地を創造たまへり』と云ふその元始は何時と定まつた時ではない、たゞ昔の昔、即ち太古と云ふ意味である、その太古に神が天地を創造り給ふたので、この天地とは英語で申すと「ユニヴォルス」と云ふ文字である、また支那語や日本の言葉で申せば宇宙と云ふとに當る、希伯來の言葉には宇宙と云ふ文字がなかつたから、天と地と云ふ文字を併して今云ふ宇宙万有と云ふ意味にしたが、その宇宙万有を誰が創造たかと云ふと、神が創造玉ふた、その創造と云ふ文字、是れは餘程注意して用ゐてあるので、この文字は希伯來の學者が云ふには即ちバラと云ふ文字だ、そのバラなる語は人間が物を造ると云ふときに用ゐた字でない、是れは創めて造ると云ふので、何もない時に造り創めると云ふ意味に當る、そこで私

が驚いたのは、この創世記第一章の中に創造と云ふ文字が三度用ゐてある、第一は一節に『神天地を創造たまへり』是れは世界万有の大元の物質其他のものをお造りになつたと云ふ意味である、世の中は物質がなければ始まらぬのであるから、即ち創めて物質を造つたと云ふのである、第二には二十一節に『神巨なる魚と水に饒に生じて動く諸の生物を其類に從ひて創造り又羽翼ある諸の鳥を其類に從ひて創造り給へり神之を善と觀たまへり』とある、夫れまでには光も出來た、海も出來た、陸も出來た、けれども是は無氣体と申して生命のない者であるが、爰に創めて生物をお造りになつたと錄いてある、第三には二十七節に『神其像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を創造之を男と女に創造たまへり』と繰返してあるが、三度共に創めて造つたと錄いてある。

私共は近世科學の進歩に據りまして、ダーウヰンの唱へ初めたる進化

論、ダーウヰンの腦裡には造物主と云ふことを多少考へて居つたやうに思へるが、進化論の方では爰に物質即ち無機体があり、夫れが段々進んで來て遂に有機体となつた、その有機体の中でも植物から段々進んで來て鳥獸となり、遂に萬物の靈長たる人間が最後に現はれたと云ふのである、ところが學者が段々研究をして見た、殊にその實驗を行つて見た無機体の生のない物を硝子の中に入れ、他から少しも生物の這入つて來ないやうに防を着け、さうしてその無機体をこの空虛なる硝子の器の中に入れて置けば何時まで經つても其所に生物が出來ないと云ふ事を發見した、爾う云ふ研究に研究を加へて見ると、如何しても生のない物から生のある物が出て來たと云ふ事は考へられない、夫れから又下等動物から段々進んで來て、猩々、狒と云ふ所まで辿り上つたと云ふのであるが、この猩々と人間の間には、實に大きな淵があつて、

猩々から人間に一時に飛上ることは出來ない、其間には尙連鎖がなければ人間まで達せられないと云ふ事を發見した、今一つの困難は如何して物質が出來たかと云ふ問題である、この三つの問題に就いては學者の方では能く腦漿を絞つて考へて居る、遂に今日の進化論者の多くは有神進化論を採ることになり、矢張り爰に大能の神があつて物質を生じた、その生命のない物からして生命のある物を生じた、而してその生物の中からして、遂に神は萬物の靈長たる靈的動物即ち人間を生じたと云ふのである、創世記の創造と云ふ文字は物質の出來た時、生物の出來た時、靈的動物なる人間の出來た時に用ゐてある、是れは今日の科學の說く所と創世記の說く所と、悉く合ふか合はないか、夫れは私共の知る所ではない、けれども萬物の元始と云ふ所から考へて來ると、如何しても造物主がある、神があつて造つたものと云ふ點に歸着した

やうに思はれる。

彼のヘルベルト、スペンセルが進化論を種々な方面に當嵌めて論じて居るが、このスペンセルも如何しても天地萬有の大原因はなくてはならないその大原因は何かと云ふ事に就いては、實に不可思議にして到底この腦裡で測り知ることは出來ない、けれども大原因があらねばならぬと云ふ事だけは考へた、創世記には第一章一節に之れを云つてある、尚私共が聖書の中に於いて見ることは、預言者が出て來ても、また神の子なるキリストが世の中に現はれ出でゝも、未だ曾て神があらねばならぬとか、神のあるべき理由は斯うであるとお示しなされたことはない、神のあると云ふ事はテーキ、フォル、グランテッドと云ひ、チャンと先天的に定つた事として、其神の御性質に就いて示されただけである、誰でありましたか、ニューマン、スマイスと云ふ學者に按手

按手禮の試驗のときに神の存在なされる事を最も手短に、誰にでも分るやうに説明をして下されと云つたらば、スマイスは『左樣、神は存在す……………是れより他に云ふべき事はないのである』と答へた、創世記の説く所も矢張り夫れである。

そこで創世記第一章一節に用ゐた神と云ふ字は、希伯來語の「エロヒム」と云ふ言葉である、その意味は神の能力の充盈…………神の力は充盈ちてあると云ふことである、併し私共は總ての物の元始、殊に人間の元始なる物に就いても、未だ夫れだけでは滿足が出來ない、ところが彼のモーセが埃及へ遣はされんとするときに、神に向つて如何してもお名前を伺ひたい、誰が爾を遣はしたかと人々より問はれたときに、爾のお名前を云はなくてはなりませぬ、是非共お名前を聞かして下されと

云つた、すると神は何と答へられたか、出埃及記第三章十四節に『神モーセにいひたまひけるは我は有て在る者なり』と錄してある。

諸君、支那の書物の中で老子は實に難しい書物である、今爰に道可道章の無名は總ての物の元始だと云ふ意味を探ねて見ると、人間の意が動き始めると仁とか義とかになつて來るが、その動かない時のやうなものであつて、天地に光明があるとか暗黑があるとか、有機体があるとか、無機体があるとか云ふのではなく、その一番元始の時は名が附けられないから之れを指して無名と云ふのだ、哲學を考へる上からは何だか奧深い意味で、宜さそうであるけれども、名の附けられない物が天地の元始であると云ふときに、私共は茫然して分らない、夫れならば希臘哲學者が云ふやうに、水が大元であると云つたならば、其水の大元は何かと考へなければならぬ、然るに聖書に於いては、その天地万物をお造り

なされたる神をば今より三千年前に於いて我有と云ふ者我を遣はしたまふと云ふ考を起したのは、實に面白き又奥深き意味である、獨逸の哲學者ロッチェーが天地万有の元始に就いて深遠幽邃なる考を以て論じて居る中に、天地万物の大元は「ビイング」即ち本体であると云つた、その「ビイング」の中には活きた力が充盈ちてあると云ふのだ、充盈ちてあるからして、その本体が動きになるときに天地万有が現はれ來つたと云ふので、是れは實に面白い眞理だと思つて見ると、出埃及記第三章十四節に示す如く、ロッチェーよりも三千年の昔にチャンと猶太人の脳裡には、天地万物をお造りなされたる神は即ちその本体である、誰に造られたこともなく、誰に助けられることもなく、永遠より永遠に存する活力に充たされた、御本体であると云ふことを悟つて居る、之れを希伯來の言葉で「エホバ」と云ひ、又「ヤーウエー」と云ふ、然るに

猶太人は神を「エホバ」とか「ヤーウエー」とか唱へ上げるのは如何にも恐れ多い、餘りに勿体ないと云ふ考からして。之れを口に唱へないやうになり、其代りに「アドナイ」と唱へました、是れは我主……天地の主、卑近に云へば旦那様と云ふ文字を代用したのである、如何に「エホバ」又は「ヤーウエー」なる言葉が奥深くして尊く、又勿体ないものであるかと云ふ事は、之れを以ても能く分ることである。

爰に大能の神が舊約全書を通じて現はれて在ます所は種々あるが、多くは義の神として現はれてある、この義と云ふ字は日本で云ふ義理合とか、義理が堅いとか云ふ意味も籠つてあらうが、正しいと云ふ意味であつて、その正しいと云ふ中には、貧しき者、可憐なる者に對しては、慈悲の意に充ちて、その人々を憐み養育まねばならぬと云ふ方面に向つて、正しく裁決をせよと云ふ所に

用ゐてあるから、舊約聖書に於いて義の神と云ふときには、正しい神にて在ますかなれども、慈悲の腸に充たされて在らつしやると云ふことも含まれて居る、然るに新約全書の方には愛の神とあつて居る、或人は聖書が悉く火に燒かれたとしても、約翰第一書に『神は即ち愛なり』と云ふ一句がある、彼の一句だけが殘されたならば基督教は依然として世の中に存することが出來ると云つて居る、新約の愛の神には義が含んである、實に慈悲の神であるけれども、其神は正義を以て貫き給ふの神、舊約では義の神と云ふ中に慈悲が含んで居る、この二ツを合せると如何なつて來るか、プロクテルと云ふ人が「アブラハム」は全能の神を知り、モーセは「エホバ」を知り、ダビデ及び詩人は、我等の牧者として神を知れり然れども神の子イエ

ス降りて、之れを父と仰ぐに至れり」と云つたが、舊約聖書の中にも天地万物の主宰なる神を父と申した所がある、けれども、神の子イエス降りて之れを父と仰ぐに至れりと云ふは如何にも味はふべき、如何にも尊むべき事柄である、私共は總ての物の元始ある神が、舊約聖書には「エホバ」として現はれ、遂に猶太人には「アドナイ」と唱へられたと云ふ事も、他の書物に比べて見るならば、如何にも偉大なる現象であることを信ずるかなれども、キリスト、イエスが現世へ降りになつて、天地万有の元始は父なる神とれ示になつた事は何れの文學にも、何れの書物にもない現象である、馬太傳第十一章二十七節と路加傳第十章二十二節と約翰傳第三章二十五節には、キリスト、イエスのお言葉として「父は我に萬物を予たまへり父の外に子を識るもの無また子および子の顯す所の者の外に父を識者なし」『父は萬物を我に賜ふ父の外に子は誰なる

と識者なく亦子および子の顯す所の者の外に父は誰なると識者なし」と錄してある。

この天地に生れ來れる人間の中にてヨハ子は女の生みたる者の中にて一番大なるものであるとキリストは御賞賛をなされたが、そのヨハ子は天父を示す爲に世の中へ生れて來たものでない、天父を示す爲に世の中へ生れて來たものはイエス、キリストの外にはなかつたのである、爾うするとこの父と云ふ事は如何云ふ意味に於いて有難いか、妙味があるかと云ふ事を考へなくてはならない、父即ち生命の元始と云ふ意味である、父即ち我等の生命の上に權威を有てるものと云ふ意味である、父即ち總ての物を犧牲にして其愛子たる人類の爲に、盡すと云ふ意味が籠つて居る、佛法では今頃眞如と云ふものに人格があるとかないとか云ふ議論を行つて居るが舊新兩約書

に説く所の天地萬有の元始なる神は、最初から人格を備へた智あり情あり意ある神であつて、キリスト、イエスが之れを天の父とお示しなされた所に至つては、無論智と情と意とに充盈て居るものである、殊に人間の有する德を無限圓滿に考へて見たときに、矢張り神には其德が備へられてあると云ふのであるから、私共の仰ぎまつる天の神は、實に私共の父にて在しますと云ふ事である。

諸君、私共が初めて基督教を聽いたときには、造物主があると云ふ事であつた、加之書物などを讀んで見ても、造物主と云ふ文字があるから、造物主はなくてならないと考へた、其次に少しく進んで見ると、その造物主は天地万有の大主宰者であると云ふのであるから、成程支那には皇天上帝と云ふ事があるからして、アヽ何うも天地萬物をお創造なされたる大主宰者と云ふ事も分つたと、斯う思つたのである、

尙神を敬はなければならないと云ふ事を聽いたときに、敬神愛國と云ふ事があるから、神を敬はねばならぬと思つた、次に基督敎にては神を敬ふと云ふよりも神を愛すると云ふことにならねばならぬと聽いたときに分らない……サッパリ分らない、私共に神學を敎へて呉れたデビス敎師に向つて、神を敬ふことは我れ之れを承知す、けれども基督敎に於いては、全心全力を盡して神を愛せねばならぬと云ふが、先生、どうぞ其事を敎へて下さいと云つたときに、先生は懇切に神の愛すべき理由を敎へて呉れたけれども、私共はサッパリ分らなかつた、其後四年の星霜を經て、造物者は我の父であると云ふ、その父なる意味が我意の中に分つて來たときに、初めて愛すると云ふ事が分つて來た、夫れから後は神は我意の中にも、我身の周圍にも、肉身の親が附纏うて居るが如くに、近く在らせられる事が分つて來た、其時から天地の元始なる

父様には、聖意を慰むるが爲に、孝道を盡さなければならないと云ふ精神になつた、即ち父なる神が分つてから祈禱が樂しくなり、實にお父さんに聖語を聽き、又お父さんに話をするのが一番面白いと云ふことになつて來たのである、故にキリスト、イエスが私共に父なる神をお示しになつたのは、如何にも奥深き有難き妙味があるのである。

日本の漢學者の中にも造物主のあることを考へた人がある、主宰のあることを考へた人がある、伊藤仁齋でも、物部徂徠でも、矢張り天地万有の主宰がなければならぬと云ふ事だけは考へたのである、獨り近江聖人中江藤樹に至つては、私共が自然神學の中に學ぶやふな事を申して居るが、是れは實に何うでも近江聖人の高尚くして、總ての學者に優つた所以であらうかと思ふ、太乙神經の序文に「太一尊神書所謂皇上帝也

夫皇上帝は太一の神靈天地万物の君親にして六合微塵千古瞬息無所照鑒」如何です、基督教を知らない藤樹先生が、如何しても天地万物の君となり親となる方が在らせられる、そのお方は瞬く間もこの廣き天地をお照しなさらぬことはないと云ふつたのである、尚進んで其妙用大虚に流行して至神至靈……其尊貴獨にして對なし其德妙にして測られず其本無名號聖人強いて之に字して大上天尊太一神と云ふ而して人をして生養の本を知りて敬して以て之に事へしむ」と云つたが實に藤樹先生は天地の神の在しますことを知つた、無限絶体の神はたゞ獨りであつて、決して相對するものがない、此神は見ざる所なく、知らざる所なく、至らざる所なき德を備へ給ふので、何ともお名前の附けやうがない、聖人は強いて大上天尊太一神と唱へる、たゞ我々は是れが生命の本であると知つて敬ひお事へ申すと云つて居るが、キリスト、イエスが

藤樹にお現はれになつたならば、先生はア、夫れが天の父だ、夫れが我が慕つて居る父だ、我は全心全力を以て之れを愛しませうと云ふことになつたかも知れない、我輩は藤樹先生の如き學業に確な者ではない、徳の高い者ではない、けれどもキリスト、イエスが我々にお現はし下されたが爲に、藤樹先生の進み得なかつた所へ進むことが出來た、彼れは敬するに止つたが、我輩は心を盡し、精神を盡し意志を盡して、主なる爾の神を愛すべしと云ふ天の父を知り、之れを愛すると云ふ妙味を悟とつたと云ふことは、實にキリスト、イエスの御功績として、榮を主に歸し奉らねばならない、若し諸君が眞個に天地の元始をお知りなされたいならば、キリスト、イエスのお示しなされたる父を知らなければならぬ、その父を知らうと思へば、其父が吾人に現し玉ふたキリスト、イエスを知らなければ、其點に達することが出來ない、我大阪敎會の憲法に「我儕

は天地の主にして人類の父なる神を信ず」と定めたのは、即ちその眞意に基く譯であるから、深くその意味を味はれんことを希望いたします。

第二章「キリスト」論

シモンペテロ答けるは爾はキリスト活神の子なり

（馬太傳第十六章十六節）

キリストは神の子である、即ち神の代表者であると云ふ問題は之れを哲學的に論ずるのと倫理學的に論ずるのと二ツの區別があるが、哲學的に論ずるとすればなか〳〵難しい事であつて、到底半日や一日にて談盡くす事はできない、之れに就いて千九百年の間世界の學者達が議論もし、著述

も致したのであるが未だ結論に至らない、神が人に成つたと一言に云へば云へるものゝ、神が人に成つたと申すならば、父も子も聖靈も一緒にイエス、キリストと云ふ人になつたか如何かと云ふ問題が直ぐに起つて來るのである、イヤ夫れは三位一体の中の第二位たる子なる神がイエスとなつて現世へお降りになつたと云ふ人もあると、夫れならば三位一体と云ふ問題に就いて、その子と父とは如何云ふ關係があるか、又子と父と聖靈とは、如何云ふ關係があるかと云ふ問題を考へて來なければならぬ、イヤ夫れは天の父が人となつて現世へお降りなされたと云へば、天の父が天の父に祈禱を捧げたり、或は天の父の前に、罪の贖をなされたりしたのであるかと云ふ事になつて頗る難しい事になつてしまう、此點に付ては諸君に哲學上の解釋を與へやうと云ふのではない、只千九百年の間に學者達が議論を

なし研究を致した結果は、如何なつて居るかと云ふ事を一言申して置きたいと思ふ。

先づ是れは二ッに岐れてある、一は神が人となつて世に降り給ふたと云ふ事、佗は神が人に充ちて世に出で給ふたと云ふ事である、前者即ち神がイエスと云ふ人間になつて、此の世の中へ降りになつたと云ふ事は、多くの人々の信ずる說である、後者はイエス、キリストと云ふ人が此の世の中に生れた、その人に天の神が限りなき聖靈を以て充滿ちて居らせられたから、イエス、キリストは取りも直さず神を表はしてれ在でなさるのであると云ふ說になつて居る、此の兩說は今日學者達が負けず劣らずに主張して大いに議論を戰はして居る譯であるから今私共は何方の說が眞であつて、何方の說が誤であると云ふやうな判斷を下すのは少し早いのである、蓋し隨分六ケしい問題で天下後

世に至るまで議論の盡きることはないかと思ふ、夫れで今私がお談し申すが如くに哲學的にキリストの性格を論ずるよりも寧ろ倫理學的に説明を致さうと思ふ。

其説明をなすに先ち先づ聖書に付いて、キリストが神の子だと云ふ言の意味を研究するの必要がある、第一に約百記第一章六節に「或日神の子等きたりてヱホバの前に立つサタンも來りてその中にあり」とある、是れは誰を云つたのであるか、此所では天使達を指して神の子等と錄いてある、路加傳第三章三十七節には「アダムは即ち神の子なり」是れは初めて造られた人間を指して神の子としたのである、出埃及記第四章二十二節に「ヱホバかく言ふイスラエルはわが子わが冢子なり」此所ではイスラエルの人民全体を指して神の息子と示してある、撒母耳後書第七章十四節に「我はかれの父となり彼はわが子となるべ

し」是れは猶太國の大王ダビデを指して、彼れは我の子だと云ふヱホバの言である新約全書には約翰傳第一章十二節に「彼を接その名を信せし者には權を賜ひて此を神の子と爲り」とある、斯樣に天使をば神の子、アダムをば神の子、イスラエル人を神の子、王公をも神の子、又イエスを信ずる人々をも神の子と書いてある、して見ると神の子とは如何云ふ意味であるかと云ふと、實に漠然たるものである、そこでイエス、キリストが此の世の中に在しました當時の人々が如何なる意味を以てイエスの事を神の子と稱へたか又イエス、キリストが自ら神の子と自覺なされたかを調べる必要がある。

扨て前に本文に讀みし如く、イエスがお弟子方に向つて世の中の人は私の事を何と云ふて居るかとお尋ねなされた時に、爾はヨハネ又はエリヤの再來だと云ふもあり、又爾は預言者の一人であると、

取沙汰をして居ると申上た、夫ならば汝等は、何と云ふかとお尋ねになつた時に、ペテロが眞先に進んで、爾は活神の子キリストなりと力を入れて答を申した、するとイエス、キリストは是は其方の發意ではない、天の父が其通りにお示しになつたのであらう、我はペテロ即ち岩の上に教會を建つると云つて、實に悦んでお賞めなされた譯である、如何ですか天使とかイスラエル人とか王公とか云ふ意味で神の子と云つても、爾うお悦びなさる譯はない、是れには矢張深い意味があらうと思はれる、又馬太傳第二十六章六十三節を開いて御覧なさい、イエス、キリストが祭司の長の前で裁判をお受けなされた時に祭司の長がイエス、キリストに向つて、汝は活神の子キリストであるか、私は汝を活ける神に誓はして神の子キリストなるか否やを知たいと云つて嚴肅に尋ねた、此一言にてキリストの首が落るか落ないかと云ふ大切

な場合である、するとイエス、キリストは如何にも汝の云ふ通りである。と仰せられた、ところが祭司の長は自分の着て居つた衣服を、メリ〱と引裂いてしまひ、顔色を眞赤にして汝は神を瀆したと云つて怒つたと錄してある、ヴエントと云ふ學者が、是れはイエス、キリストが大工の子であつて、その卑しき身分の者が王樣でなければ神の子と稱へないのに、自分が王侯の如く尊い神の子であると云つたから、祭司の長が衣服をメリ〱と裂いたのであらうと云つて居るが、私は其樣な淺薄な意味ではない、確かに特別なる神の子、即ち人間以上の者であると云ふ意味が籠つて居つたに違ひないと思ふ、又約翰傳第五章十八節を讀んで見ると『此に因てユダヤ人いよ〱イエスを殺さんと謀るそは安息日を犯すのみならず神を己が父といひ己を神と齊すればなり』とあるユダヤ人が眞赤になり如何しても

イエスを殺さなければならぬと云つて非常な策略を遣つて居る、何故爾う云ふ事をするかと云ふとイエスは安息日を犯しなされた、夫れだけならば未だしもの事であるが、天の神は私のお父様だと申して御座る、かくの如く御自身を天の神と同樣なものになされたから、このイエスは如何して生して置く事が出來やうか、實に神を瀆したものであると云つて、ユダヤ人が殺氣を含んで立向うたと思はれる、人の子と仰せられた時には、人間の代表者であると云ふ事が明白である如く人々がイエスをば神の子であると稱へ、又イエス御自身も自分は神の子だとの自覺を以てお立ちなされたときには、この神の子と云ふ言葉は、少くとも神を代表して居ると云ふことだけは明白である。

そこで今一歩を進めて、それならばイエス、キリストは神に就いて何を

代表なされてあるか、その神をお顯はしになると云ふのは何をお顯はしになるかを考へねばならぬ、約翰傳第十四章九節に『イエス彼に曰けるはピリポ我かく久く爾曹と偕に在しに未だ我を識ざるか我を見し者は父を見しなり何ぞ父を我儕に示せと言や』とある即ち私は汝と共に三年の間寢食を共にして居るではないか「バプテスマ」のヨハネの洗禮を受けてより只今に至るまで、私が考へも行ひも亦私の顔相に顯はれた事も皆汝等は見て居るであらう、夫れに未だ私が分らないか私を見た者は父を見たので、自分の生涯は此通りである、最う少しも包み隱す所はない、汝等の見る通りだと云つて、御自身の生涯をばピリポ其他の弟子達の前に顯はしになつた、言を換へて云へば私は即ち天の父の代表者であると云ふ意味である、そのイエス、キリストが水の上をれ歩きになつたり、盲人の眼を明けたり死人を蘇生らせたりなされた、その奇蹟の

行爲に就いて考へて見るときには、キリストは確かに全智全能の神を顯はして御坐る、約翰傳第三章の初めを見ると、ユダヤ人の司たる者が來て汝は天より來りした方であると信ずる、若し天の神が汝と共に在まさゞれば爾は斯の如き奇蹟を行ふことは出來ないと云つて驚いて居る、斯樣にイエス、キリストが諸々の奇蹟をれ行ひになつてある所を見ると、イエス、キリストが全智全能の神をれ顯はしになつてあるが如くに見ゑるのである。

けれども爰に大いに考へなければならぬ事は、イエスが盲人の眼を明けても、聾の耳を聞ゑさしても、死人を蘇生らせてもその奇蹟をれ行ひなされたる度毎に、決して他の人に云うてはならぬぞと云つて奇蹟を人々に吹聽することを堅くれ止めになつてある、若しもイエス、キリストが全智全能の神をこの世の中に顯はすと云ふことが御目的であり

たならば、大勢の人々の前に奇蹟を顯はし、全智全能の神だから斯ふ云ふ事が出來ると云つて、彼方でも此方でもお示しにならなければならぬ筈である、然るに爾う云ふ事はない、たゞ爾曹は靜かに家に歸つて深く天の神を信じ、神の御榮を顯はせとお敎へになつた、路加傳第十章二十一節二十二節を開いて見ると、イエス、キリストは何をお示しになつてあるか、弟子方が傳道から歸つて來て主よ實に此度と云ふ此度は非常な事で、即ち全智全能の神の力を顯はす事が出來ましたと云つたときに。イエス、キリストは『我なんぢらに蛇蠍を踐また敵の諸の權を制ふる權威を賜たり必ず爾曹を害ふ者なし然ども惡鬼の爾曹に服しゝ事は喜とする勿れ爾曹が名の天に錄されしを喜びとすべし』と答え其樣な非常な力を顯はした事を自分は喜びはしない、たゞ爾曹の名が神の手帳に錄された事を喜べと仰しやつた

『此時イエス心に喜びて曰けるは天地の主なる父よ此事を智者と達者とに隱して赤子に顯し給ふを謝す父よ然それ是の如きは意旨に適るなり。父は万物を我に賜ふ父の外に子は誰なると識者なく亦子および子の顯す所の者の外に父は誰なると識者なし』とある、尙其後を讀んで御覽なさい『イエス弟子を顧て竊に曰けるは爾曹が見ところの事を見るその目は福なり』是れは何をお示しになつたのであるか、奇蹟を行ふた事や全智全能の神を顯はした事ではない、われを識る者は天の父である、天の父を識る者はわれである、われが天の父を顯はすにあらざれば誰も天の父を顯はす事は出來ない、アヽ父よ智者と達者とに是れを顯はし給はずして、この赤子に顯はして下された事は如何にも有難いと云つて、イエス、キリストが天の父を顯はされた事を非常にお悅びになつたのである、して見るとイエス、キリストが現世にお降りになり御

生涯の働きとして全身全力を籠めてお盡しなされたのは何であるか即ち天の父を顯はすと云ふ事である、十二の年にエルサレムの宮に於いて學者達と問答をなされた時でも、イエス、キリストのお心は天の父と云ふ所に達して居つた、或は祈禱をなし、說敎をせんとして口をお開きになるときには每も天の父と云ふ事をお顯はしになつたのである。右述ぶる如き譯であるから、私共がイエス、キリストの御生涯を深く味ひ來るときには、即ち其御生涯は天の父の御生涯であつたと云ふ事を認め得るのである、その天の父を顯はし給ふたと云ふ事に就いて諸君は之れを如何にお味ひになるであらうか、佛蘭西の不信者のルーソーが『ソクラチスは毒酒を飮まされて死んだ、その死狀が聖人の死狀であるならばナザレのイエスが十字架の上に殺された、その死狀は確かに神の子の死狀である』と申したが、ル

ーソーの如き不信者でも斯の如き事を口にして居る、イエス、キリストが十字架上にれ懸りあされたとき、検視の役になつて居つたる百人の長が、あゝ、是れは實に正しき人であると云ふ事を自白して居る、何故であらうか、イエス、キリストは生涯の間に千々に心を盡し、人々をれ愛しなされたのでありますから、キリストが血の汗を絞つて天の父の前で十字架に懸り人間として受くべき苦惱の中では其の極であると云はれる、磔刑に罹つて死をお遂げなさるときに、キリストは何樣な顔貌をなされて居つたであらうか、又如何なる心持をなされて居つたであらうか是等の事は聖書に錄いてない、けれどもイエスの又弟子のステパノが石にて撲殺される前に、其顔貌は恰も天使の顔の如くに輝いて居つたと錄いてある所を見ると、イエス、キリストは確かに天使よりも更に輝ける顔をなされてあつたらうと思ふ、是れは私の想像で

ある、キリストが今將に殺されんとされるときに、己れを殺す敵の爲に天の父にお祈禱をなされて、父よ彼等を赦し給へ、どうぞ彼等に罰をお與へなさらぬやうにと云ふお言葉がその御口から迸り出でた事を深く味ふて見るならば、如何にもイエス、キリストの十字架上に於ける死狀は神の子の死狀であつたと申す事は適評である、蓋しキリストは絶命の際に祈禱をして天の父をお顯はしになつた、即ち天の父の限りなき愛をばお顯はしになつたのである、亞米利加のヘンリー、コールスと云ふ人が『人間の前に天父を顯はせるイエスの生涯を見るに、天の父の性格、天の父が罪人を憐み給ふ聖意、悔改むる信仰者に對するの愛、その忍耐同情堅く約束を守らせ給ふ忠誠に就いては完全なる代表者にして能く天の父を顯はし給へり』と云つたが實にイエス、キリス

トは完全に天の父の御性格をお顯はしになつたのである、即ち神は如何に人間を憐み給ふか、如何に罪人を慈み給ふか、又信仰する者に對しては如何にお盡しなさるか、或は如何に約束を堅くお守りになるかと云ふ天の父の大聖意と、云ふことになつて來ると、イエス、キリストは全く懸値なしに天の父をお顯はしになつたのである、

ヘンリー、ウオールド、ビーチョルが『キリストの徳性を以て神を書けば爰に完全なる神が出來る、神を理想して畫ける徳性は一としてキリストがお備へになつて居らせられぬものはない、故にキリストは神でなければならぬ、われは手を合してキリストを神として拜する』と云つた、之れを私共が哲學的に考へるときには、神が人間になつたと申してもこの天地間に容るゝことの出來ないやうな大きな神が如何して人間にお成り遊ばすことが出來るか、即ち神が人間に成つたと云ふ

のは如何云ふ意味であるか分らない、私共の小さなる頭腦では到底充分に氷解することは出來ないのである、けれども倫理學的に研究するときには、四福音書に據つてイエス、キリストの三十三年間の御生涯を觀、尙天父の前に膝を交へて、殊更にイエス、キリストは如何に人間を愛し給ふたか、如何に淸らかなる生涯をお送りなされたか、又御自分に敵對する者に向つては、如何に寛大なる心を以て是れをお迎へなされたかと云ふキリストの御高德を靜かに考へて、馬太傳には活神の子とあり。約翰傳には我を見し者は父を見しなりと錄してあるからには、イエス、キリストは取も直さず天の父の淸らかなる御德をお顯はしになつた、即ち天の父の聖德がイエス、キリストに依て充分に顯はれたのであると云ふことを知るのである、私共が天の神を知らうと思ふとき

には、成程日月星晨を見ても分る世界の草木鳥獸を見ても分る、又は人間の心を尋ねて見ても分るけれども右お談し申すやうな天の神の倫理性と云ふ高潔なる聖德を學ぶと云ふことは、イエス、キリストに據らざれば分らない、天の神の御性質は、イエス、キリストがお顯はしにならなかつたならば、私共は之れを知ることが出來ないのである。

それでイエス、キリストが智者と達者とには顯はさずして赤子に顯はし給ふを謝すと云はれた一事は、イエス、キリストが天の父を眞に私共赤子に顯はし給ふたと云ふことであるから、ソクラチスに行つて尋ねて見ても、私は天の神のある事は分つて居るけれども、神の聖意などは知らない、孔子に行つて尋ねて見ても、皇天上帝と云ふことは分るなれども、神の御性質などは分らない、釋迦に行つて尋ねて見ても、私は其樣な神と云ふ者は知らない、人間の心の外に心と云ふものがな

いと思つて居ると云ふであらう、釋迦の如きは全で神の事は考へもしなければ知りもしなかつたのである、自餘の學者も皆天の父と云ふ事は分らない、然るにイエス、キリストは常に天の父に祈禱をなし、天の父とは斯樣なるものであると云ふ事を御自身の性格の上にお顯はしになり、而も自らわれを見たる者は天の父を見たのだと斯う仰しやつたのであるから、私共はイエス、キリストに依て天の父を學ぶことが出來る、之れを學ぶことに依て私共の汚ない心を段々に清めて行き、遂には少しも曇りのなき天の父を仰ぐことが出來、全く我心と天の父の聖意とが密着するやうになり、天の父の聖意が我心の中に這入つて、天の父と我とが一になつてしまふのである、斯くなつてこそ私共はバウロと共にアヽ父よと云つて天のお父樣を崇むることが出來る又天のれ父樣もわが愛する子よと云つて私共を愛して下さるのである、是

れは何であるかと云ふと、取も直さずイエス、キリストが私共と天の父との間に立つて媒介となり、私共に確かりと天の父を顯はして下されたからして、私共はイエス、キリストの御功績に因り天の父を知り、天の父の所に達すると云ふ譯になつて來るのである。

私共がイエスキリストに向ふときには、假令キリストが神であつて現世へ降りになつたのである、或は人が神に滿されて現世に顯はれたのであると云ふ何方かの議論に歸着しても、私共の心に前に書かれる所のイエス、キリストは即ち天の神の聖徳を備へ、天の父を完全圓滿にお顯はしになつた御方であるから、私共はヘンリー、ウォールド、ビーチョルの云つた如くにイエス、キリストは神でなければならぬ、故にイエス、キリストを神として拜むと云ふことは適當なる事柄である、私共はイエス、キリストを聖人とは云はない、私共はイエス、キリストを聖

人の聖人とは云はない又至人とも云はない、イエス、キリストは特別なる意味に於いて神の子であつて、天の父をば完全圓滿に顯はし下されたる私共の救主であると信じて、何所々々までもイエス、キリストに歸依するのである、どうか諸君、ペテロが云つた如くに爾は活神の子キリストなりと云ふ信仰を以て、その信仰の上に堅固なる教會を建設せられたい即ち諸君の信仰がますます確實に進歩發達せられんことを希望して止まないのである。

第三章　十字架の眞意（聖餐の說敎）

蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且おほくの人に代り其命を予て贖とならん爲なり（馬可傳第十章四十五節）

此の十字架と云ふのは古代の國々に於て行はれ、殊に羅馬人が罪人を

死に處する極刑であつた、併しながら羅馬の士民は極刑に處せらるゝ事なく、奴隷若くば屬國の民を罰する爲に用いたので、實に野蠻極つた刑罰であつた、イエス、キリストが十字架に懸り玉ふてより以來、信者の間に於ては漸く此の十字架を崇ぶやうになり、種々の模型を拵へて十字架の死を紀念する事となつた、コンスタンチン大帝の母ヘレナが紀元三百二十六年にエルサレムに上つて地下十數尺掘下げたときに、其の深い地中から三個の十字架が現はれ、而も其中の一個には方伯のポンテオピラトが『此はユダヤ人の王イエスなり』と書して罪標を附けた儘にして見出されたと云ふ話もある（多分作り話であらう）夫れより第六世紀の頃になつては、十字架を拜むやうになり、遂に偶像としてしまつた、是れは獨り天主敎希臘敎に於いて十字架を押崇ぶばかりではなく、新敎に於ても之

れを尊ふやうになり、十字架と云へば乃ちキリストが、罪人の爲に命を棄て玉ふたと云ふ記號になつたのである。

此の十字架と云ふ事に就て二の過つた考がある、一は外形に重きを置き過ぎた、蓋し今れ談し申した如く天主敎なり希臘敎なりに於ては、金銀或は木石の類を以て麗しい十字形を造り、之れを頸に懸けて居るものあり、又恰ど日本で猿田彦大明神の置かれてあるやうな塲所に十字架を立て、其前に行つて掌を合して拜んで居る國もある、實に沙汰の限りである、新敎の方ではさう云ふ馬鹿な事はしない、けれどもイエス、キリストが人間の爲に肉を裂き、血を流し玉ふた、此のキリストの肉は大切である、此の血は大切である、實に淋漓たる鮮血の流るゝ所が大切であつて、キリストの血にて人間が贖はれたのであると、云ふ点に重きを置た、聖書にも爾う錄いてある所もある、けれども夫れは外形のことで、

キリストの肉とか血とか云ふやうなことを物質的に考へては、左程の意味がないやうに思はれる、約翰傳第六章六十三節に於いて『生命を賜る者は靈なり肉は益なし我があんぢらに曰し言は靈なり生命あり』とあつて、肉躰のことは何でもない、我が言ふ所は生命のことで、決して肉躰を喰へと云ふのでもなければ血を舐めよと云ふのでもない、眞正の意味は乃ち心靈のことだ、生命のことだと云ふ點に力を入れてお示しになつたのである。

其次は何であるかと云ふとキリストの御生涯と十字架の死を引放してしまつた、天主敎や希臘敎に於いては其の十字架に懸り玉ふた事ばかりに重きを置き新敎の方にても或者はイエスの十字架の死さへ信ずれば宜い、彼の一向宗の徒が南無阿彌陀佛と唱ひさへすれば即身成佛疑なしと云つて居るやうにキリストの十字架を念じさへすれば如

何な罪人でも救はるゝと云ふ點へ、大そう力を入れて説いたものである、それは成程其通り大切なれどもキリストの全生涯と引放して見るとは間違ひである、矢張りイエス、キリストの十字架は御生涯の續であつて、全生涯の中に盡された事が遂に顯はれて十字架と成つたのであるからして、如何しても之れを引放して見ることは出來ないのである。さらば其十字架の眞意は何であるか、と云ふ事を考へる必要が起つて來る、歴史上の事を曰へば、ユダヤ國に於いて權勢ありし「サンヒドリム」會議の議員が張本人となり、ヘロデ黨も加はれば「パリサイ」黨も加はり、如何してもキリストを亡き者にしなければ自派の面目が立たないと云ふ考からして、鵜の目鷹の目でキリストを引張うと睨んで居つた、ところが如何しても手掛りがない、然るに十二門徒の一人なるイスカリオテのユダが、自分が内通をするから銀三十枚を吳れろと云ふので、僅

か拾九圓ばかりの金圓で大切な先生のイエスを敵の手に賣渡すやうに計ふた、さうしてキリストがケツセマ子の園で祈禱をなされて居る所へ羅馬の兵隊を率て押掛け來りキリストを縛し終にエルサレムに引きゆき祭司の長やピラトの前にて酷ひ目に遭した、ピラトも初めは助けやうと思つたが人望を失つてはならないと云ふ所から、イエス、キリストに向つて無法の裁判を下し、之れを十字架に釘けることになつた、是れは歴史上の出來事であります。

斯の如き出來事を考へて見ると我朝にては佐倉宗五郎が二百有餘名の農民に代つて德川將軍に直訴をなし、遂に佐倉藩吏の爲に磔刑に遭ふたと云ふ事あり、又希臘に於てはソクラチスは大道を唱へた爲にアゼンス人民の憎惡を受け、遂に毒酒を呑さるゝと云ふ慘刑に遭ふた事がある、是等は皆歴史上の出來事であつてイエス、キリストの死なれた

のと少しも異りはない、けれども玆に考へなければならぬ事は、キリストが十字架に死なれたる眞意を尋ねて見ると、イエスは死ぬまいとお考へなされたならば、夫れは何程でも遁るゝべきの道はあつた、然るにその殺さるゝ一年も一年半も前からして、自分は如何しても命を棄なければならないと思つてお在でなされた、殊にゲツセマチの園に於けるお祈禱の次第を考へて見るならば、我が心いたく憂へて死ぬるばかりであると仰せられ、實に泣の涙で血の汗を絞り、若し死なぬでも宜いことならば死なずして救の道を立たい、併し死なねば救の道が立たぬならば、オヽ父ヨ、聖意に任し玉へと、非常な苦痛をもつてお祈禱をなされた、此點が佐倉宗五郎や又はソクラチスと異る所であつて、何にかこゝには深き意味がなくてはならない。

そこで其の深意を考ふるに當つて、只此所へ十字架だけをボーンと持

出して來て考ふる譯には行かない、イエス、キリストの御一生殊に「バプテスマ」のヨハネに洗禮をお受けなされてより後、三年の間の御生涯に付て深く考へて見なければならない、キリストは何と仰しやつたか、私が本文に引いた如く『蓋人の子の來るも人を役ふ爲に非ず反て人に役はれ且おほく人に代りその命を予て贖とならん爲なり』とあつて、此の人に役はるゝと云ふ一言はキリストの全生涯を表して居る、空飛ぶ鳥は巢あり地に這ふ獸は穴あり、されど人の子は枕する所なしとあるが、イエス、キリストは何が爲に枕を高うする所もなくしてお骨折になつたか、又住ふべき家もなくしてお苦みなされたかと云へば、みな是人に役はるゝ爲である、キリストは始から終に至るまで、家に在つては母親のマリヤに役はれ、門弟子をお取りになつては、其の門弟子を薰陶る爲に役はれて御自分の生涯をお盡しなされた即ち多く

の弟子方がキリストに寄縋つて來ると、其の寄縋つて來る者に役はれてお在でなされた、世の中の人は人を役ふやうになつたら一番エライものだと思つて居るが、イエス、キリストは自分が現世へ生れ出でたのは人に役はるゝ爲であると仰せられた、言を換へて云へばイエス、キリストの御生涯は献身犧牲の生涯である、イエス、キリストの御生涯は一點の私心もなく、實に純然たる愛の生涯であつたから人の爲に手足を役ふくらゐな事は何でもなく、其全心全力をお役ひになつたが、それでも尙だ足らない、最後には生命をお棄になつたのである、人の爲に生命を棄るのは即ち献身犧牲否な献身的生涯の至極である、假令キリストが十字架にお罹りなさらなくつてもゲッセマ子の園に於て彼の苦しい祈禱をなされたときに、疲れて死なれたら如何であらうか、夫れでもイエス、キリストの犧牲の生涯は全く成就されたので、乃ち其の御目的

は達せられたのである、故にキリストが十字架に懸り玉ふたと云ふことは歴史上の出來事であるかあれども、其の出來事の奥の奥を尋ねて見ると、キリストは人間の爲に犧牲の生涯を送られ、其の結果何所まで達つたかと云ふと、御自身の大切なる生命を人の爲にお棄てになつたと云ふ所に歸着するのである。

けれども只犧牲の生涯のみに就いて申すならばそれは佐倉宗五郎が磔刑に遭つたのも、亦ソクラチスが毒酒を呑されて死だのも皆犧牲の生涯である、然らばイエス、キリストの異ふ所はどこであるか、即ち「おほくの人に代りその命を予て贖とならん爲なり」といふ、此點が十字架の眞意である然るに此の贖といふ事に就ては、實に種々ある議論があつて、其二三を擧ぐれば私が獨逸の神學者フライデレル氏に此の語句を引いて尋ねたとき、氏は「アヽ彼の語句であるか、彼れは贖に就

るパウロの神學上の考が彼所へ書込まれたのであらう」と言はれた、其後氏が「ニユー、ウオールド」と云ふ雜誌に書いた所を見ても同じ事を云つて居る、又或人は此の贖と云ふ文字は昔苦境に沈淪せる奴隷を金錢にて贖ひ出したときに用ひた意味ではない即ち是はイエス、キリストが人に代りてと云ふのではなくして、人の爲に贖になつたと云ふ意味だと説明する人もある、實に贖と云ふことに就いての學説は種々樣々であるが、私共は贖の説明に據つて生命を得るものでなければ、又それに據つて救はるゝと云ふものでもない、事の肝要なる所はイエス、キリストが私共人間の爲に生命を棄てゝ、れ死になされたと云ふ事である、其の生命を棄てゝ死んだのは佐倉宗五郎もソクラチスも同じ事であるが、イエス、キリストのれ死なされた事だけが何故に贖であるか、如何して救となるか、是れが不思議だと云ふ考も出るであらうと思

ふ、之を考ふるには前に申上げた所のイエス、キリストが、「我心いたく憂て死るばかりなり」と云ふやうに、如何して其樣に御心配をなされたかと云ふ事を味はねばならぬ、ソクラチスの如き聖人でも從容として死に就いた佐倉宗五郎でも死ぬる際に女房や子供が眼の前で虐殺されたから怒つたのであるけれども、矢張り死ぬる覺悟を決めて居つた、殊にイエス、キリストの爲に殉敎した輩の中には、讃美歌を唄ひつゝ、死んだ人も多くある、斯く門弟子ですら笑つて死に就たのに、イエス、キリストは何故に、我心いたく憂て死るばかりなり」と云ふが如き苦惱をなされたか、又何故に此の苦き杯を我より取り放ち玉へと云つて三度までも天父の前に血汗を絞りて祈禱をなされたか、之には何か深き意味がなければならぬ、イエス、キリストが非常な苦痛を忍び、十字架上には「吾神わが神なんぞ我を遺たまふ乎」と云ふ言をれ吐きになるまでに

は、實に最う人間の知らない程の苦惱をお舐めになつたのである。

斯の如くにイエス、キリストがお苦みになつたのは何か其所に深き理由がなければならないと云ふ事を考ふるに神は愛の神である、而して此愛の神の愛には動かすべからざる正義の確存るあり、イエス、キリストの聖意の中にも實に打消すべからざる正義が充滿ちてあることは明白である、言を換へて云ふと此の天地の間に於いて神の大聖意を考へて見ても、イエス、キリストの聖意を考へて見ても、亦人間の心を考へて見ても、總て人格を備へたる者は正義を以て貫れてあるイエス、キリストがゲツセマ子及び十字架上にお苦みなさるときにも、其の聖意を貫いて居つたものは正義といふ考であつた、

何故に斯の如き苦惱をなされたかと云ふことを考へて見なければならない、福島の裏家や今宮の百軒長家に住んで居る人民中には、嘘を吐

くのも平氣、博奕を打つのも平氣と云ふやうなものもある、かゝる親達は我子が嘘を吐いたと云ふときにいか程の苦みを爲すであらうか、我子が盜賊をしたと云ふときにどれ位苦むであらうか、さほど氣に致さないであらう、けれども御互ひの子供が嘘を吐いたとか或は盜賊をしたとか不義淫行をなしたとか云ふやうな場合にはいかゞでせうか、我心は張裂けるばかりになるであらう、蓋し私共は右の裏家に住む人々と比せば、正義といふ考が胸中に、より、多くあるからである、正義の考があればあるほど、私共は罪を見て深く苦しみ悲しむものである。

右の如き譯であるからナザレのイエス、キリストがゲッセマ子の園にてお苦みになつたのも十字架上にてお惱みになつたのも、亦全生涯の間その聖意を苦しめ玉ふたのも、皆是れ私共人間の罪惡の爲である此

の私共人間の罪惡といふものがイエス、キリストの聖意を苦しめ、夫れが爲にキリストは如何かして人間をば罪の中より救ふて遣りたい、惡の中より救ふて遣りたいと云ふ精神が充滿ちてお在でなされた、然るに人間は如何しても罪と惡とを脱るゝことが出來ない、到頭キリストはゲツセマ子の園に於て縛られ、十字架上に殺されなければならないと云ふ場合に迫つた、其の瞬間にイエス、キリストは天地の神の前に立ち、仰いで神の正義を思ひ、內に顧みて己が心を貫いて居る神の義を思ひ又俯して人の義を思ひ而して人間の罪惡と云ふことをお考へなされたときには、その聖意に堪へられないやうになり「吾神わが神なんぞ我を遺たまふ乎」と云ふ御語句をお吐きなさらねばならないやうに、なつたのである、夫れでイエス、キリストの十字架と云ふのは獻身犧牲ばかりではない、即ち苦惱の符牒である、其の苦惱の符

牒の中に何が表はれて居るかと云ふと、私共は正義と罪惡との二者が闘うて居ると云ふことを思はなければならない。

そこで諸君、イエス、キリストが全生涯の間犠牲となつてお盡しになり、遂に十字架上に生命をお棄てになつた、其の十字架の眞意を考へるときには、一面には神の正義、佗面には人の罪惡が現れて來る、ソコデ私共が其のキリストの愛を思ひ、正義を思ひ、また罪惡を思ひ、眞に其深意を考ふるならば、イエス、キリストの愛情に驅られて、嗚呼我々の爲に夫程までに苦しんで下されたのならば、如何しても我々はイエス、キリストの聖意を慰めなければならない、如何しても我々は此の罪の中に何時までも在ることは出來ないと云ふ所から彼の放蕩息子が豆莢を喰ふやうになつて父の慈愛の程を思ひ、さうして父親の許へ歸らうと云ふ考を起したやうな工合に、私共は此の罪と惡とより脫れたい、即ち悔改めた

いと云ふ考が胸に起つて來る、斯くしてイエス、キリストが私共の爲に命を棄てゝ下されたと云ふ、其の御慈愛の深きを思ひ、私共が正義の方に從いて行くと云ふことになると、私共の心の中に在つた所の罪惡は退いてしまい、私共は正義と接吻して、心の中に確りと正義が宿つて來ると云ふことになり、恰も放蕩息子が改心して父の所へ歸るときに、父が途中まで迎ひに來て双方顏を見合せ、息子は父が懷しく、父は可愛さの餘り息子の手を取つて抱いて吳れるのと同じく、私共の如き罪人、私共の如き惡人でも、イエス、キリストの愛に感じ、天父の愛に感じ、自分の罪の憎むべきことを知り、天父の許へ立歸り、正義に復歸しやうと云ふならば、其の瞬間に私共は天父に抱れるのである、さうして私共の罪と惡とは赦されて、全く天父と一致するのである、其の命を予て贖になると云ふのは、英語ではアットワンメントと云ふので、イエス、キリスト

のお取成に據つて我と天父とが一致和合するのである、即ちイエス、キリストの死に據つて我と天父とが全く結び附けらるゝと云ふ事になつて來るので、十字架の眞意と云ふものは其點に在る、再言すれば一面には献身犧牲を表はし、佗面には義と罪惡の憎むべきことを表はして、イエス、キリストが正義と罪惡との間に立ち、天の父と人間との間に立つて、此の二者を全く一ッに結び附けてしまはるゝ、さうして私共がアバ父よと云つて叫べば、天の父は悔改めたる私共に向ひ、オゝ我子よと云つて私共を聖手の中に抱入れて下さると云ふの眞意を表はしたものである、其の十字架を受くる所の私共は、イエス、キリストに倣うて献身犧牲の生涯を致さなければならぬ、夫れでイエス、キリストは我に從はんと欲する者は日々其十字架を負うて我に從へと仰しやつたのであるから、私共は其の精神を有つて行か

なくてはならない、本日諸君と共に麵包を割いて之れを食し、葡萄酒を啜つて何をするかと云ふと、即ち私共がイエス、キリストの十字架を味ふと云ふ事であるから、どうぞ聖餐の式を守らるゝ方々は、深く右の眞理を味ひにならんことを希望する。

第四章　祈禱の眞意

眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時きたらん今その時になれり夫父は是の如く拜する者を要め給ふ、神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也(約翰傳第四章二十三節二十四節)

祈禱は天地の主に對する我意の志望である、其志望の顯はるゝ所が感謝となり、謝辭となり、取成となり、祈願となり、乃ち我意、我口が天地の主

に向つて其志望を告白するのである、デーンワガン曰く『祈禱の實意は二つの心靈「我」と「我在」の會合であつて、思想と談話、生命と相愛、此の二者の交際なりと、』一体祈禱と云へば言葉に出さなければならないやうに考へて居る人が多いが、眞正に祈禱をすると云ふときは情が切になつて來て言葉に出せるものでない。即ち心の思だけが天上の主に交際するのである、凡そ心意の活動に於いて、祈禱ほど貴いものはない、祈禱ほど深奥なものはない、或は信仰に進むと云ひ、或は心靈を養ふと云ひ、或は潔き生涯を送ると云ふには、如何しても祈禱に進まなければ、其の佳境に入ることは出來ない。

そこで祈禱には、何か其の根據がなければならぬ、たゞ何うも空を攫むやうに祈つても妙味がない。祈禱の根據は主觀的に云へば、御互に人間は性質上信頼すると云ふものがあつて、迂濶といたして居るとき

には俗事に追はれたり、たゞ忙しいばかりであつて、何も分らずして日を送つて居るかなれ共、御互ひの生涯の間には時と場合によつて、何うも自力では叶はない、最う首を縊らうか、井戸に陷らうか、九寸五分を腹に突込まうかと云ふやうに非常に迫つて來る事がある、其の迫つて來る塲合は如何であるかと云ふと、我よりも優れるものがあつて、其の優れるものにどうぞ此の腹の底を見て貰ひたい、尙出來ることであるならば、其の御方に救けて貰ひたいと云ふの觀念が切になつて來るのである、維新當時の豪傑譚の中に梅田雲濱が病める妻を病床に殘し、飢に泣く子を後にして、自分は縛られて行くときに腸が斷れんとした、其際にたゞ一言『嗚呼皇天皇土の知るあり』と云つた、是れは俗に天道樣が知つて御坐ると云ふ事でまさしく眞正の祈禱である、又彼の支那の聖人舜が父の瞽瞍に苦しめられ、弟の象に苛められ、天地廣しと雖も實

に我五尺の身躰の置所もないと云ふやうな場合に迫つたときに、戸外に出て蒼空を仰ぎ、さても〳〵と云つて號泣した、其の涙の底には何があつたか、即ち祈禱である、是れは聖人でも凡人でも凡そ人間の心を有つものは、生涯の間には二度なり三度なり眞底から祈らなければならないことが發生して來るのである、私の友人に一人宗教を棄てたと云ふ男がある、其男に君は多年の間世界各國を遍歷つたが、祈禱をする場合はなかつたかと尋ねた、すると其男が云ふには、自分は將に獨逸の大學を卒業せんとし、其の愈々試驗となつて來たときに、其眞最中に天の祐を仰ぎ求めた、又露西亞の深き林の中に紛れ込んで行くべき方を失うたときに、其の深林の中で天の助を仰ぎ求めたことがあると申したが、宗教を棄てたと云ふ男でも、斯る場合には矢張り天の祐を求めたのである、して見れば平素疊の上では神がない、宗教は要らない

と云ふ議論をする者が、非常の場合になると天の救を求むるに違ない、けれども祈禱の根據が夫れだけであるならば、私共は恰ど暗の夜に矢を番へて滿月に弓を彎張つたやうなものであると云はねばならぬ、弓を彎張ることは彎張つたが其矢を放つべき的がない、是猶は私共の四邊に住める國民の多くが、月の二十五日には天神を拜み、月の二十一日には大師を拜むと云ふやうな譯で、何となく彼となく拜むと云ふことは各自の胸に植込まれてあるから拜むのであるが、實は暗の夜に弓を彎張つたので的も何もない、夫れは眞正の祈禱にはならない、キリスト、イエスもサマリヤの女に向つて『爾曹は其の拜すべきものを知らない』と仰せられた。

然らば私共は是れより進んで客觀的に祈禱の根據を求めなければならない、其の祈禱の根據は何かと云ふと私共の拜むべきものは實在者

である、彼の眞言宗に於いて大日如來を拜み、又一向宗に於いて阿彌陀如來を拜むけれども大日とか阿彌陀とか云ふものは、たゞ眞如と云ふものを具躰的に顯はしたものだと云ふのであるから眞正に悟を開いたと云ふ佛者には大日もなければ阿彌陀もない、それで眞正の祈禱が出來るかと尋ねて見たならば、ないものに向つて祈禱は出來ない、何も道理の分らない者所謂愚夫愚婦が大日如來樣とか、阿彌陀如來樣とか云つて拜むけれども、私共は如何しても爾う云ふものを一生懸命に拜むことは出來ない、然るに基督教の神は天地の奥に實在して御座るので、何所までも我周圍に在しますのである、それで私共が眞正の祈禱をなし、所謂矢を番ひて滿月に弓を彎張るならば、其の祈禱の矢は何所に行くかと云ふと、天地の奥に實在なさる所の神に達するので、是れが最も大切なる眞理である。

次に其の實在者は全智でなければならぬ、世界の表に於いて幾億幾千万の人間が祈禱をするが、其の祈禱をする人の心を悉くれ知りなさる、所謂知らざる所なきの神でなくては祈つても無益である、假令又私共幾百万幾千万の人の祈禱をれ知りになつても、其のお方に力がなかつたならば無益である、故に私共の祈禱を受くる神は全能者でなければならぬ、又其の神が今日は非常に人を愛して、明日は水の如く冷かになると云ふやうな變り易いものであつたならば、私共は祈ることが出來ない、が此の神は万古不易であつて、昨日も今日も尙千代万代の後までも決して變らない御方である。

そこで私共の祈禱を受くる神は實在し、全能で、全智で、万古不易であると云ふことであつたらば祈禱は出來るかと云ふに夫れだけでは不充分である、私共は其の大いなる神の台前に出て、畏み敬むと云ふことは

出來る、即ち畏れ入つてしまふことはあるが、祈禱のいの字も出て來ない、恰も田舍漢が　天皇陛下の前に出たやうなもので小さくなつてしまふ、キリスト、イエスが弟子方に祈禱を敎訓になつた、其の祈禱の第一の辭は天にまします我等の父よと云ふことで、此の父と云ふ一字が私共の祈禱の重なる根據である、如何でせう、私共が何か願事があると云ふときに、爰に金もあり、智惠もあり、能力もあつて、なか〳〵エライ人がある、併し其人は人類を愛する心は微塵もなく、眞に冷淡な男である、かゝる人に向つてまさかの時の相談は出來ない、私共の意は決して其方に向かないのである、如何なる人に意を打明けて相談に懸るかと云ば同情心の厚い君子である、天にまします我儕の父よと云ふ、其の一言の中には實在者――全能者――全智者――万古不易者と云ふ意味が籠つて居るけれども、其の最も重なるものは親にも優る同情心と云ふ

のである、キリスト、イエスが祈禱を教訓になるときに『爾曹惡しき者ながら我子が麵包を求めんに石を與へんや魚を求めんに蛇を與へんや』と仰しやつた即ち諸君は必ず我子に好き物を與へるではないか、況んや天にまします父が祈禱る者に聖靈をお與へなさらないことはないと云ふのである、實に天の神は親にも優る同情心を有つて在らせらるゝと云ふ所が私共は如何にも慕はしい、故に最う我胸の中に在る總ての念を打明けてお願をしたいと云ふ意になるのである。

尚はくわしく祈禱を説明致せば、是れは親心の神と子心の人とが互ひに結び着く狀態であつて、何とも云へない妙味がある、乃ち前に申た通り祈禱には感謝もあり、懺悔もあり、取成もあり、祈願もあるが、祈禱の妙處は子心の我が親心の神に行つてお話をするのである、キリスト、イエスは屢々星を戴いて山に入り東天明くる頃に山から下つてお

出でになつた、乃ち終夜お祈禱になつたのであるが、天地の神に向つて我罪を赦して下さい、我不潔なる心を憐んで下さい、我を救けて下さいと云ふ祈禱が一夜も續くであらうか、爾う云ふ祈禱を一夜も續けなければならないと云ふことであるならば、私共は死んでしまふであらう、印度のチヨンドルセンが毎日三時間も密室に這入て神に祈禱を捧げたと云ふが、彼は私共のやうにして祈つたのであらうか、私共のやうな祈禱であるならば三十分とは續くまい、チヨンドルセンは確かに其の長い時間を忘れてしまつて祈禱をなし、斯くして天地の主なる神にお交りをしたのである、お交りをしたと云ふのは此方から神樣にお話をする、又神樣の方からもお話を聽くのである、私共が人と相對したときに先方が瀧の水の流るゝが如くに談をして呉れると疲れてしまふ、又此方から談續けに話しても疲れてしまふ、此方から十

分間談をすれば先方も十分間談をし、先方から十五分間談をすれば此方からも十五分間談をすると云ふやうな譯で、此方が談をしては暫らく止めて、さうして先方の談を聽かなければならない、天の神に交りをすると云ふときには、此方から談を申上げて、神は我に何をお語りになるかと、其の神の靜かなる御聲に耳を傾けて、又此方から祈禱をなし、尙又神のお談に意を傾くると云ふやうに、子心の我と親心の神との間に於いて、興味津々たる面白い談が始まると、二時間でも三時間でも或は一夜の間でもお談が出來ると云ふことになる、是れが祈禱の最も味ふべき所である

試に見たまへ、彼のジョン、ノックスが『神よ、蘇格蘭土を我に與へよ、然らざれば我に死を與へよ』と云つたのは死を以て神に願を懸けたのである、又パトリック、ヘンリーが『神よ、我に自由を與へ給へ、然らざれば我に死

を與へよ』と云つたのは是又死を以て神に願を懸けたのである、キリスト、イエスも『我父よ若かなはゞ此杯を我より離ち給へ』と三度まで血潮の汗を流してお祈禱をなされ、又『然ど我心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ』と仰しやつたのは、キリストが衆萬人の爲めにかゝる救の道を立てんが爲に死を以て天の神にお願をなされたのである、私共は爾う云ふ大きな祈禱が生涯の間に出來るか出來ないかは存じないが、我子の將に死なんとするときに方り、天地の主に向つて救を求め又我事業の將に倒れんとするときに方り、天の神に向つて我を扶け給へと云ふ、其の祈禱を捧ぐることは確かに在るものであるが、諸君の中に、天地の父に交ると云ふことは我之れを認むる、然れども天地の主に祈願をすると云ふに至つては愚も亦甚だしいではないか、何となれば凡そ天地の間に於いて何所如何なる隅々を穿て見ても神の法則の行はれて

居ない所はない、夫れに纖弱き虫のやうな人間が神に向つて斯うして戴きたい、如彼して戴きたいと云ふたときに神は其の法則を曲げて、私共人間の祈禱をお聽きになるやうなことはあるまいと云ふ人があるかも知れぬ、是れは考へなければならない問題である、若し神が法則がらみの御方であつて、私共の祈禱をれ聽き遊ばす餘地がないと云ふことであるならば、我々が祈るのは無益である、けれども万物の靈長たる人間が此の天地間の法則を取扱ふ有樣を見るに譬へば爰に枳殼の株があつて之れに蜜柑の樹を持つて來て接いで御覽なさい、二年三年の間には立派な蜜柑の樹となつて麗はしい實が成る、是れは人間が自由の力を以て天則の應用をなしたのである、又此の世界には引力があつて總ての物を地に引着けるが天井より一の洋燈を釣下げるとすれば、洋燈は最う如何しても夫れより下には引着けら

れない、是れは人間が天井から鐵鎖を以て引張つてしまひ、下に引着けられないやうにしたからである、して見れば自由の意思を有てる万物の靈長たる人間が神の法則を變へることも出來る、即ち引力に抵抗するだけの力を以て來れば、引力に抵抗することが出來るのである、夫れならば、天地を御支配なさる神は規則以上に立つて、此の規則と彼の規則とをお用ひにあり、さうして人間の祈禱をするときに、其の祈禱をば天則に衝突しないやうにして、之れを聽納になることが出來ないと云ふことはない。

けれども諸君、爰に記臆しなければならぬ事は、私共が祈禱をするときに、イエス、キリストの聖名に據つて聽上げ給へと云ふ點である、即ち聖旨に叶ふならば、我が祈禱を聽上げ給へと云ふのは實に大切なる事柄であつて、私共は天地の法則を悉く知るわけでないから、或は天地

の法則に背くやうな願をするかも知れないけれども、神は天地の法則に背くことはお用ひにならないからして、甲の規則と乙の規則との運び方に據つて、私共の祈禱をお聽きなされる餘地をお作りになるだけのことを思ひ、たゞ我願を達せんとするにあらずして、聖旨の通りになし給へと斯う申さなければならない、既に神は世界の表に於いて一番エライ、万有の上に於いて一番エライと云ふ其の人間の切なる願を捧ぐる場合に當つては、天地の法則は變へてはならぬけれども、其の運用を善くして私共の祈禱をお聽上げ下さると云ふことを考へて見るあらば、私共は此の天の父に向つて、或は國家の爲、或は社會の爲、或は家庭の爲、或は我一身の爲に切なる祈願を捧ぐべき場合には之れを捧げなければならない、けれども爾う云ふ場合は御互ひの生涯には爾う澤山はないかも知れぬ、そこで普通の祈禱、即ち前に申上げた如く親心

の神に子心を以てれ交りをすると云ふに就いては、如何なる心情を以て御祈禱をいたしたら宜いかと云ふに、キリストは『神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也』と御教訓にあつたからには、私共は眞實なる精神的の祈禱を致さなければならないのである。

されば其の眞實なる精神的の祈禱と云ふに就いては、第一に準備を以て祈らなければならぬ、是れは御互ひが大いに思はねばならぬ事である、若しも人が私に向つて、どうかれ談を願ひますと云ふたらば、私は何も準備がないからお斷りを致すと云ふ、それではどうぞお祈禱を願ふと云へば、宜しいと云つて直ぐに祈禱をすることは出來る、けれども諸君、四邊に在る人間に向つて談をするのは、未だ間違ふも輕い事であるが、天地の主なる活神に間違つた祈禱をすると云ふに至つては、實に畏れ多いことであるから、私共は

密室に於いてたゞ獨り祈禱をするに致しても、先づ机に向つて聖書を繙き、聖書の語句を以て我心を備へ、稍少時念を沈めて考へた上頭を低げて天地の主にれ祈禱を申すと云ふことが順序ではあるまいかと思ふ、又公の祈禱と云ふ場合に於いては、殊更に準備をなし、今日は斯々の事を天地の主に求めやうと云ふ、其の筋を立てゝ祈ることも大切であると思ふ、不肖私も其の準備は怠つて居る、故に向後は矢張り準備を以て祈らなければならない、たゞ金曜日の祈禱會に出席するときには、其の朝靜かに夜の祈禱の爲めに用意をするから、何の準備もなくして參ることは稀であるけれども、何時如何なる祈禱をするにしても、整然と準備を立てゝ祈禱をするのが順序であらうと思ふ。

第二に御互ひの祈禱は眞實から出る者でなければならぬ、詩の五十一

篇十七節に『神の求め給ふ供物は碎けたる魂なり』と錄いてある、是れはダビデが罪を犯して人に責められたときに、最う骨も惴慄き、實に心は碎けてしまつたと云ふのであるから、其時には眞實の祈禱が出來たに違ひない、私共が疾病に罹つて死なんと云ふ場合か、又は我子が將に死なんと云ふ場合か、何か爾う云ふ切なる事情のあるときには、眞實なる祈禱が出來易いのである、けれども常の事としては眞實が乏しいやうに思ふ、何時如何なるときたりとも眞實を以て祈らなければ、其の祈禱は神の御前に達しない。

第三に祈禱をするには確實なる目的がなくてはならぬ、御互ひが祈禱をなし、頭を擡げて起上つたときに、君、今何をお祈りになつたかと尋ねられたならば如何であらうか、實は雲を攫むやうな祈禱をしたのだからして何も答ふることは出來ないけれども、前に斯々の問題を以

て祈ると云ふ確實なる目的があつたならば、其の祈禱から起上つたときは勿論のこと、一日二日經つてから過日のお祈禱は何であつたかと云はれても決して忘れては居らない、さうして今は神が答へ給ふや否やを待つて居る最中であると申すことが出來る、故に神の前では八百屋店を押開いたやうな、或は博物場の陳列品を見る如き複雜なる祈禱は出來ない、幼兒が母親の乳房を求めて來るが如く、私共が天の父の前に出るときには、一入確實なる目的を以て祈らなければならぬ。

第四には柔順なる意を以て祈らねばならぬ、私共が傲慢なる心、或は悖逆を喰はすと云ふやうな妙な念を有つて居つたならば、其の祈禱は決して神の御前に達しない、即ち神が左りせよと仰しやれば左りし、右せよと仰しやれば右すると云ふやうな、實に素直なる意があつた時には、

神は確かに答へ給ふに違ひない、斯う云ふ精神を有つて私共は祈るのである。ところが諸君の中に、然らば其の祈禱をすると如何なる靈驗があるかと云ふ人があるかも知れぬ、此の靈驗に就いては最早時間がないから説明をすることは出來ないが、ジョン、ノックスは蘇格蘭土を與へ給へと云つて蘇格蘭土を得た、パトリック、ヘリンーが我に自由を與へ給へと云つて自由を得たので、天の神は斯る切なる祈禱にはお答へなさると云ふことを申すと共に、第一には靈的智識を得て私共の心靈の上に神の奧深き眞理を味ひ、限りなき生命を悟り、キリストの愛の深さ——高さ——廣さを知ることが出來るやうになる、第二には勇奮勵精の源泉を得ることで、私共は最う氣が疲れ、精神が衰へて來たときに、天地の主に向ひ、赤心を以て祈るならば、自然と勇氣が増して來て、愈々勵んで神の御用を努めやうと云ふ氣になつて來る、其の勇奮勵精の源

泉を祈禱に據つて得るのである、第三には我が心靈の全部に活きた血が滿ち〳〵て來る、隨つて私共の信仰も增し、私共の智識も進み、さうして神の聖旨を以て書物を讀むやうになり、又聖旨を以て總ての事業を執るやうになるのであるから、學問も進めば事業も進むと云ふやうな譯で我が心靈の全部を高尙に爲すと云ふ力が與へらるゝのである、そこで此の祈禱は直ちに靈驗があるや否やと云ふ問題も起り來るであらうが、夫れは神の聖意に據り直ぐにお答へなさることもあり、三年五年經つてお答へなさることもある、將又十年十五年經つてからお答へなさることもあるが、私共はたゞキリスト、イエスの聖名に據つて天地の神に切なる祈禱を捧げ、而して其の神の御前に於いて愈々キリスト信者たるの資格を養ひ得て、神の御用を努むると云ふ事が最も大切である、其點に私共が達せんには如何しても祈禱を努めなけれ

ばならぬ、祈禱の妙味を得なければならぬ、御互ひの祈禱は空を打つが如きものでなく、主觀的に云つても客觀的に云つても其所に確かなる根據がなければならぬ、其の根據に基いて、諸君は實意を以て天地の神に祈禱をなし、一層高尙なる――一層奧床しい信者となつて、祈禱の生涯をお貫きになることを切に希望して止まないのである。

第五章　新生命

> 肉の事を念ふは死なり靈の事を念ふは生なり安なり、凡そ神の靈に導かるゝ者は是すなはち神の子なり、爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり
>
> （羅馬書第八章六、十四、十五）

近頃世の識者が、基督教に重きを置くやうになつて來たが是は、社

會事業とか、矯風事業とか、慈善事業とか云ふやうなものが大いに發達して參つたから、是れは何うも我國に大切なるものだと云ふ考より、基督教に意を寄せて見やうと云ふやうな思想が起つて來のである、けれ共基督教の眼目から申せば、先に申した事業なる者は所謂斯教の花であり實であつて其根本ではない、其眼目とする所は何であるかと云へば、將に枯れて死せんとする人間の心靈に新なる生命を與ふると云ふ点である、キリスト降世の當時にしても、亦現代にしても、文明とか、制度とか、道徳とか、宗教とか唱へて、大いに世道人心を振興せんとして居るが、是れは大旱に遭ひ將さに萎んで枯れやうとする草木に向つて水を灌ぐの類にて、成程水を灌げば、多少益する所もあらせうが、しかしその全部を蘇生らすことは出來ない、若し夫れ沛然として天から驟雨が降り來りしならば、既に死せりと思つて居た草木

が茲に芽を吹出し、暫く經つうちに青々たる綠の世界を現出する事となるのである。顧ふに、維新以來總ての機關は整備して來たが、何が我國に足らないかと尋ねて見たならば、他ではない、生命が足らないのである、又御互ひの中でも道德と云ふ上から云へば立派な道德家も居り、紳士もあらう、既にその形骸は備つて居るが、是れは恰ど佛の體を拵へて眼を入れないやうなものである、斯の如き事柄をば聖書には何と錄いてあるか、葡萄の幹から離れたる枝水のなき井戸、又は雨のなき雲とある、如何であらう葡萄の幹から離された枝は是枯れ枝、水のなき井戸は是無用の長物、又雨のなき雲は何の役に立つであらうか、形體はある、けれどもその大切なる物が中に這入つて居らない、キリストは約翰傳第十章十節に『我きたるは羊をして生を得かつ豐ならしめん爲なり』と云はれたが、是れが、眼目である、又使徒パウロが以弗所書第四章第二十二

節より二十四節までに『なんぢら夙に習る舊人すなはち人を惑はす慾の爲に壞らるゝものを脫、また爾曹の心の靈を新にし、神に象りて眞理の義と潔にて造れる新人を衣るべし』と云はれた、是等の意味を考へて見ると、如何しても御互ひの中に生命が這入つて來なくてはならない、この生命を得なかつたならば、他の物は悉く備つたと申しても、活動をすることが出來ない、諸君も既に御實驗があるだらうと思ふ、この生命が我中に這入つて居るときは、假令如何なる艱難が發生て來ても、其他如何なる場合に迫つても、決して失望することもなく、力を落すこともなく、我中には勇氣充滿ちてあるが故に、如何なる所でも打拔いて行くと云ふやうな元氣が出て來るので、實に何うも我ながら勇しいと云ふ念があるのである、夫れならば全く基督教を棄てゝしまつたと云ふ譯ではないけれども、この生命が我から脫けた

と云ふときには、僅かなことでも力を落し、失望をしてしまひ、最う到底是れは不可ないと云つて小さくなり、中には蒲團を冠つて呻吟き苦んで居る人もある、其點まで行かなくても最う度々欠伸をするやうな譯で、少しも中に勢がない、其樣な事であつたならば、私共は實に聖書が示す如く、幹から離れたる枝、水のなき井戸、雨のなき雲である、是れは能くも譬へたものである。

諸君はその新生命と云ふは何であるかと云はれるであらう、使徒パウロが靈の事を念ふは生なり安なりと云ひ、更に進んでもし神の靈なんぢらに住ば爾曹は肉に在で靈に在らん、その靈の事を念ふが生なりと云はれた、何であらうか、靈の事を念ふと斯う云へば、諸君は自分の心靈は何樣なものであらうか、この肉體は死んでも心靈は永遠生くべきものであらうか、マア其邊の事を考へるのが靈の事を念ふと云ふ意

味ではあるまいかとお取りなさるお方もあらうが、爰にパウロの云はれた意味は其樣な淺薄なものではない、肉の事を念ふは死なりと一方に非常な言葉を云ふと共に、他方に靈の事を念ふは生なりと云つたのであるから、この靈の事を念ふと云ふのは、我に靈を與へたる天父の大聖旨に通じて、その天父と我靈との間に溫な親しいものが出來て天父の事が忘れられぬ樣になり乃ち天父の意を以て我意とすると云ふ意味である、詳く申せば。商人が寢ても覺めても金儲の事を考へて居るが如く、天父の大聖旨を考へて、その大聖旨が我意のものとなり、考へやうとすれば天父の大聖旨、念はうとすれば天父の大聖旨と云ふ工合になり、常にその大聖旨が我意の中に映つて來る、夫れが靈の事を念ふと云ふのである。

されば諸君はその天父の大聖旨と云ふのは、如何して分るかと云はれ

るであらうが、馬太傳第五章の末尾に『夫天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へり』と錄いてある眼を開いてこの自然界の模樣を見ると、成程天父は公平にして、斯くの如き深き仁愛を以て人間に接し給ふと云ふことだけは分る、けれどもこの天地自然の現象に顯はれて來るだけでは充分でない、羅馬書第八章を讀んで見ると、使徒パウロが神の靈が我中に住むならばと云ひ、キリストの靈が我中に宿るならばと云ひ、又はアバ父と呼ぶ子たる者の靈なりと云つて居る、此點の深き意味を味うて見るならば、その天父の大聖旨と云ふものは、神の子たるイエス、キリストに據つて現はれて居る、私共は如何してもこのキリストを學ばねばならない。

只キリストを學ぶと云つただけでは未だ充分でない、羅馬書第八章二

十九節に『それ神は預じめ知たまふ所の者を其子の狀に傚せんと預じめ之を定む』即ちイエス、キリストの御狀に傚はせんとの主意である、又哥林多後書第三章十八節に『主の榮を見榮に榮いや增りて其れなじ像に化る也』と錄いてある、爾うすると私共はたゞ四福音書を開いて、イエス、キリストは斯う云ふやうな聖旨で談になつた、或は斯う云ふやうな聖旨をお有ちになつたと云つて、そのイエス、キリストの聖旨を學んだならば充分であるかと云ふと、夫れは無論學ばなければならぬ、けれども夫れを學んだ丈けでは未だ不充分であつて、實は私共がそのキリストを雛形といたし、全くその雛形になつてしまひ、夫れと同じやうに此方の狀を造ると云ふのであらうと思ふ、夫れで加拉太書第四章十九節に『我が小子よ我なんぢらの心にキリストの狀成までは復び爾曹の爲に產の劬勞をなす』と云つてある、爾うすると使徒パウロがキリスト

の御精神を受繼いで傳へた所は何點であるかと云ふと、私共がその神の子となり、その嫡子たるイエス、キリストに全く化せられて、キリストのやうな聖意になつてしまはなければならないと示したのである。かくなりさへすれば、最う何にも申すことはない、他に何も足らない所がない、夫れが新生命であらうと思ふ。

如何でせう、私共が朝起きて顔を洗ひ、先づ部屋の中に靜座したときに我心頭に現はれ來るものは、神の子キリストの御狀であつて、眼を閉ぢて考へ込めば、その天父の大聖旨が我意の中に充分に現はれて來る樣になり、聖書を讀み、祈禱をするうちに、我はこの肉の世界を離れ、全く天父の前に在つて、天父と眞實のお談が出來るやうになる、夫れから靜なる部屋を出で、食臺に向つて御飯を喰べるにしても、或は諸君が店に出て算盤を取り、商賣をなさるにしても、或は役所へ行つて事務をお取り

なさるにしても諸君の意の活動するや、いつも天父の念が現はれ來り、而して平生その天父を我意に念じて居るものであるからして、諸君の顔貌を見れは何となく麗はしい輝が現はれて居る、或は手を動かせば、その手の先は何となく天父の仁愛に充されて居る、斯く諸君の一擧一動には言はず語らずのうちにも天父の御狀が其所に現はれて居ると云ふやうになつて來ましたときには、舊き人は無くなつてしまひ、今まで肉體の事ばかり考へて居つた、その意が變じて今日は天父の大聖旨に符ふやうになつて來るのである、夫れが私共に這入つて來た所の新生命ではあるまいかと思ふ。然らば如何してその生命に達することが出來るかと云へば、使徒パウロは神の靈に導かれなければならない、キリストの靈に化せられなければならない、聖靈に動かされなければならないと、斯う羅馬書第八章に言葉を重ねて申

して居る、夫れで此三者は別物であるかないかと云ふ事は、神學上の議論であるが此所にパウロの申された所を味うて見るならば、是は神の聖靈が我意の中に宿り、我意を變化すると云ふことである。

そこで使徒パウロよりも、その先生のイエス、キリストに遡つて見ると、約翰傳第三章五節に『人は水と靈とに由て生ざれば神の國に入て能ざる也』と錄いてある、この新生命に這入らうとすれば、その新生命を得るに何が一番大なる妨害となるかと云ふ事を考へて見なければならない、パウロ曰はずや肉の事を念ふは死なりと、肉の事を念ふのが何故死であるかと云ふに、そは神に乖るが故なりとあり、また肉にをる者は神の心に適ふこと能はずと云つてある、そこで肉の事を念ふのは死であると云ふならば、夫れでは衣服の事を考へたり、飲食の事を考へたりするのも是れ皆死であるかと云ふ人があるかも知

れない、けれどもバウロは其點を云つたのでない、爰に肉の事を念ふは死であると斷言したのはわが肉躰の事を第一にして、この肉躰の情慾を充さんが爲に、たゞ食物を得たいとか、或は肉躰の喜悅を買はんが爲に麗はしき衣服を着たいとか、爾う云ふやうに我が肉躰の事のみに思を注ぎ、夫れ以上に思念を及ぼす事が出來ないのを申したのである、尤も吾人は活物であるから、飲みもし、喰いもし、住ひもせねばならぬ、衣食住の事を思慮計畫事は當然である、只天父の大聖旨と云ふことに念が着いて居れば宜い。

之を例せば諸君も御承知の如く、私は身躰の發達に注意をして居るので、昨夕も家族の者に、如何だ、此頃自分の身躰は非常に壯健なつたではないかと申したが、爾う云ふやうに肉體の事に注意をするのは死んだのであるかと云ふと決して爾うでない、この身躰

は神の御用を勤むる爲に大切なる機關である、故にこの機關を鍛へ上げて健全なるものにして、神前に捧げ、よく之を動かして御用を勤めたいと云ふことでありましたならば、何程身躰に注意を致しても、夫れが決して死にならない、衣服を着ると云ふ場合にしても、華麗なる衣服を着て誰某に賞められたいとか、又は人々の目に着くやうに行つて見たいと云ふことであるならば、夫れは死である、けれども私共は基督教信者として垢附いた衣服を着、人々に爪彈きをされると云ふやうな事であるならば、是れは我が天父を汚すのである、神の聖旨が我意の中に宿つて居ると云ふからには、その神の宮たる我が身躰に相當の衣服を纏ひ、爾うして人々の前に立現はれると云ふならば、是れ即ち衣服を着ることに據つて神の榮光を現はすと云ふことになるのである、彼のヂヨルヂ、ホヰツトフヰールドが常に一點の汚點なき、太白のシヤ

ッを纏い、太白の襟を附けて聽衆の前に現はれ、天眞の聲を放つて說教をしたことを考へて見ればこれは決してホヰットフヰールドを死なしめたのではない、即ちその清淨潔白なる襯衣や襟を着けて、神の御榮光を現はしたいと云ふ精神であつたからして、夫れに據つて活きて力ある說教者として、神の御榮光を現はすことが出來たのである、同じく肉體の事を念ふにしても、或人は之を念ふに據つて精神上の死に陷り、或人は之を念ふに據つて力ある活動をなす、去らばその生死の別は何點に在るかと云ふに、他ではない、先にもお話し申た如く、神の靈に導かれ、イエス、キリストと云ふ雛形に倣ひ、恰かも學生が手本を前に置いて字を寫すが如く、朝から晩に至るまでイエス、キリストを目の前に置き、その手本に倣はうとすると共に、そのイエス、キリストの意の中に活動して居つた天父の大聖旨を深く味ひ來り、飮む

にも、喰ふにも、着るにも、住ふにも、手を動かすにも、足を運ばすにも、その天父の大聖旨を現はして行くと云ふ所に、私共の念がチャンと据つて來たならば、其人には千萬兩の金を持たしたと云つても、之が爲に死にはしない、その千萬兩の金を活して神の御榮光を現はすものである、又如何に學識に富む人となつても、その學問に據つて死にはしない、却つて之を活して役ふことが出來るけれども、其點に達しない人間に斯くの如き物を持せたとならば、直ちにその精神が腐つて死んでしまう、寧ろ爾う云ふ物を持たない方が幸ひである。

諸君願くば深く自ら反省て、自分は果して新生命を握つて居る信者であるか否やを考へて下さい、毎日型の如く聖書を讀み、祈禱をなし、さうして定規に嵌めたやうな行爲はしても、心

靜かに內を顧るときには如何しても我には是れと云ふ元氣もなければ、また是れと云ふ精神もない、宛然人形の如きものであると云ふやうな事であつたならば、實に生甲斐のないもので、基督敎信者と云ふ名あつて實のなき者である、是れくらゐ詰らない生涯はあるまいと思ふ。

けれども一度右の新生命が我中に這入つて來たときには、私共の意の中に眞に是れと云ふものがチヤンと出來て、その一物が爰に得られた曉には、何か私共の中にその證左が現はれて來るのである、その證左とは何であらうか、先づ第一の證左は安心である、アバ父と呼ぶ子たる者の心には奴たる者の如く懼を懷くと云ふ事はないと示されたが、親のない兒童が他人の手に掛つて育てられると云ふときには此方に氣兼をし、彼方に氣兼をし、さうして他人の目

の前では其日々〱の事を爲つて行きますかなれども、靜なる部屋の中へ這入つて見たときには、首を項垂れてハアハアと溜息を吐くやうに信仰のない人はハア〱と云つて平生溜息を吐いて居る、けれども私共がこの新生命に這入つたと云ふときには、生の父母の手に育てられる子供の如く、時には叱られることもあり、時には酷い譴責を受けることがあつても、夫れは恰ど驟雨がするやうな譯であつて一度その驟雨が過去つてしまつたときには、晃々たる明月或ひは晴天白日を見るが如き心持になる、また非常に貧乏をしたり、事業が蹉跌したりすると、是れは最う到底不可ないと云つて苦しむ事があるけれども私共が靜に部屋に這入つて、天の父の前に祈禱をなし、天父よ、主萬事お任せ申すから、聖旨のまゝになしたまへと云つて、只管天父に

賴任り、眞に祈禱を捧げるならば、天父は手を開いて私を抱いて下さると云ふやうな念が我意の中に生り來るのである、爾うなれば、實に伸々として心寛く躰裕なりと云ふ非常な安心が生じて來る、是れが新生命の我に與へる所の大なる賜物である。

第二には喜樂と云ふ事である、親のない子供がじけて居る、何となく氣の毒なやうな有様が見える、能く世の人が自分の子供を十日ばかり他へ遣つて置いたが、歸つて來たときには非常に悄氣て困つたと云ふ事がある、是れは喜樂が無くなつたのである、いま私共が信仰を失ひ、この生命の泉から離れたときには悄氣てしまふ、夫れで祈禱會に於いてどうか祈つて下さいと云ふと、最う祈禱を賴まれることが怖いから、祈禱會には出ずして居らうと云ふやうな工合になつて來る、偶々祈禱を賴むと、口を開いて唱へることは唱へるけれど

も、心の中に喜悅がないからして、初めは大きな聲を出しても段々小さくなつてしまふ、即ち最初は元氣があるやうだけれども、夫れは附元氣であるからして、段々なくなつてしまひ、その祈禱を聽いて居る人はアヽと云つて歎息をしなければならないやうになる、けれども其人に眞實の生命があるならば祈禱會のときに如何しても祈らずには居られない、即ち人の賴むのも待たずして祈りたいと云ふ意になつて來る、サア傳道に行くと云ふときには實に忻態として出掛ると云ふやうな譯で、其所に非常な物が充ちて居る、夫れは何だと尋ねて見たならば、他ではない、子供が戸外より歸つて來て、アヽれ父さん、お母さん、いま歸つて來ました、斯う云ふ土產を貰ひましたと云つて悅び樂むが如く、何となく幼兒のやうな嬉しい物が其所に在つて、喜悅禁ずる能はずと云ふやうになつてくるから、其人の顏貌を眺めて見ると實に輝いて

居る、而して其人の爲す事は活潑である、其人の聲を聽けば實に勇み立つと云ふやうな情態である

第三は慈悲の心である、對手を倒して金を奪つて遣らうと云ふやうな了簡はないにしても、金錢と云ふことに首ッ引ばかりして居る者であるならば、其人の顏貌は目に稜が立ち、其人の言語にも稜が立ち、何となく冷いものが其所に現はれて來るのである、けれども旦に夕に天父に接觸して、その大聖旨を得て居る所の者は、日向に育つた草木の如く、親の手許に養はれて居る生の子供の如く、自然に慈悲の念を生じ、其所に可憐なる者があれば共に悲み、悦ぶ者があれば共に悦ぶと云ふやうな氣になつて、何となく其人は慈悲の腸を以て人々に接すると云ふことになる、譬へば少しく咳嗽をして居る人があると、アヽ彼の人は病氣でありはしないかと、其人の手を握り、君、御病氣が發りはせぬか、

御注意をなさいと深切に云ふやうになる、若し又人が心配想にして居ると、直ぐに其人の傍へ行つて、君は何か憂事があるのではないか、若し私の手で出來る事であるならば、君の精神を云つて下さい、私は君の爲に何樣な事でも致しますと云ふやうに、慈悲の念が燃へて來る、是れが即ち天の父は其日を善者にも惡者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へりと云ふ、その天父の大聖旨を我中に得たと云ふのである。

第四は良善と聖書に錄いてある、この良善と云ふは苟くも善なる事であれば眞に悅び、苟くも惡なる事であれば眞に嫌ふと云ふことである、私が奈良の某信者の家に參つた所が、其所の妻君は誰某は、實に好い信者であると云ふから、如何云ふ事であるかと尋ぬれば、イヤ他でもありませんが、そのお方が妾の方へ來られまして、家に新ら

しき戸棚でも買求めてあると、自分の器財が出來たやうに云つて悦んで下さる、又奇麗な火鉢でも新調すると、自分の家に品物が殖えたやうに云つて悦んで下さると云つたが、斯くの如く他人の家に善があれば、夫れを見て我家に善があるやうに悦ぶ、是れが即ち親心である、その天父の大聖旨を我意とするものであつたならば、人に善があれば眞に悦び、人に不善があれば眞に悲むと云ふやうになり、さうして善事の爲には全力を盡して之れを發揚し、不善は全力を傾けて、之を防ぐと云ふやうな趣になつて來る、是れは即ち私共に生命があつて、初めて斯くの如き物が現はれて出る譯であるから、若し私共が眞に天父の聖旨を意として、キリストの雛形に則り、日々聖靈の御感化を受け、この生命が混々として我衷に湧出でるが如くなつてきたならば、其人は眞に天から新生命を賜つたものである、この生

命が我にありさへしたならば、親に向つては眞個の孝子となり、兄弟姉妹に向つては眞個の友愛の情に充たされ、國家に對しては眞個に愛國家として力を盡すことが出來るやうになる、この生命の源泉を養はなかつたならば、何程形狀ばかり備はつても、何時しか嗚呼詰らないと云つて溜息ばかりを吐くやうになるのである、けれどもこの新生命がありさへしたならば、如何なる場合に於いても、私共は、憂ふることも怖れることもなく、眞に悦んで神の御榮光を現はすことが出來るやうになるだらうと思ふ、この生命はイエス、キリストより今日に至るまで、千九百年の間流れて止まない、御互ひの間にも流れて居るのである、夫れに或人はこの生命を少しばかり得て居るとか、また或人は未た少しも得て居らないと云ふやうなことであるならば、是れは實に私共の憂ふべきことであるからして、苟くも基督教信者たる

者は、悉くイエス、キリストより流れ來るこの生命を得て、眞に新生命のある信者とならねばなるまいと思ふ。

第六章　永遠の生命

永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣しゝイエス、キリストを知る是なり。　（約翰傳第十七章三節）

凡そ宗教と稱せらるゝものゝ中に永生を教へぬものは殆んどない、孔子の教の如きは宗教ではないが、矢張りその言葉を味うて見ると、何となしに永生が含まれてあるやうに思はれる。『生ヲ、知ラズ焉ンゾ死ヲ知ラン』とか又『性ト天道トハ得テ聽ク可カラズ』とか云ふ之によれば現世に重を置いて後の世の事は少しも弟子方に示さなかつたやうである、去りながら先祖祭をするときの心得を教へた言葉の中に『神

ヲ祀ル神在スガ如シ』と云つてある、何うも御先祖の靈がチャンと其所に在らつしやるやうに思うて祀れと云ふことで其中に何となしに人の心靈は死んで居らないものと云ふやうな意味を含んで居る、佛法は涅槃寂滅が本義であつて、人は幾度も〳〵生れ變つて、遂に寂滅してしまふと說いたのであるが、併し如何しても人間は寂滅すると云ふのでは滿足が出來ないので、後世の佛者は彌陀の淨土に生れ變るとか、何か蓮の花托の上に限りなき生を保つことの出來るやうに敎へて居る、我日本の神道にても、死んだ者の靈は神として齋き祀られると云ふことになつて居る、希臘の聖人ソクラチスが將に毒酒を飮んで死んとするときに弟子方が四邊に來て歎き悲むのを見て『君等は明日は私の亡骸を墓の中に葬むることが出來るけれども、私の心靈は之れを捕へんとするも捕へることは出來ない、心靈は之を葬むるこ

とが出來ない』と敎へたと云ふことである。

斯の如く、宗敎でも聖人の敎でも、人間の心靈は現世限りで朽るものではないと示してある。然し死んだ後の事であるから判然敎へることは出來ない、そこで今日の多くの人々が、心靈が限りなく生きると云ふことに就いて何か証據があるか、その証據を見せて呉れろと云つて、頻りに証據を搜ね索めて居る、昨年永眠に就いた中江兆民が、無神無靈魂と云ふ奇妙な書を著はしてからは、殊更に人々が心靈があるかないか、滅びるか亡びないかと云ふ問題を考ふるやうになつて來た、私は今日諸君の前に明白なる証據を申上げたいと思はんではないが、是れは到底此所より十三里向方に京都がある、百五十里向方に東京があると云ふことを証據立つるが如くに、明なる証據を擧ぐることは難かしい、先づ確かな所は御互ひの心靈と、この

四邊の世界とを比べて、この心靈は現世界のみに住むやうに造られたものであるか、將又世界以上に生き延びるやうに造られたものであるか、其點を研究してこの心靈は永遠に存するものであるか、將又滅びる者であるかを考へなくてはならない。

先づこの心靈に就いて考へて見ると、第一に人間の心靈の中に永生を慕ふと云ふ觀念が植附けられてある、是れは何所の人種に就いて研究をして見ても、又は何れの國の書物に就いて調査をして見ても人間と云ふ性格を備へた者は昔も今も同じこと、現世限りで朽果てるものでない、如何しても現世を越えて延び〱て行くものであると云ふ觀念を有つて居る、先にお談を致した如くに、私共がどの宗敎を調べて見ても、その宗敎の中に永生のあることを敎へ然らざれば暗示して居るのは即ちこの人間の心靈に永生を慕ふと云ふ觀念が植附け

られてある証據である、夫れだけは明白であるが、その心靈が如何なる狀態で限りなく生きるかと云ふことに就いては宗敎毎に違つて居る、或はマホメット敎の如きは現世を去つて後の未來には實に麗はしき極樂がある、その極樂には何とも云へない嬋娟たる美人が群をなして居るが故に、好み次第にその美人を我部屋の中に入れて限りなき樂を受くることが出來ると敎えてある、私共の立場から考へて見ると、實に馬鹿氣た事を敎へたと申さなければならないけれども、是れはマホメット敎ではこの世の中に於いて一夫多妻を許して居るやうな譯であるから、後の生涯に於いて斯の如き樂があると敎へたのは、其敎の立場からは至當である、又諸君の知らるゝ如く北の端に住居をする「エスキモー」は、現世を去つたならば實に麗はしき氷の家の中に住んで、脂肪つたる鯨の肉を喰ひ、永久の樂を受く

ることか出來ると云つて居る、亞米利加の土人は現世を去つて後には、實に幾萬里四方の狩場があつて、その狩場の中には望み次第に充分の獲物が得れると云つて居る、亞細亞の人民は米を喰つて怠惰になつて居るから、最う現世を去つたならば、紫の雲の靉靆く蓮の花托の上に登り、眠つて居るでもなく、覺めて居るでもなく、何とも云へない(恰も阿片を喫んだやうな)心持で居ることが出來ると敎へたので、大變に滿足をして居る者もある、併し少しく見識あり學問ある人間には、未來の命と云ふものが其樣な馬鹿氣たものであるならば、自分達は欲しいことがないと云ふ觀念を惹起させるものである、尤も是れは幼稚な考であるが然しその奥底に今一歩切込んで、爰に斯る迷想を生み出して來たと云ふのは何であるかと尋ねて見ると如何しても人間の心靈の中に永生を慕ふと云ふ觀念があるから、

その觀念を滿足せしめんが爲に斯の如き事を敎へたと云ふのである、基督敎は如何なる事を敎へて居るかは、後に至つてお談をするとせう。

第二に人間の性格は當世のみに存在するものとしては、餘りに廣大過ぎるものである、是れは私も非常に力ある議論と思ふ、私の邸宅に廣大なる、銀杏の木がある、植物學者に調べて貰はなければ分らないが、如何しても三四百年の齡を重ねて居るであらうと思ふ、是れから尙だ百年二百年の齡を保つ事が出來るかも知れない、けれどもその銀杏が假令この世界に六百年の齡を保つても、最う六百年經てば朽果てゝ以前の土に歸つてしまはねばならぬ、夫ッ限りのものであつて、夫れ以上のものではないだらうと思ふ、鶴は千年の齡を保ち、龜は萬年の齡を保つと云つて見ても、矢張りこの土に歸つてしまふだ

けのものであらうと思ふ。

ところが諸君、私共の肉體は如何であるかと云ふに先づ五十年の壽命であつて、七十は古來稀である。八十九十に至つては實に寥々として雨夜の星ほどのものである。假令百歳の齡を重ねたとしても、肉體は現世の土と消えてしまふのである、然るにキリストの如きは僅か三十三年でこの世の中を終はられたが、その肉體の中に在つた心靈は實に現世のものとして造られたとは思はれない、オールと云ふ人が云つた言葉に『人間にはこの世界とその組織に基く理想よりも更に大なるものがある、彼れはその要求する現世のものを悉く與ふるも尚滿足を感ずるものではない、彼れの心靈には神とか永遠とか、無限とか云ふ偉大なる觀念を悟る力が與へてある、この心靈の中に「エライ」ものがあるので到底現世のもので、滿足は出來ない』と

ベーコン曰く『この世界は人の心靈よりは遙かに下劣なるが故に、この世界のものにて滿足する能はざる所は詩なり歌なり、理想的のものを以て補ふことが出來る』と如何にも爾うだ、實際上のものでは詰らぬ、古今の歷史を繙いて見ても國が興りて國が亡び、人物が起りて人物が亡びてしまふ、その大豪傑の出た跡を搜ねて見ると如何であるか、唯々詰らない、豐臣秀吉の如きは身を草履取に起して、遂に關白太政大臣となり、朝鮮は愚か支那四百餘州までも震ひ動かしたと云ふやうな跡を止めて居るかなれども、いまその秀吉の築いた桃山の御殿は如何であるかと云つて見ると、最うたゞ涙の種である、而してその秀吉は或は淀君に溺れて見たり、或は我子秀賴の愛に引かされて愚痴を溢したりするやうな跡を搜ねて見ると、是れは〳〵とばかりの歎息をしなければならぬ、到底滿足の出

來ることではないけれども私共がブラウニングの詩とか、或はテニソンの詩とか、或はダビデの詩とか云ふやうな高尚なる詩を繙いて之を讀去り讀來るときには、成程人間は現世のもので滿足をすることは出來ないから、想像の翼を擴げて詩人は詩に寄せ、歌人は歌に寄せて、この狹き世界からズット九天の外に舞登り、さうして其所に滿足を求めたものであると云ふことを見出すことが出來る、又ブラウニングの詩の中に、是れは私が邦歐文に譯して見たいと思つたが、詩譯することが出來ない、たゞその意味を云つて見よう『我はわが心靈を繫ぎ留むる能はず、わが心靈はこの狹き土の牢に逸居する能はず、我に奇き力あり、情感あり、欲念あり、われその何の故たるを解せざれども之れを抹殺する能はず、この情感は未知の世界の爲に有するなり』と、是れは人間の心靈は到底この土の牢屋の中に

這入つて居れない、この人間の情感を公平に考へて見ると、未だに知られない永遠の命に向つて求めつゝ慕ひつゝ翼を擴げて登り行くものであると云ふ意味である、以上申上ぐるが如くに、如何しても私共人間の心靈が現世限りと云ふことであつたならば滿足は出來ない、又現世限りのものとしては我心靈の搆造が餘りに大き過ぎて、神がお造りなされたものとしては所謂矛盾を生じて來るので永生と云ふものを以て來て考へて見ねば、如何しても適合しないのである。

第三には人間の性格を磨き立てる上に於いて、現世のみにてはその目的を達することが出來ぬ、キリスト、イエスが馬太傳五章の末に於いて非常な聖句を遺された『天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし』と是れは基督教信者に與へられた最大の理想であるところがこ

の世界の中に於いて一番に能く進み、一番に能く徳性を磨き立てたと思はれるヨハネを引張り出して來て、このヨハネはキリストの仰せられたが如くに、天の父の完全が如くに完全なつたかと云つて見ると落第である、パウロを連れて來ても落第である、夫れならば其後この世の中に生れ出でた人では佛蘭西のセントベルナルド或はアシヽのフランシスなどを連れて來て、この人々は果して天の父の完全が如く完全なつたかと斯う試驗をして見たならばベルナルドもフランシスも落第である、夫れならば十九世紀の中葉に出た所のゴルドン將軍或はナイチンゲール、或はダミエン、或はドラモンド等の人々が、只愛と云ふことだけでも果して天の父の完全が如く完全と云ふ標準に照して見て、及第が出來るかと云ふと是れ亦落第である、して見ると神は吾人に心靈を與へ、而もその神がキリスト、イエスを通して、父の完全が如く完全なれと

れ示しなされたからには是れは私共の命の間に何所でか完全ならなければならない、けれどもこの世界では御互ひが何程逆立をして修養を加へて見ても、この標準に達することは出來ない、果して爾うであるならば、私共の心靈がこの土の牢屋を離れて、神の御前に舞登るときに方つて、この世界に於いて磨き初めた心靈は段々と進みに進んで、遂に永遠の命に懸り、初めて天の父の完全が如く完全なると云ふことになるのであるから、私共は人間の性格其者を磨き立てる上に於いて、現世だけでは滿足が出來ないから、爰に現世を越へてこの心靈は永久に進み進むものであると云ふ希望を起すのである。

右の三點から論を起して如何なつて來るかと云ふと現世に在る心靈は現世のもので滿足をしない、此内に在る心靈は現世限りでなく、現世を越へて永久の未來まで突通すべきものであらうと云ふ所まで行く

のである、夫れから後は如何なるか、我輩人間では分らない、そこでその分らない所は如何なつて來るかと云ふ問題になる、所謂天啓の教に據らなければならない、提摩太後書第一章十節に『この恩惠は今われらの救主イエス、キリストの顯れ給ひしに由て顯れたりキリスト死を廢し福音を以て生命と壞ざる事とを明著にせり』とある諸君、舊約聖書を開いて何所を搜して見ても永生の事に就いて明瞭なる確實なる教は出て居らない、猶太人も心靈は死なぬものゝやうに考へたには違ひない、詩篇第十六篇を讀んで見ても、矢張り祖先の所へ心靈が往くと云ふやうな考を有つて居つたのであるけれども永生に對しては明確なる思想を有たなかつたのであるが、キリスト、イエスが現世に現はれ、初めてこの人間に永生をお示しになつた。

斯くキリスト、イエスは永生を明確にれ示しなつたが故に、キ

リストの後の人間は如何であるかと尋ねて見るとこの永生を慕ひこれを樂んで、實に義の爲めに誠の爲めにこの命を棄てなければならないと云ふときには、この肉躰は土芥の如くに棄てゝ、さうして悦で樂んで行くと云ふ元氣を生じて來たのである、そこでキリスト、イエスが一度永生の眞理を人間に說聽かせなされてからは世界の人々の思想が一變したと云ふても宜いくらゐである、如何云ふやうに一變したかと云ふと人間は現世限りでない、現世を越えて永久の未來にまで達すると云ふことを確めたのである夫れならば諸君はキリスト、イエスがさぞ立派に未來の事をれ說になつたであらうとされ考へなさるかも知れないところがキリストは未來の事に就いては少しも立派にれ敎へになつたことはないのである四福音書の中に二ケ所だけ之れを見出すことが出來る、第一は約翰傳第十四章二節に『わが

父の家には第宅おほし』第二には路可傳第十六章に富者とラザロとの譬がある、その二十二節を讀んで見ると『貧者死たれば天の使者たちに依てアブラハムの懷に送れたり』と錄いてある、私は右の二ヶ所を讀んで非常に感じた、實にキリストは眞個の事をお示しになつたと思つた、何となればマホメットの如く美人の住める極樂ありとも示しにならぬ、紫の雲の靉靆く蓮の花托ありとも敎へられず只『父の家には第宅おほし』『アブラハムの懷に送れたり』と示めされたのみである。

諸君、未來の事を語るのには現世のものを以て語るの外はない、未來の事を以て未來の事を語つたならば、私共のやうな現世の人間には何も意味が分らない、現世の事を以て未來の事を語るには、最も高尚なる、最も溫和なる、最も樂しきものを以て示すより外はないと思ふ、マホメットの云ふが如く三千の美人を集めた後宮であるな

らば、私は其樣な未來に往くことは好まない、佛者の云ふが如く蓮の花托の上で、怠惰に日を送ると云ふ未來であるならば、私は往くことを好まない、けれども、キリストの示しなされたのは父の家、アブラハムの懷である、諸君この世の中に於いて親の懷と云ふものより樂しき場所が何所に在らうか、親の懷より高尚なる場所が何所に在らうか、我父の家と云ふより私共に懷しきものが何所に在らうか、何所を搜しになつてもないのである、私が英吉利の歴代の王の住める宮殿を見たり普魯西の歴代の王の住める王城に行き、天井は黄金を以て張り、床は世界の珍木を集めて張り詰めてあるやうな美事なる部屋を見ても、是は何だ……是れは何だと云ふやうな譯で、少しも其樣な所に居りたいとも欲しいとも思はないのである、併しながら靜に眼を閉ぢて思ひを放つと、我父母の住めりし故郷の茅屋に

思念ひが行くのである、さうしてこの茅屋の前に聳えて居つた梅の木や梨の木に思ひが走るので、或は夏の夜に父と母とが椽側に寢轉んで居る所へ、我も身躰を横へて無邪氣なる談をしたときの事を思ふと云ふやうな譯である、いま私に大隈伯の早稻田の邸宅が出來上つたならば、夫れを進ぜやうか、或は君の生れた父の家を進ぜやうか、何方を取るかと云ふことであつたらば、私共は寧ろ我父母の住めりし茅屋の方を貰いたい、夫れでキリスト、イエスは玉の花托とも、又寶珠を以て鏤めた邸宅とも示めされない『なんぢら心に憂ること勿れ神を信じ亦われを信ずべし』と斯う云つて其次に『わが父の家には第宅おほし』と仰せられた、實にこの一言は私共の心魂に徹底した聖句である、又富る人はこの世の中の百味の飲食に飽き、愉快に溢れて死んだものであるが、此人は陰府にて痛苦を受け、而してその富

める人の門に置かれて甚く腫物を患みて居つた者は、死後はアブラハムの懐に這入ることが出來た、是れは後世の狀態をキリストがお示しなされたのである、夫れで私共はこの父の家に往きたい、このアブラハムの懐に這入りたいと云ふに就いて、何所に夫れがあるかと尋ねられたならば夫れは何所に在るか分らない、或人は天に在ると云ふ、併しながら今天に在ると思ふて、私共が心から天を瞻いて居るさ、この地球はズッと西から東に廻つて、今夜の十二時になるといま天だと思つて居る所が眞下になつてしまふ、して見るさ彼の天の高き所に在ると云ふ譯にも行かない、天の父は抵る所在さない場所はないと云ふのだから、その父の御第宅と云ふは此所に在るかも知れない、彼所に在るかも知れない、何所に在るか分らないのである、けれども私どもは天の父の家、アブラハムの懐に歸ると云ふ所を以て滿足を致すので

ある。

更に進んで約翰傳第十七章三節に『永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣し、イエス、キリストを知る、是なり』とある、是れは永生の確實なる目的を示されたのである、私は十七の年から天の神とキリスト、イエスを知り始めたので最う殆んど二十幾年の間天の父と、キリスト、イエスを研究して居る、夫れで何が分つたかと云へば、實は分つたやうであるけれども、天の神は餘り廣大に在しますが故に分らない、キリスト、イエスと云ふ人物は餘りに高尚過るが故に、未だ實際の事を云へば万分の一も分つて居らない、夫れならば私が八十歳までこの世の中に生存へるとして、最う三十五年の間研究をして見たならば分つてしまふかと云ふに私が今より三十五年の間夜となく晝となくこの問題ばかりを研究して居つても、未だ決して分つたと云ふ所

までは行くまい、恰も貝殼を以て大海の水を掬ふやうなものである、知つた丈けが貝殼であるならば、知ない所は大海である、到底現世で覺ゑられることではないのである。

そこで私共はキリスト、イエスがお示しなされた如くに、天の父とキリスト、イエスを知ると云ふ點が私共の生活の目的である、この目的を達せんが爲には千年でも足らない、二千年でも足らない、私共は永久の命に懸つてこの目的を達しなければならぬ、是れと馬太傳第五章の終なる爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし』と仰せられた聖句を照し合して見ると、此内に在る我心靈を磨き立てるのも、私共がこの世の中に生存する大目的である、天の父とイエス、キリストを知ると云ふことを考へて見ると、仮令八十の齡を保つてもこの世の中では滿足が出來ない、夫れで私共はどの點から考へて見ても、永久の間生活をなし、さう

して私共が之れを知らなくてはならない、その知る場所は何所であらうが彼所であらうが搆はない、最う子供の爲には親の懷裡にさへ居つたならば、何も外に望むべきものはない、我輩が幼心になつて神に事へて行くと云ふときには天の父の御懷と云ふ所にさへ、思ひを寄せて、その御懷に這入ると云ふことを考へてさへ行けば、私共は最う外に望はない。

右の如き譯であるから、爰に私共は使徒パウロの示した語句を諸君に御紹介~~せよう~~しませう、即ち哥林多前書第六章九節に『なんぢら義からざる者の神の國を嗣ことを得ざるを知らざるか』と云つてある、故に私共が永久の命を嗣ぎたいと云ふことであるならば、この肉躰を持つて行くことは出來ない、如何な

る人がこの永久の命を嗣ぐことが出來るかと云つたら、現世に於いて父を知るものでなければならぬ、現世に於いてキリストを知るものでなければならぬ、如何なる人が神を知り、如何なる人がキリストを知るか『心の潔き者は福なり其人は神を見ることを得べければなり、又愛なき者は父を知る能はず』と斯う聖書に示してある。夫れで私共は此心が水の清きが如くに清くなつて來たときに、初めて天の神が我心の中にお宿になる、その天の神がお宿になると云ふのは、我心の奧底に眞正の天の神を知つた、又私共が眞正にキリストの愛を味はうて來たのである、即ち全身全力を籠めて父を愛し、キリストを愛すると云ふことになつたときに初めてこの神、このキリストを知ることが出來ると云ふ譯になつて來る、斯くして現世に於いて神を知り初め、キリスト、イエスを知り初めたと云ふことであるならば、即ち父の心、キリストの心、我心が

合体して來る、この合体したときに初めて私共が永久の命に這入り初めたのである、即ち永久の命は我心靈から始つたのである、さうしてこの土の牢屋の中に在る心靈には永生が始まり、この命は永久に延びて行き、遂に父の懐に入るとか、父の樂園に入るとか云ふ形容詞と共に、父と我とが一になつてしまふのである、キリスト、イエスが『爾曹はわれと共に苦みなばわれと共に榮を受くべし』と仰せられた如くに、私共は永久の榮を受くることが出來るやうになるのである。

之れを要するに道理を以て考へたときには、人間の心靈は現世限りではあるまい、現世を越えて未來があらうと云ふ點まで達することが出來る、その引証は聖書の語句、殊にキリストの聖句から味はうて來て、私共は道理で開くことの出來なかつたのが、天啓の敎に據つて開かれて父の家を望み見て、永久の目的は彼所だと云ふことになつて來た

ときに、初めて我腦髓の中に永生が確實となり、寸分疑ふことの出來ないやうになるのである、否私共はこの永生を樂んで、この世の中では如何なる苦痛があらうが、又如何なる不都合があらうが、假令この世の中に於いては名の知られない者であつても、天の父の永生の書に錄されて、永久神の台前に於いて長久の世を味はうことになつて來るだらうと思ふ、どうか諸君は永遠の生命をお味ひになつて、いつ何時神に召されても、我は神を知るもの、我はキリストを知るものと云ふ、その知ると云ふ上に於いて、天國に這入ることの出來るやうに、御準備あらんことを切に希望するのである。

第七章　靈覺の妙

性來のまゝなる人は神の靈の情を受ず是かれには愚なる者と見

ればなり又これを知ること能はず蓋靈の情は靈に由て辨ふべき者なるが故なり、然ど靈に屬るものは萬事を辨へ知しかして己は人に辨へ知るゝことなし（哥林多前第二章十四、十五）

外界の事を知るは知覺の務である、即ち色を看別くるのは眼であり、聲を聽別くるのは耳であり、物の堅いか柔いかを知るは觸である、又事物の理を知るは理性の務である、如何なる難しい道理も、私共の中に植附けられた理性の機能で能く覺ることが出來る、又爰に二と二を合すれば四となり、雨降つて地堅まると云ふやうな事柄は、私共の中に植附けられた直覺の機能で分る、是れには自明、必然、普通と云ふ三ッの法則がある、二と二と合して四になるとか、結果があれば原因がなければならないと云ふやうな事は何の證據も要らない、自から分ることで、誰の意

にも普く通じて居ることである、なほこの三ツの機能の上に、爰に靈覺と云ふものがある、橫井小楠の詩に『神智靈覺湧如泉、不用作爲付自然、前世當世更後世、貫通三世對皇天』と云つてあるが此中に靈覺と申す字が使つてある、此詩の意味を能く考へて見ると、形體以上の奥床しい所に一種の靈の眼が動いて、道理を以て究め盡すことの出來ない眞理をば探ね知ると云ふやうな意味が見えて居る、使徒パウロは神は其靈をもて之れを我等に顯はせり靈は万事を知りまた神の深きことをも探ね知るなりと申して居る、先に申上げたやうに外界の事は知覺で分る、事物の理は理性で分る、また必然の眞理は直覺で分る、夫れならばこの靈覺が探ね知るべきものは何であるか、此所には神の深きことゝ云つてある、また靈の情と書いてある、この意味は爰に形體以上の世界に、私共は知覺でも理性で

もまた直覺でも知ることの出來ない妙理が存して居る、その妙理は靈覺で知らねばならぬ、妙理と云ふは何を意味するかと云へば、神の本體性質及び聖旨、是れは實に奥深きものであつて、容易に知ることの出來ないものである。

そこでこの靈覺と云ふものは、普通平凡の人が生れたときから有つて居るかと尋ぬるに、有つて居らないのではないが、矢張り盲人になつて指頭を大いに養ふと、觸覺が大變に鋭くなつて來るが如く、獵師や漁夫が眼を使ふと視力が非常に鋭くなつて來るが如く、この靈覺も養はねば鋭くならない、即ち人間の方から云へば鍛練修養を積んで、靈の眼が豁然になつたと申すのである、神の方から云へば、靈の感化に據つて、靈の眼が豁然な境に到達すると云ふのである、キリストのお使徒方に就いて見るに、多くの人々の

中よりお選拔になつたのであるから、實に優れた人々と申しても宜からうが、併し初めの間は如何にも遲鈍なものであつて、三年も御薫陶になつて、どれくらゐに靈覺が進んだかと云へば、如何にも鈍い、キリストの使徒の中で高足と仰がれたヨハネ、ヤコブは如何であるか、母親に伴れられてキリストのお側へ參り、貴方が大王とお成り遊ばしたならば、一人の息子は左大臣、一人の息子は右大臣にお召抱へ下さるやうにと、母も息子も榮華の夢を見て居つたのである、またお使徒方が寄れば誰が一番豪い者に成るかと云ふ問題で、互ひに之れを爭うて居つた、斯く嫉の念に充されて居つたことを見ても、實に彼等の靈覺の甚しく鈍いものであつたことは明瞭である、キリストが十二の使徒に向つて、爾曹は我を誰と思ふかと仰せられたときにペテロが爾は活神の子キリストなりと申上げた、此時には靈覺が

顯はれて來たのである、イエスもお悅びになり、夫れは血肉が爾に示したのではない、天の父がお示しになつたのだと大いに御稱讃をなされた、このペテロは他の使徒と比べて見れば年も老つて居るし、經驗も積んで居るから、靈の眼が幾らか銳かつたかと思はれる、けれども十二人の使徒は揃いも揃うて、イエスが現世に御存命なさる間はたゞ肉躰の事、即ち形體以下の事ばかりに思想が附いて居て、キリストが何の爲に此世にれ降りになつたか、また何をお敎へになつたか、その御敎訓の深い意味さへ分らずして、五里霧中に迷うて居つたと申しても差支はない、實に鈍いものであつた、夫れでキリストは我が死は爾曹の爲に益だと仰せられた、自分が現世に生存へて居れば何時まで經つても分らない、現世を去るのは爾曹の爲に至極益になると云つて、遂に現世をれ去りになつた、すると使徒達

は、アヽ杖柱と賴む先生に死なれてしまつた、自分達のやうな微力の者が現世に在つて何が出來るものか、オイガリラヤの湖水へ歸つて漁でもしやうぢやアないかと、ペテロが他の使徒を誘ふた、爾うすると、皆行かうと云つて漁に行つた、その漁に行つて居るときに蘇生られたキリストが現はれになり、夫れから四十日ばかりの間蔭の形に添ふが如く、キリストは靈を以て使徒方に附添ひ、靈の眼が啓けるやうに御敎訓になつた、ところが漸く五十日目に至つて、皆々初めて夢の覺めたやうな心持になり、アヽキリストの此世にお降りになつたのは、肉體の王國を立てる爲に在らずして心靈の國をれ立てなさる爲であつたか、實にキリストの我々に敎へ示さんとなされる御眞意は此點であつたかと悟つた、斯くまでに鈍い、三年の間寢食を共にして暫くも放さぬやうに

して御教訓になつたのに未だ分らない、死になされてから五十日經つた所で、漸く靈の眼が其所に見え初めたと云ふやうな事柄である。そこでキリストのお使徒の中では、畢竟誰が一番靈覺に進んだかと探ねて見ると、夫れはヨハ子である、彼が眞に靈覺を得て居つたと云ふ証據は、約翰第一書を開いて讀むならば確に現はれて居る、第一章の五節に『神は光なり』また第四章八節に『神は即ち愛なれば也』と申して居る、この二ッの眞理は聖書の他の部分にも見えて居るかなれども、此所に明瞭なる言葉で現はれ出たのは是れヨハ子の力である、諸君が約翰第一書の始めから終までをれ讀みになつたときには、ヨハ子は學問の深かつた人とはれ感じなさらぬであらう、彼れは哲學思想があつたとはお感じなさらぬであらう、又彼れは議論が巧いとはお感じなさらぬであらう、何をれ感じになるかと尋ねて見ると、

學問でも理屈でも行かない、神は光なり、神は即ち愛なりと云ふ、この奥深き眞理を云ひ現はしたのは、是れは彼のヨハ子がパトモス島に在つても、また人家稠密のエペソの邑に在つても心から考へ込んで居る、その考へ込んだヨハ子の心の中へ、電光の如くパッと光が輝いて、アヽ神と云ふ光があると云ふことを見て、夫れからその眞理をズッと奥床しく考へて來て、實に神は光なりと悟つたのである、愛なきものは神を知らない、神は即ち愛なればなりと云ふ眞理がヨハ子の心に分つて來て、夫れからヨハ子がズッと考へ込んだのである、この眞理に基いて、私共信者が光の中を歩かなければならないとか、私共信者は四邊の人々を愛しなければならぬとか云ふやうな事を聽くのも、理屈の上から說くにはあらずして、高い世界から低い世界の人に諭すが如く、私共の心の中へ夫れを敎へ込んで行く所は何とも云へない妙味がある、

若し諸君、約翰第一書の第三章をお開きになつて、その初めを讀んで御覧なさると、是れは哲學でもなければ、科學でもない、また理屈でもない『なんぢら視よ我儕稱られて神の子たることを得これ父の我儕に賜ふ何等の愛ぞ世は父を識ず是に由て我儕をも識ざる也、愛する者よ我儕いま神の子たり後いかん未だ露れず其現れん時には必ず神に肖んことを知そは我儕その眞狀を見べければ也、凡そ神に由る此望を懷く者は其潔が如く自己を潔す』と錄してある、聖書のどの部面に斯う云ふ悟の言葉があるか、是れはヨハ子にあらざれば見ることが出來ない、約翰傳の方はヨハ子が錄いたのであるか、將た又ヨハ子の弟子が錄いたのであるか、是れは學者の間に未だ議論が一定いたして居らない、けれども約翰傳の精神は確にヨハ子的である『太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり』と云ふ說出しからして、その約翰傳の中に存す

る眞理を味はつて見るならば、ヨハ子でなくては到底斯の如き眞理、斯くの如き奧深き言葉を以て現はすことは出來ないのである、殊に第三章十六節の如きは聖書中の壓卷と稱すべき所にて『それ神はその生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信ずる者に亡ること無して永生を受しめんが爲なり』とある、なほ第一章十四節には『それ道肉體と成て我儕の間に寄れり我儕その榮を見に實に父の生みたまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り』とある、此れは理屈を述べたのではない、我儕その榮を見るに云々と云ふ所は、イエス、キリストの風采と品格をば繪に描くならば、圓光を放つて我々の目の前に躍如として現はれるやうな所をば、ヨハ子はそのまゝに書き現はしたのである、して見ればヨハ子の靈覺は、イエス、キリストの聖意を捉へて居ると云はなくてはならぬ、實に是れは味はうべき所であら

うと思ふ、又パウロはヨハネ以上か、ヨハネの下に附くか、それは私の問題ではないが、靈覺と云ふ點に於いては矢張り非常に發達して居つた人である、それはキリストが御存命中にパウロは一寸キリストの御姿を覗いたくらゐな事はあつたらふと思ふ、けれどもキリストと膝を交へてお談を承はつたと云ふやふな事は無論なかつたに違ひない、此のパウロはステパノが石にて撃殺されるときに、その有樣を見て初めて自分の目的が達したかの如くに思ひ、意氣が頗る昂つて居つたと思はれる、けれどもステパノが鮮血淋漓として流るゝ、その苦しき最中に天を仰ぎ、父よ彼等に罪を歸し給ふなかれ、彼等は其爲す所を知らざればなりと云つて莞爾と笑つて死に就いた、斯く笑つて現世を去ることの出來ると云ふものは何であるか、是れはどうも何か其奧に云ふべからざる物がなくてはならないと思ふ、けれ

ども行掛り上已むを得ないから、バウロは祭司の長より手紙を貰ひ、ダマスコの信者を片端から縛めて之れを殺さうと云ふ勢で出懸けた、さうしてダマスコの門に近づいたときに、主イエスが現はれて、サウロ、サウロ、何ゆゑ我を窘迫やと云ふ聲が聞えた、するとサウロは主よ爾は誰であるかと云ふと、主曰く我はなんぢが窘迫ところのナザレのイエスである、荊ある鞭を蹴るは難しと仰せられた、このときバウロはバツタリと眼が見えない、夫れからダマスコのスグと云ふ街道に行き、或人の家に這入つて、三日三晩の間考へた、さうしてアナニヤが訪ねて來たときには、其眼から鱗の如き物が落ちたと云ふが、是れ即ちバウロの靈眼が豁然として開けたので茲に始めてキリストを見たのである、初めてキリストに據つて現はされたる靈の眞理を見たのである、夫れからアラビヤの野に三年の間引籠り、所謂靈覺を以て神の深きこ

とを探ね知りいよ〳〵神の御本体、神の御性質、神の聖意がパウロの腹の中へ這入り彼はいよ〳〵世の中へ出て神の道を宣傳へることになつたのである。

夫れで諸君は哥林多前書第二章を開いてれ讀みになると、使徒パウロは靈覺のあつた人と云ふことが明瞭に現はれて居る、哥林多後書第十二章をれ開きになると、第三の天に登つたと云ふ經驗が書いてある、腓立比書第二章をお讀みになると、キリスト、イエスは天の最と高き位をも棄て難きことゝ思はず、塵の浮世にお降りなされたと録いてある、夫等を能く氣を注けて讀むならば、パウロの靈の眼に現はれたイエス、キリストと云ふのは、矢張りヨハ子の靈の眼に現はれたキリストと變りはないのである、如何にも父の生み給へる獨子の榮は躍如として現はれて居るので、恩寵と眞理にて充

てりと申すより外はない、實にパウロは靈覺の人である、他の使徒達は肉躰のキリストばかりを見て居つたものだからして、三年經つても未だ靈の眼が開けなかつたが、パウロは肉躰のキリストを見ない、初めから靈の眼を以てキリストを見たのであるから、パウロの意の中に現はれ來つたものは靈のキリストである、その靈のキリストに據つて現はされる所のものは靈ある神であるから、靈覺の上に於いては、パウロには他の使徒方よりも餘程便益があつたと申しても宜い、御互ひ千九百歳の今日に生れ出でた者は、肉躰では如何しても見ることが出來ない、その眞理を見やうとするには、必ず靈の眼で見なければならないのである。

ところが諸君、如何であらうか、私共に右說明いたしたやうな靈の眼があるか、その靈覺が備はつて居るか、試みに聖書の講義

聽くにエルサレムの周圍には三重の石垣があつて、その石垣が何うであるとか斯うであるとか、或ひはヨルダン河の流は何百哩あつて、彼のガリラヤの湖水を出て死海に至るまでは、其河が何百歩下つて居ると云ふやうな河の講釋をしたり、或はキリストが二ツの麵包と五の魚とを以て五千人をお養ひなされたときに、麵包の片が十二の籠に滿つるほどであつたか、其籠は何程の大きさであつたか、また何樣な籠であつたかと云ふやうな穿鑿をする、夫ればかりを始終敎へるのでもあるまい、けれども多く爾う云ふことに力を入れて、いまお談し申すが如き靈の眼を開いて、その奧深き神の事を探ね知ると云ふ點に力を入れないからして、眼光紙背に徹しないのである、何年經つても基督信者の形は備へて居るが、その意の中には神智靈覺湧いて泉の如しと云ふやうな、即ちキリストが約翰傳第四

章に示しになつた通り『我あたふる水を飲者は永遠かわく事なし且わが予ふる水は其中にて泉となり湧出て永生に至るべし』と云ふやうなものは出て來ないのであるからして、形は備へても、其中に是れと云ふ生命がない、乾燥無味のものになつてしまふ嫌がある、祈禱會に出でゝ祈禱をすると云ふときには、恰も村民が村長の所へ出て來て、憚りながられ願の筋があると云ふやうに、斯うして下され、如彼して下されと云ふやうな願を捧げるとは知つて居る、けれ共我靈を以て天地の神の靈に交り、我意を以て父なる神の聖旨に交り、さうして父の聖旨と我意とが相接して、其所に何とも云へない情味を覺えると云ふやうな事は更にない、其祈禱を聽いて居ると實に聽苦しい、乞食共の集會であるかの如き感覺を與へて、アゝ實に氣高き人々よ、天地の神の靈に接して居るかなと、人々に思はしむるやうな奥深きものは其所にないので、

實に殘念な事である、夫れは靈の眼が開けて居らない、所謂靈覺を得て居らないからである、說敎をすれば足尾銅山が如何だとか渡良瀨川の沿岸が斯うだとか、或は基督信者と云ふものは斯う云ふ物を食つては不可ない、如彼云ふ物を飮んでは不可ないと云ふやうなことであつて、靈覺を以て得たる妙理をば聽く人の心の底へ打込むことは出來ないのである、また聽く者も渡良瀨川の沿岸は耕作も出來ず、實に慘狀を極めて居ると云ふやうなことを聽かされると、ホロ〳〵涙を流して、衣類でも何でも惠んで遣ると云ふやうな事になるけれどもいよ〳〵心靈界の妙所を味はねばならぬと云ふやうなことになると、耳のなき人が音樂を聽いて分らないが如く、眼のなき人がラフハエルの名繪を見ても、一向その妙所が分らないが如く、爾う云ふ方面になると白河夜船を漕ぐやうなことばかりである、實に淺間しい

有様であると云はなければならぬ。

この靈覺と云ふものは先にも申上げた如く、誰にでも彼れにでも天からチャンと生附けられてあるかないかと云ふことは、最う別に問ふ必要はないのである。若し不幸にして私が盲目になつて、三十日も稽古をしたならば、眼を以て物を讀むやうにはゆくまいが、能く凸字を撫讀に讀む事が出來るやうになる即ち觸の力が進むのである、靈覺も亦之を養ふ事に注意して、聖書の中では、先に申上げたやうな約翰第一書なり、或はダビデの詩篇なりを味はうて見るとか、使徒パウロの書翰中以弗所書を讀んで見るとか、或は又マチンソンの『キリストの像』『ストカルのキリストの姿』を讀んで見るとか云ふやうなことで、自から靈の眼が開けて來るやうになるのである。

夫れから又説教を聽くときにも奥深き説教に能く注意をしてれ聽き

になると、段々靈覺が養はれて來る、又聖書を開いてれ讀みになるときに、靈覺を得た後には未だ曾て見出さなかつた眞理が分るやうになり、恰も夢の覺めたるが如くに、未發の眞理が見えるやうになる、何うも説教を聽いて夜船ばつかり漕いで居つたが、自分が注意をして味ふて見ると、成程先に詰らないと思つた説教は却つて大いに妙味があるので、この奥深き所には少しも徹底して居らなかつたと云ふことを發明するやうになるだろふと思ふ。

若し諸君が眞正に靈覺をれ養ひになつて、悟を以て聖書をお讀みになり、悟を以てれ祈禱をなさるやうにあり、悟を以て感話を聽き、また感話をあすと云ふやうあことになつて來たならば、今日の狀態に比べて見ると、如何にも大いなる喜悅が生じて來て、ペテロと共に我が心の中の喜悅は曰く、言ひ難しと申すことの出來るやうに成るであらう、故

に私がお談を申上げたやうな方針で、諸君が靈を養ふことに意をお用ゐになるならば、他日大いに悟る所があるに違ひない、けれども等閑になされたならば、他の人々は進んで行くのに、自分だけは一向進まないと云ふことにある、若し二十年前の我と二十年後の我と同じことであつたならば、所謂後の烏は、失禮ながらお先にと云つて段々進む譯である、最う自分は祈禱會に行つても何も分らない、説敎會に行つても何も分らない、自分では人の云ふことが詰らないから分らないやうに云ふが、其實は人の云ふことが高尙にして、自分は進まぬから分らぬやうになつて、或は不平を鳴すやうになるかも知れぬ、どうぞ後の烏は先になるやうに希望する、先の烏は後に遲れぬやうに、目を覺してズン〳〵進まれんことを希望する次第である。

第八章　聖書論

かつ幼少ときより聖書を識ことを知ばなり聖書は爾をしてキリスト、イエスを信ずるに因て救を得しめん爲に智慧を予ふるもの也、聖書はみな神の默示にして教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學しむるに益あり、これ神の人の完全を得て諸の善事を行ふに缺なからん爲なり。（提摩太後書第三章自十五至十七）

グリーン著英民史の第八章に、英吉利人は一書物の民となれり、其の一書とは聖書であると錄してあるが、どうも面白い言葉である、其の後を段々讀んで見ると、英吉利の人民は上の者も下の者も、老も幼きも學者も無學者も只一の聖書を研究し大に聖書精通の民となつたとある。

今より三百年前に聖書が英吉利の國語に飜譯された、其時は恰も近視眼の者が眼鏡を見附け出して之を懸け、彼方此方を覗き廻るが如くに、是は珍無類の書物であると云つて、心から聖書の講義を傾聽し、又は之を繙閲し、實に英國人民は聖書によつて形造られた、而して此英國人の中から粋の粋と唱ふべき彼の清教徒が群をなして亞米利加へ押渡り、其所へ新英の五州を開いた、此の新英五州の地へ聖書に依つて形造られたる民が住むやうになつたから、其の感化が十三州に及び、遂に十三州を悉く聖書に依つて形造るやうになつた、更に其の感化が亞米前加合衆國全躰に及ぶと云ふやうなことになつて來て、亞米利加の民も亦聖書に依つて形造られるものとなつた、北日耳曼は如何であるかと尋ねて見ると、彼のマーチン、ルーテルが聖書を獨逸語に飜譯して、愈國民全躰に讀まるゝやうになつたが、英國

程には行かなかつたのであるかなれども、矢張此の聖書が根本となつて北獨逸の國民を形造つた、今日世界の表に於いて、如何して英米の二個國が旭の昇るが如き勢を以て天下に雄飛して居るか、又彼の獨逸が近頃に至つて非常な勢を以て世界に蔓るやうになつたか、夫れはビスマルクの政策が當つたことの、グラッドストンの政策が當つたことの、イヤ亞米利加にも實に人物が居るからなどと申すかなれども、其の本當の根據に立入つて考へて見るならば、聖書に據つて形造られた其の國民に、他の國民の有せざる道義の力、即ち正義を慕ひ求むると云ふ一種の大なる力があると云ふことに基づくのではあるまいか。

諸君は屢々お讀みになつたであらう、亞非利加の或酋長が英吉利の女皇ヴィクトリヤの許へ使者を遣はして、貴國が斯の如く世界

に於いて優りた所以は何邊にあるや、と尋ねさせたときに、女皇は一巻の聖書を渡して、是れ即ち我英國をして今日あらしむるものだとの勅答ありしことを、是れは實に名言だと云つて其時の人々に持囃されたのである、左ればにや英吉利の女皇が其の聖書を野蠻國の酋長の使者へ渡して居る繪が、彼方此方の座敷に額にして掲げてある、私は今尚忘れることが出來ないのであるが、十八九歳の頃に基督教を信じ、其際私を教へた亞米利加の陸軍砲兵大尉ゼンス氏に向つて、先生、如何に致したならば、我日本國へ充分に基督教を布き廣むることが出來ませうか、何か基督教に關はれる書物でも配りましたら如何でござらうかと云つたら、先生曰く、聖書を全國に散布すべし、是が日本を斯教に導く第一の捷徑であると、當時私は其の深意を悟らなかつたけれども、今日考へて見ると、成

程先生の云つたことは深い根據のある言葉であつたと云ふことが分かる、聖書は斯の如くに力のあるものだからして、今や世界の表に於いて、此の聖書を出版する會社は七十個所ありて「ブリチシユ、バイブル、ソサイチー」の如きは其の設立より今日に至るまで九十八年間に一億三千六百萬册の聖書を世界各國に散布したと云ふ事である、實に此の聖書は三百二十個國の國語に飜譯されてあつて、世に知れてあるほどの人種は皆聖書を手に取つて讀むやうになつたのである。

斯樣なことを今晩諸君の前に申上げたならば數限りもないことであるから、直ちに進んで聖書は如何なる物であるかと云ふ本論に這入る事にせよう、聖書と申せば、舊約が三十九卷と新約が二十七卷にて一名六十六書と云ふ、此の六十六書は千五百年の間に凡そ四十人ば

かりの手によつて著述されたものであつて、僅か一時間や二時間に詳論する事は無論出來ない只大躰の事を申上げるより外はあるまい、此の聖書は如何なる書物であるか、之れを研究するには何が本書の眼目であるかと云ふことに着眼せねばならない、諸君が私の前へ一册の書物を持つて來て、君之を讀んで見給へと云つて出される、夫れを見ると吉田松陰の傳と書いてある、そこで私は此の書物は何が眼目で書かれたかと云ふことを第一に考へ、さうして序文を讀む、夫れから目錄を讀んで、嗚呼是れは彼の吉田松陰が實に國家の爲に日夜奔走をした、其の止むに止まれぬ大和魂と云ふものを顯はしたのだなと思ふ、其の書物の眼目を見、夫れから尚詳しく見ると、イヤ自分が看破した通り、是れは實に止むに止まれぬ大和魂を書き現はしたものだと云つて、其他何事が書いてあつても、止むに止まれぬ

大和魂を學んだら宜いと云ふやうに思つて一生懸命に讀む、其通りで此の六十六卷の書物も、成程千年も懸つて四十何人の人々が筆を取つて書いたにもせよ、此の聖書には確に創世記の始めから默示錄の終りに至るまで、此の六十六書を通じて居る所の大眼目がなくてはならない、若し眼目のない書物であつたならば、是れは無論一讀するの資格はないのである。

扨て諸君此の聖書の眼目は果して何であるかと云ふことが考物である、私の如き者が聖書の眼目に就きて種々の批評を下すよりも、キリストより後今日に至るまで實に一人だと云はれ、又キリストの御精神を現はす上に於いては、其人の右に出るものなしとの公評ある彼の使徒パウロが聖書に就いて何と申して居るか、夫れは私が前に引いたやうに『聖書はみな神の默示にして敎誨と督責また人をして道に

歸せしめ又義を學しむるに益あり』といつて居る、聖書は小宇宙だ、其宇宙の中には引力の理もあり、遠心力求心力も存すると云ふが如く、此の聖書の中には神は獨一だとか、又人間は罪人だとか、罪を悔改めねば救はれないとか、人間の精神上に關はれる教理が有ると云ふ事と、夫れから人間の踏み行ふべき大道と云ふものがある、人間は其の大道を日々踏み行ふやうに磨き立てゝ行かなければならない、其道が示してある更に進んで讀んで見ると『これ神の人の完全を得て諸々の善事を行ふに缺なからん爲なり』とある、是れは何う云ふことであるか、此の聖書を書かれたる目的は神の聖意に叶ふ所の人間が、段々此の聖書に據つて修め養はれ、遂に善事を行ふに缺のないものにしようと云ふのが聖書の眼目だと申すことである、是には何人も不同意があるまいと思ふけれども、私はバウロの評論だけで滿足は出來ない、そこで、私共の救主と崇

め尊むイエス、キリストが聖書に就いて如何なる論評を下されたか、其の言葉を讀んで見たいと思ふ、馬太傳第二十二章三十七節に『イエス答けるは爾心を盡し精神を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし是第一の誡なり』と說きになつた、諸君、宗教と云ふものは我心と神の心とが結び付くのである、我精神と神の精神とが結付いて、水も漏れないやうに確り結ばれて離れることの出來ないやうになるのである、そこでキリストが心を盡し精神を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべしと仰せられたときには如何です、全身全力を盡して天父を愛すると云ふことになつて來る、其の愛するやうな心が如何して起るかと尋ねて見たら、神は則ち愛なり、何故貴方は親を愛するかと尋ぬると、親が私を心から愛するゆゑ私も亦止むに止まれない愛を以て親を愛すると云ふであらう、其の通りで天父は愛であつて心の

底から私を愛して下さるから、私も亦止むに止まれない愛を以て之を愛すると云ふので、そこで神様と私とが結び付いてしまふのである、是れが宗教の奥義だ、其次に『己の如く爾の隣を愛すべし』と云ふのは我身が可愛い如くに四邊の人々を心から可愛がつて遣れと云ふことである、諸君は仁義五常の道とか、人倫の道とかお唱へあさるでありませう、其の君に忠、親に孝、兄弟睦まじく、夫婦相愛して行くと云ふ道は何から生み出して來るかと、斯う諸君がれ尋ねなさつたならば、我身を愛する如くに其隣を愛すると云ふ止むに止まれない誠から起るのである、是は諸君が日々に御研究なさる、倫理問題である、そこで宗教上の極意と倫理道德の極意と云ふものは何かと云ふと、愛神愛人と云ふに歸着するのである。

然るに夫れだけて聖書の眼目と云ふものが達せられたかと云ふと、未

だ夫れだけでは達せられない、更に使徒パウロの書を研究すると、羅馬書第十章四節に『凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終となれり』とある、キリストは律法の終……豫言の終と成りなされた、言葉を換へて云ふと聖書は則ちキリストだ、キリストは則ち聖書である、是れは諸君、大に味うて戴かなければならぬ章句である、今諸君、は私に向つて舊約聖書三十九卷と云ふものは何であるか、細に申せば祭司と豫言者と云ふ二ツの流派によつて組立てられたもので、舊約の錦は……本當に穿つてお話を申すならば、豫言者的正義をタテとし祭司的犠牲と云ふ情をヌキとして織いだしたものである而して約翰傳第一章十四節に『それ道肉體と成て我儕の間に寄れり我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り』とある、如何ですか、諸君、神を愛し人を愛すると云ふことは、是れ宗教と道徳の

基と云ふのであるかなれども、私共が深く穿つて考へて見ると、祭司の犧牲となる情と、豫言者の正義と云ふ二者が只舊約の中に在るだけでは「私共の胸にさう甚だしき響は來ないのである然し』それ「道肉體と成て我儕の間に寄れり』とある如くに、今から千九百年前に此の世の中へ顯はれ給ふた、其のイエス、キリストを私共は心から味うて見ると犧牲と成つて人の爲に死ぬると云ふ深き情と、神から出る正しき考とを以て人の罪を責め、人をして義に歸らしめやうとする、其の恩寵と眞理とが人間の形となつて現はれ來つたのである、言を換へて云ふと舊約にある豫言者の正義の精神と人の爲に盡すてう、祭司の犧牲的精神がイエス、キリストと成つてユダヤの野に顯はれ、遂に其のイエス、キリストが三十三年の間空飛ぶ鳥は巢あれども、地に這ふ獸は穴あれども、人の子は枕する所もなしと云はれる程に、種々に心を

碎き、人の爲に盡して、遂に命をお棄てなさることになつた、夫れで舊約の精神がキリストとなつて千九百年前に顯はれたと申すので是れが聖書の眼目である。

夫れならば、新約の廿七卷は何かと云ふと、是れは實に面白い、其の初めに在る馬太傳、馬可傳、路加傳、約翰傳の四ツは四福音と唱へてマタイ、マカ、ルカ、ヨハ子の四人が錄したので、其中で初めの三人はキリストの外傳を描き、後の一人はキリストの內傳即心の中に充ち滿ちて居つた神意識を書き顯はしたのである、尚細かに申せば初めの三人はガリラヤの地に活動なされたキリストを顯はし、後の一人はエルサレム又はその近傍に於けるイエス、キリストを顯はしたる者である、即ち初めの三人は猶太人の救主を顯はさうとし、ヨハ子は萬國萬民の救主なるイエスを顯はさうとし

た、是れがキリストの言行錄である、夫れから使徒行傳は其の弟子方がキリストの言行、心事、使命に付いての說明論證であり、其次は書翰、最後には默示錄てう奇書である、此奇書は味へば味ふ程意味の深いものであつて、當時の政府に對し實に憤懣に堪へない所の情より、此儘に過せば羅馬帝國は必ず滅びるぞと云ふことを暗號を以て書した書物である、シテ見ると舊約の精神がイエス、キリストと成つて茲に現はれた、其のイエス、キリストを人々の前に現はさうとして、筆を執つて書き錄されたる物が即ち新約全書である、苟も諸君は此の六十六卷の書物に向つて、是れは我々に何を敎へるものであるかと云ふ大眼目に目を着けて之を硏究なさるならば此六十六書は吾人々類に向つて宗敎道德の本源たるイエス、キリストを描出したものであると斷定する事が出來る乃ちイエス、キリストを學ぶ是聖書を學ぶ

眼目である。

そこで私共は此のイエス、キリストが聖書と成りになつた、聖書がイエス、キリストに成つたと云ふことが諸君に解せられるならば、夫れは實に幸であると思ふ、諸君は御承知であらう、一休和尚が高野山へ登つたときに、同山の名僧が頻りに看經をして居つた、其傍に大般若經が置いてある、一休和尚は之に腰を懸けてその看經の有樣を眺めて居つた、ところが名僧は看經が終ると一寒僧が大般若經に腰打懸けて居る無禮を咎めて、其方は僧侶の身でありながら此の尊き大般若經の上に腰を打懸けるとは何事ぞと云ふと、和尚は、大般若經が大般若經の上に載せられたのであるから何も汚すと云ふことはないと應答へたので、咎めた僧は恥を搔いたと云ふ、實に然りキリスト、イエスは舊約全書の精神を以て現はれ、而して其のキリスト、イエスの精神が新約全

書に成つたと云ふのであるから、私共は心からキリスト、イエスを學び、キリスト、イエスが十字架に懸つて死なれた所を味うて見る、さうして御互罪人が心から悔ひ改めて、天父の慈愛の光に照らされ、神と我とがシッカリと結び付いて來たと云ふときには、是れ即ち宗教の大精神を得たのである、而してキリスト、イエスが人間の爲に生命を捨てゝ死になされたと云ふことが、我が腹の中に深く徹底して、我は不肖なる者であるけれども、切めては我國民の爲に汗なりとも流さう、我國民の爲に膏を絞つて一ッ遣らうと云ふの決心が動いて來て、民を愛し、國を愛すると云ふ意に成つて、夫れが君に忠となり、親に孝となり、一家の中に對しては親愛の情となり、尙人々に對しては赤誠を以て之れに接すると云ふときには、五倫五常の道は言はず語らずの中にチャンと行はれるやうになる、是れが即ちキ

リストを學ぶのである、シテ見ればキリストを學ぶと云ふのは、私共が聖書の眼目を心から學ぶと云ふことに外ならないのである。

ところが諸君、世の中には種々雜多な論者があつて、イヤ大眼目は其所に在るかは知らないが、創世記を開いて見ると、神が六日の間に世界を造つて七日目にお休みになつたとか、蛇が物を云ふたとか戰爭の最中に太陽が運行を中止したとか、實に聽くに堪ゑない可訝しなことが書いてあるから、何うも聖書は讀むに堪ゑないと云ふものがある、夫れは私も御同意である、諸君も私も凡て此の世界に生存する人間には皆理性と云ふものが賦與されてある、私共が聖書を開いて讀むと今申すやうな可訝しな事が澤山にある、到底讀むに堪えない、聖書の大眼目が何程宜いにしても、理性に滿足を與へることが出來ないと云ふならば、どうも讀むに堪えない、けれども諸君、茲

に考へて見なければならないことは、昔は聖書一卷を手に握つて、此の聖書の中には人類學あり生理學あり星學あり本艸學あり有らゆる學問が備つて居ると考へて居つた人も隨分多かつたのであるが、今日の我々は何程保守的神學者でも、此の聖書の中から理科學を學ぶ人はあるまい、夫れは勿論ないのである、併しながら私共が天地創造のことを讀むときに、眞に下らない事ばかり書いて有れば、何うしても我理性は滿足しないから讀むことは出來ないが、諸君は創世記の一章から三章までの間を繙いて天地創造の歴史を讀んで御覽なさい、只之れをれ讀みに成たならば、其の價値の有る所をれ認めになることが出來ないであらう、茲にパビロニヤの傳説を引出して來、又日本の神代の昔のことを引出して來、之を讀去り讀來つて、此の創世記と較べて見らるゝならば、創世記の天地開闢の記事と云ふものは、他の傳説よ

りはズッと勝れて居ることを認ることが出來る、或人は第一日に何が出來た、第二日に何が出來たと云ふのは可訝いぢやないかと云ふが、是は何も可訝いことはない、人々の記憶に便ならしめんが爲に、一二と云ふやうに別けて、詩歌的に天地開闢の歴史を書いたものである其點へ眼を着けて讀んで見るならば、此の開闢の記事は、世界の他の開闢の記事に較べて見て勝る點のあることを發見するのである、又舊新兩約書中には奇蹟的記事が多い、此奇蹟に就いても見樣一ツである、私が十七の年であつたが、此の奇蹟論が分らずして、先生へ頻りに尋ねて居つた、其中に私は自分の心の中に一種の光が發したやうに感じた、何を感じたか、キリスト、イエスと云ふものは神の子だ、即ち天地萬有を造る所の神の子であれば、茲に書いてある位な不思議が行へないやうな詰らな

い人物ではない、此位なことを行ふのは最と易い所の大人物であると云ふことを不圖思ふたのである、キリストが神の子であると云ふことは他に證明する道がある、故にキリストは神の子であると云ふことを眞に學び其の眼識を以て讀んで見たならば、奇蹟は何も妨げにはなるまい、夫れは一寸見た位では分らない、何うしても理性に解せられないときには、先づ夫れを棚に上げて置き、此の聖書の大眼目に就いて心からお學びになり、さうして其の得た所の見識を以て聖書の分らない所へ押及ぼして御覽なさい、そうするとスラーリと夜の明けた如くに道理が分つて來るのである、只私が聖書に就いて驚くのは、今日の開けた學問に較べて見て、其の學問上から腹を抱へて笑はなければならない事は、多く見出せないと云ふことである、聖書は學問の爲に書かれた書物ではないのに、學問の上から考へて見ても、其の聖書の中に是れ丈け

は何うしても可訝な、抱腹絶倒讀むに堪えられないと云ふやうな誤謬は書いてないと云ふことで、是れは實に驚くべきことである。

そこで今一歩進んで考へて貰ひたいことは文學上の價値である、何程聖書の眼目が宜いにしても、何程宗敎上及び道德上の原理が存するにせよ、何所を開けて見ても文を成して居らない、實に間違だらけと云ふやうなものであれば、ドーしても讀むに堪えない、是は私が宗敎家として申すよりも、文學者に讓つた方がよい、序でゞあるから二三の言を申上よう、人々は審美性と云ふがあるので、此の聖書の文章は如何なるものであるかと云ふ點に着眼するのが常である、この審美性を滿足させることが出來ないならば、私共は最う頭を振つて、是れは何うも結構な書物かも知れないが讀むに堪えないと云ふことになつて來る、ところが幸な事には諸君が如何

なる文學者へ行つてお尋ねになつても、本當に文學をやらうとするならば、又本當に文章を學ばうとするならば、宜しく舊約聖書に據るべしとの忠告を與へるであらう、歷史的小說としては約百記をお讀みなさい、戲曲としては雅歌及び以士帖の書を學ぶべし、政論としては耶利米亞、以賽亞、亞麽士等の預言書を讀むべし、若し夫れ諸君が以賽亞書の四十九章から五十三章までをお讀みになるときには、諸君の心の中が躍つて來るので、斯う云ふやうな高妙な文章は唐宋八大家の中でも見たことがない、斯う云ふやうな文章は實に何うも莊子の中にも見たことがないと云ふやうに、眞に神飛び魂馳すると云ふやうな金玉の文章が、此の舊約聖書の中に籠つて居るのである。

尚二三の例を申せば耶利米亞の哀歌は孔明の出師の表に比すべく、希伯來十一章は文天祥の正氣の歌に準ずべしとして讀みくらべて御覽

なさい、更に詩經を繙いて、周南の篇を讀み、夫れからダビデの詩篇を一章づゝ讀んで較べて御覽なされたら如何であらうか、ダビデの詩篇の中で一二の事を御紹介して置くが、其の第十九篇を開いて御覽なさい『もろ〳〵の天は神のえいくわうをあらはし穹蒼はその手のわざをしめす、この日ことばをかの日につたへ、このよ智識をかの夜にれくる、語らずいはずその聲きこえざるに、そのひゞきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ、神はかしこに帷幄を日のためにまうけたまへり、日は新郎がいはひの殿をいづるごとく勇士がきそひはしるをよろこぶに似たり、そのいでたつや天の涯よりし、その運りゆくや天のはてにいたる、物としてその和煦をかうむらざるはなし、エホバの法はまたくして靈魂をいきかへらしめエホバの證詞はかたくして愚なるものを智からしむ』。

とある如何です、實に穹蒼を仰いで是れは神の造り給ふた所であるか、爛々たる小星を見ては是は神の御手の工であるかと云ふ所から、日は東から出て西に入る有樣を描いてある所を見て、遂に之を造り給ふたるヱホバの神の御業は嗚呼妙なるかなと云ふときには、我輩の意の中がスーッと淸くなつて邪念邪慾は離れてしまひ、我心靈は九天の上に登つて限りなき「ヱホバ」の神に接し、其の「ヱホバ」の神と永久に住ふと云ふ高潔なる思想が、此の小さなる我胸の中に充ち滿ちて來る、かの詩經は比較物にはならないか、又諸君が佛法の經文が實に高尙であると云はるゝならば、私は聽きたい、佛法の經文は何れが高尙であるか、妙法蓮華經は實に讀むべきものだと諸君が敎ゑ給ふならば、法蓮華經の比喩品に示めせる放蕩息子が家を飛出して、其父が之れを救はんが爲に千々に心を碎く有樣が描いてある所と、路加傳

十五章を讀で比較て御覽なさい、法華經のは實に細やかに、寧ろ非常に長たらしく書いてあるが、路加傳十五章は僅の言葉の中に眞に味ふべき救世の眞理が籠つてある、此の言葉の奥には至仁至愛なる天父が吾人々間を愛し玉ふ至情が含んである、實に聖書は文章として御批評になつても、世界無比のものであることが分るであらう。

終りに臨んで諸君に申上げたいことは、宜しく活眼を開いて活書を讀むべしと云ふことである、諸君よ、世の中に活きた書物も澤山にあらうが、活きた書物と云ふ中にも、此の六十六卷の書物ほど活きた書物はないのである、諸君羅馬書の第一章十八節以下を開き、腸を開けて此の聖書の鏡に照し、己れの罪に就いて考へて御覽なさい、使徒パウロが神の聖靈に充されて、私共に罪のことを説き去り説き來つて、其罪の實に罪たることを敎へて呉れる條を讀むに到つては、恰も鐵槌を以て我

胸を擊たるゝ如くに、我が罪を甚しく責めらるゝことを發見するのである、羅馬書第七章の終りに成ると、善を爲さんとする意はあれども、惡を爲さんと欲する意の爲に驅られて、遂に其の善を爲ことが出來ない、我は惱めるものかなと云つて、彼の歎く有樣などを讀んで御覽なさい、我心の古戰場を記錄したものゝ如くに讀めるのである、斯の如くに聖書は活きた書物であるからして、諸君は此の聖書を讀むのに、或は天文學、或は心理學と云ふやうな點から眼を着けてお讀みになつたら、夫れは死眼を開いて活書を讀むのである、否讀むのではない、活書を死なしむるのである、故に諸君は活眼を開きて活書を讀まなければならぬ、活眼を開いて活書を讀むと云ふのは此の聖書は我々に對して、神は只獨の父に在します、其の神は則ち慈愛の神である、我々人間は罪人である、此の罪ある人間は悔改めなければ滅びてしまふ、之れを悔改むる

にはキリストのお現はしなされたる神の慈愛に基かなければならぬと云ふことを示すので、其の宗教上の眼目たる眞理を之れに據つて見ることである、之れに據つて學ばなければならない、更に進んでは眞に我國家を愛し、我四邊の人々を愛すべきことを學ぶばかりでなく、天よりの力が我上に加はり來つて、如何しても夫れを行はなければならないやうに我をせしむるのである、夫れが即ち聖書だ、諸君が此の聖書をお讀みなさるときには、佛者が經文を机の上に置いて尊重ふて居るやうなことをなさらぬでも宜しい、さう云ふ附値打をなさらぬでも、聖書其物に力があるのだからして、何所へ腰を懸けてお讀みになつても、或は何處へ跪いてお讀みになつても、諸君が心を清らかにしてお讀みにさへなれば、此の聖書自らが諸君に非常なる權威を以て教示する所がある、夫れで聖書を讀むには・キ

リスト、イエスと云ふことに着眼して、其のイエスに據つて現はれたる眞理を得て、夫れを以て我心靈を養ひ、夫れを以て我道德を磨き立てると云ふことに深く注意してお讀になつたときには、初めて活眼を開いて活書を讀んだと云ふことになるので、遂には諸君が聖書となり、聖書が諸君となると云ふ所まで達するであらうと思ふ、故に諸君は今後は此の聖書を手に取つて深く味はれんことを希望するのである。

第九章　幸福よりも聖德

凡の懲治今は悅ばしからず反て悲と意はる然ど後これに由て鍛錬する者には義の平康なる果を結ばせり、是故に爾曹疲たる手弱たる膝を健かにせよ。（希伯來書第十二章十一節、十二節）

世に幸なる人とか、或は幸なる家とか云ふが、その幸とは何である

かと尋ねて見ると、是れは普通人の云ふ幸福と云ふことである、先づ一人に取て申せば、身體が健全であつて命が長く、家内安全商賣繁昌、或は一國に取て申せば、國家安寧と云ふやうなことである、聖德と云ふのは何であるか、是れは聖人ならば聖人だけに、凡人ならば凡人だけに、夫れ〴〵自分は是れだけの所に進まなければならないと云ふ目的を有つて居るので、言を換へて云へば道德の標準と云ふものがチヤンとある、その標準に叶ふやふな立派な品格を磨き立てると云ふことである、それで私共の目的が高くなるのであるから、聖德と云つたときには聖ならんことを欲して德に進む意味である、けれどもまた聖と云ふ文字は、爰に圓い輪を拵へたやうなもので完いと云ふ意味である、故にイエス、キリストは私共に向つて天の父の完全きが如くに自を完全うすべしと教へられた、

兎も角も私共は聖き德を自分の意の中に植込む、それが私共の品格となつて顯はれるやうになるのを申す譯である。

世の中には德義と云ふことよりも幸福を得たいと云ふ人が多い、大坂市百餘萬の人間の中で、德に進みたいと考へて居る人は甚だ稀で、雨夜の星の如くに僅なものである、人毎に、或は家毎に就いてお尋ねになつても、皆幸福を得たいと云ふ儕輩のみで、幸福よりも德でなくてはならない、假令現世で生命を捨てゝも德に進まなければならないと考へて居る人は、幾人見出されるであらうか、極めて僅少であらう、獨り大坂市ばかりでない、四千八百萬の我日本國民を考へて見ても、極く僅なものである、否現世界の人間の中で考へて見ても、幸福を好む人は多く、德を求むる人は至つて少ないのである、若しも爰に

埃及に在る金字塔のやうな繪を描いて見たならば、幸福を望む人は一番下の方の土臺の如くに多く、德を求むる人は一番絶頂の如くに少ないのであらう、そこで私共は幸福を得ようか、德を得ようか、何方を求むるのが、神の聖旨であらうか、また私共人間の探るべきものは何方であらうかと云ふことを考へて見ねばならぬ、如何でせう、先づ初めに神はこの世の中に於いて、人間をお作り遊ばしたのは、私共に幸福を與へたいと云ふの聖旨であつたらうか、或は聖き德に進ませたいと云ふの聖旨であつたらうか、この物質界の狀態即ち私共の住んで居る天地の有樣を考へて見たならば、羅馬書第八章二十二節に『萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に勞苦ことあるを我儕は知る』と使徒バウロが錄して居る、是れは神に造られたる者は、開闢以來今日に至るまで皆苦んで居ると云ふことをば、自分は信じて居ると云

ふのである、私共は其點を味はなければならぬ、今日は九月一日即ち二百十日であつて、彼方此方の農夫はみな十日も二十日も前から天候を案じ氣遣ひ、苗代の時から四ヶ月目の今日に至るまで、苦みに苦んで作り上げた稻田の安全ならんことを祈つて居る、然るに無慘にも暴風雨が起つて、この困苦をば水の泡にしてしまふ事がある、彼の約百記を讀んで見ると、七人の息子も、三人の息女もみな大風の爲に倒れ、家の下になつて死んでしまつた、自分の身躰は頭の天邊から足の爪先まで、一面に腫物が出來て苦痛に堪へられない、是れは小說であるが、實際世の中の現狀を考へる時には、神は私共人間を入れる牢屋として、この世界をお造りなされたのではあるまいかと思ふ、決して極樂では

ない、現世界は神が御互ひの爲にお造りなされた牢屋であると思つて差支ない、故にこの天地の構造を觀れば、決して神は私共人間に息災延命、家内安全、國家安寧と云ふやうな幸福を與へようと思つてお造りなされたものでないと云ふことが明白である『明日ありと思ふ心の仇櫻、こよひ嵐の吹かぬものかは』實に~~有異天變~~の世の中である、現に今朝まで膳に向ひ、悅はし氣に箸を取つて御飯を喰べて居つた者が、正午過に行つて見ると早や菜色になり、五躰が冷たくなつて居る、或は昨夜寢る時までは共に讃美を歌ひ、共に打語らうて居つたのに、今朝起るときには早や最う亡き人の數に入つて居ると云ふやうなことがある、如斯にして親に別れ、子に別れ、夫に別れ、妻に別れる、仮令互ひに生存へて居つても、親子一緒に住むことの出來ないやうな哀れの境遇に陷つて居る人がある、彼の某氏の一人の愛孃も、矢張りこの~~有異天變~~

、有為轉變

有為轉変

の世の中に生れ出で、尤も不心得ではあつたが、短銃を以て自殺せられた、その心情を察して見ると私共は實に堪へられない事がある、また私の知つて居る所に七歲になる娘の孤兒があるが、是れは父が死んで母は生きて居る、そこで一人の幼き妹と共に母の手許に於いて育てたいが、何か事情があつて、幼き妹は母の手許に居るけれども、長女は他人の手に掛つて居る、然るに彼女は他の子供と共に遊ぶときにも、不斷妹の寫眞を袂に入れて居り、夫れを出しては眺めると云ふ、是れは自分が妹と共に居りたい、けれども世の中の事情が許さない、子供心に堪へられない所から常に寫眞を所持して居るので、實に憐むべき者と云はなければならぬ。

斯樣に何一つ考へて見ても、この世の中は極樂でない、實に患難の多きが人間世界の狀態である、それならば古昔より聖人君子の說い

た所は如何であるか、孟子は天が私共人間に何か大なる役目を授けようと思召したときには、先づその人の心を根限り苦しめる、否心ばかりではない、その人の身躰をも苦めて鍛えに鍛えた上、初めてその人を大にお用ゐなさると示された、孔子は如何であるか、實に寒風肌を劈くと云ふやうな寒氣の時候になれば、他の樹木は皆葉が落ちてしまひ、恰も死んだやうになるが、獨り松や柏の類は青々として居る、是れは鍛えに鍛えて斯うなるのであると云つて居る、彼の菅原道眞は大に梅を愛したと云ふ、何故之れを愛したか、他の樹木は寒氣に中てられて未だその蕾をも發することが出來ないのに、梅ばかりは雪や霜の降る中に在つて、凛乎として蕾を開き初め、芳しき香を放つので、其點を道眞が愛したのである、而してその道眞は如何だと云ふと、時平の爲に讒せられて筑紫の大宰府に流され、實に憂月日を送つた、

先づ人間世界と云ふものは此樣な狀態であると云ふことを敎へたものである。

それならばイエス、キリストがお降りになつた時には、私共人間に向つて息災延命家內安全、或は國家安寧と云ふやうな事をお說になつたか、イエス、キリストは爾う云ふ幸福を人間に與へんが爲に骨を折られたかと云うと決して爾うではない『地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふなかれ泰平を出さんとには非ず刄を出さん爲に來れり』と酷い言葉を仰せられた、またお弟子にならうと思つて行くと『爾曹十字架を負うてわれに從へ』と仰せられた、そればかりではない、イエス、キリストの三十三年間の御生涯を見ると、何所に息災延命家內安全と云ふことがあらうか、實に彼は枕する所もなくして、彼方

此方を流浪なし、遂に猶太人の爲に拿へられて磔刑に罹り、世界始つてより以來未だ曾て人の知らない苦痛を受けなされた、聖書を見るとキリストは悲哀の人だと錄いてある、故に現世の幸福と云ふ側から觀れば、この世界に於いては神も大失敗である、決して神は幸福を與へようと思つて人間を造られたのではない、それならば如何であるか、神は私共をして聖き德を磨かしめんが爲にお造りなされたのであらう、是れは聖書に依つて明瞭である、然らば私共は聖き德を磨かんが爲に現世へ生れ出でた者である、人生の終局の目的は神の如き圓滿なる德を成就せしむると云ふ事であれば、その目的を達せんが爲には如何なる患難も如何なる困苦も如何なる迫害も、如何なる飢餓も厭ふ所に非ずと云ふ大決斷をする事が必要である、故に私共は如何なる惡魔とでも戰ひ自分の心靈を鍛ね上ると云ふ精神にならなくてはならない、早

い話が此所に是れ丈け多くのお方がお集まりになつてあるが、諸君は何う云ふ所から信者にお成りなされたか、若しも諸君が息災延命家內安全にて蝶よ花よと育てられ、何の患難もなく、何の困苦もなく、また何の失敗もなかつたならば、今日信者になつて居られるであらうか、先づ十人の中八人までは信者になつて居られまい、信者に成つたと云うのは聖德を磨き立てると云ふ精神を起されたからであらう、如何してその決心が出來たかと尋ねて見ると、彼方からは患難に遭はされ、此方からは困苦に迫められ、實に何うも堪へられぬ所より、是れは一番大に自分の心靈を磨き、聖き人間に成らなければならぬと云ふ發心が出來て、そこで初めて信者に成つたと云ふのは御互ひのことである、ベテロの生涯を見ても、パウロの生涯を見ても、またこの千九百年の間に現はれ出でたる知名の人々の生涯を見ても皆困苦に因て一身を取卷れ

て居る、皆不幸を以て一身を取卷れて居る、然らば私共はこの~~有爲天變~~有為轉変の世の中に立ち、この果敢なき人世に立つて、何う云ふやうに考へて居なければならないか、また何う云ふ決心を以て、之れに當らなければならないかと云つて見ると、夫れは信仰の一點張りであるけれども、その信仰と云ふものも智惠の上に起り來るものでは足りない、天には神が御座る、またイエス、キリストは救主であると云ふ事を認めて、何程聖書を研究し、神學を暗んずるやうに進んでも、智惠の上から來たのでは不可ない、また有難や〳〵の一點張で、讃美を歌つても、聖書を讀んでも說敎を聽いても淚が溢れて、有難くつて堪りませぬと云ふ情の上から來る信仰でも不可ない、是れは豫てお話を申す如く、意志、の上から來る信仰でなければならぬ、即ち私共の心の中に神を認め、救主を認め、さて人間は聖德を養はなければならないと云ふ事を認めて、

何所々々までも之れを養ふと云ふの大決心をなし、その神に御從ひ申し、その神に何も彼もお任せ申すと云ふ意志の上から出で來る所の信仰を以て立たなければならないのである。

諸君、彼のヨブは斯の如き困苦を受けた、その約百記の第十三章十五節の如きは實に見所である、何と記いてあるか『彼われを殺すとも我は彼に依賴まん惟われは吾道を彼の前に明かにせんとす』とある、假令神がわれをお殺しなさらうとも、われは神に賴縋るのである、われは惟わが取るべき道を神の前に明にすべきである、故に殺されても介意ないと云ふ事である、使徒行傳第二十章二十三節二十四節に『たゞ聖靈每邑に我に示していふ縲絏と患難われを俟りと、然どもわれは我往べき路程と主イエスより受し職すなはち神の恩の福音を證する事を遂ん爲には我生命をも重せざる也』とある、是れまた決して有難いと云ふ上ばかり

から來たのではない、何から起つて來て居るかと云ふと、神を我天の父と認め、キリストを救主と認めたからには、われが天地の公道を行くのに之れを妨ぐる者があり、また神の恩の福音を宣傳んとするのに、之れを遮る者があるならば、我はそれが爲に生命を捨てゝも介意ない、我は何も彼も神の聖意にお從ひ申すと云ふのである、是に於いてか私共に取つて最も肝要なることは敢てと云ふことである、一家の中に病人が出來、或は妻子が離散すると云ふやうな患難の中に陷つても我は敢て神を信ずる、我は敢て救主イエス、キリストを信ずると云ふので、この敢てと云ふ文字は私共の意志を以て何所何所までも貫いて神を信ずると云ふ意味である、その敢て信ずると云ふ事は御互ひが聖德に進む所の階級である、若し右の手が私共をして罪を犯さしむるならば、敢て右の手を斫棄て、若し左の眼が惡い物を見るならば、敢て左

の眼を抉り出す、また或食物が私共を妨ぐるならば敢てその食物に打勝のである、この敢てと云ふ非常の力を以て總ての惡魔に抵抗すべきである、而してそれに打勝つて段々進めば、遂には眞正の智識と云ふものが開けて來て、神と私共の意とが一になる、爾うなると實に淸らかなる德性が自然に磨かれて來るので、如何に私共を苦しめる物が在ても、平氣になる事が出來るのである。

それで御互ひが今日大に鍛錬しなければならないのは何所に在るかと云ふと、初めに私が朗讀した如く、總ての懲治即ち患難の中にあつて鍛ゑに鍛えて行くときは決して悅ばしい事はない、却つて悲いのである、けれどもその苦しい中を充分に鍛ゑ上げた曉には、義の平康なる果を結ばせるとある、其點へ到達したならば神の前に於いて、我意の中に眞正の平和と云ふものが顯はれて來る、我家庭の中にも眞正の平和を

來し、また我至る所に眞正の平和を持込んで來るやうになるから其點まで達すると不幸を不幸と感じないやうになる、彼の朱子が「富貴淫せず貧賤の樂、男兒此に到つて是豪雄」と云つて居る、故に一家の中に病人が出來ても、一家が破産するやうな事があつても、また一國が亂れるやうな事があつても、爾う云ふ不幸の打續く中に、泰然として神の聖名を讃美し以て聖德を磨いて行くならば、所謂豪傑の仲間入りをしたと申しても差支はない、そこで私が諸君にお勸めを申上げたい事は、神は決して幸福を與んが爲に我々人間をお造りなされたのではない、聖德に進ませんが爲にお造りなされたのである、而してその聖德に進ませんが爲には所謂可愛い子には旅をさせよと云ふ譬の如く神は屢々鞭をお當てなさるのである、屢々私共の身の上に不幸をお下しになるのである、然らば私共はその鞭の苦を堪へ、不幸の中を鍛ひに鍛

えて、義の平康なる果を結ばせ、爰に初めて不幸に因り遂には幸福なる者に成つたと云つて神に感謝をしなければならない、再言すれば、若しも、不幸が私共を襲ひ來つたるときには、失望することの代りに聖書を開いて閲み、或は神に祈禱を捧げ、イエス、キリストは現世の不幸の中に立つて如何なされたか、使徒パウロは如何にいたしたかと云ふ事を考へ、また古昔より今日に至るまでの先輩の行ひ來りし跡を觀、自分は斯う思ふが、是れでは最う一つ鍛錬の仕樣が足らない、斯の如くに鍛えに鍛えて義の平康なる果を結ばせなければならぬと云ふ點に着眼しなければならない、それでパウロは其次に『是故に爾曹疲たる手弱たる膝を健かにせよ』と云つて居る、イヤ米が十八錢になつた、イヤ二十錢になつた、是れでは到底堪らないと人は皆途方に暮れる際にも、自分は泰然としてその間に大に磨く所がなければならぬ、其點を磨

いてゆけば、私共は聖人の位置に進むことが出來る、假令聖人に達することが出來ないとしても、聖ならんことを欲するものであるから、この世界に於いて極く少數の有德者の仲間入をすることが出來るのである、信者になつたからと云つて金滿家になる譯のものでもなければ、また非常に幸福な人になるものでもない、不幸が襲ひ來つても之れを不福と思はない所の立派な德を一つ握るので、我身の四邊は患難と困苦と迫害と飢餓とを以て充たされても、我心靈は天地間に於いて謂ふ可からざる聖き愉快を得るのである、彼の約百記は神が更に我等を惠んで、彼のヨブに倍する所の財產をお與へになつたと云ふことを以て終局を告げてあるが如くに、神は必ず私共の上に非常なる財產をお與へになるのであるから、諸君は如何なる困難に遭遇つても決して落膽をせず、幸福よりも聖德を得

ようと云ふお考へにて充分に神を御信仰あらん事を希望する次第である。

第十章　健全なる信仰

あゝ神よ、しかの溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり、わがたましひは渇けるごとくに神をしたふ、活神をぞしたふ何れのときにか我行きて神のみまへにいでん

（詩篇第四十二章一篇二節）

人の此世の中に生れ出るや其初聲を揚げたときに早健康なる身躰の質は備つて居る、これは生涯健全なる身躰を維持することの出來るものである、その初聲を揚げたときに蒲柳の質で育つか覺束ないと云ふやうなのもある、これは何うも生涯不健全なる身躰を有する譯のもの

である、併し稟性は弱くても其人の身躰の養ひ方一ッでは極めて健全なる者に成れないこともなからう、亞米利加の現大統領ローズヴエルトの如きは生れたときは弱い方であつて、小學校時代でもこれでは到底物には成りさうもないと云ふ鑑定であつた、そこで當人は偉大なる事業を成すのには健全なる體力を要すると云ふ考で大いに身躰を養ひ立つることに努めた、ハーヴアード大學に在學中は愈々體力が發達して、各種の運動に於てチヤムピオンとして大いに勇ましく活動をなす程になつた、大學卒業後は西の方の牧場に行つて牧童等と相伍し馬に跨つて荒野を跋渉して居られた、さう云ふやうな方針で專ら體力を鍛え上ぐることに力められた結果として、現今にては大統領の激職に堪え、尚ほ綽々として餘裕ありと云ふべき有樣である。

信仰上の健不健も同じやうな譯合であらうと思ふ、即ち其出立點に於

いて宗教を信ずる動機が甚だ大切である、例へば利益の爲に宗教心を興さんとする者がある、宗教に這入れば大いに信用が増す、信用が増せば立身出世が早いと云ふ考から來るのもある、又自分は兎も角も家族の者に宗教心が必要であるとか、或は國家が宗教を必要とするとか云ふ考で自分は家族の爲又は國家の爲に卒先して宗教を信じて見せなくてはならない、即ち國家の利益、家族の利益と云ふ主義で信仰しやうとするのもある、又中には所謂御靈驗主義で、之れを信ずれば神經が鎭まるとか病氣が癒るとか云ふ考から來るのもある、これは極めて卑劣なる考であつて採るには足らないものである、併し世の多くの俗宗を信ずる輩、又は基督教を信ずる者の中にも幾分かさう云ふ御利益主義から來るのもないとは云へない、是等は元來の出發點が間違つてあるからして健全なる信仰には餘程緣遠いものと見て宜からう。

次には自分が一種の道德家に成りたいと思ふのである、併し所謂薄志弱行の徒であつて、善の爲すべきを知れども之れを爲すことが出來ず、惡の避くべきを知れども之れを避くることが出來ない、宗敎にでも歸依すれば自ら道德が行へやうと云ふ考から來るのもある、併し茲に考へなければならぬことは宗敎と道德とは全く其方面が異なるものである、後者は人を對手にし、前者は神を對手にするのである、神を對手にする結果自ら人を對手にする、道德の上にも善感化を受けて眞の道德家に成れることはある、けれども道德實踐を目的として宗敎に這入らうとする人は、幾許か其目的が達せらるればそれで先づ可なりとするのであつて、深遠なる宗敎思想を養ふとか、奧妙なる神との交際に這入るとか云ふやうな譯には行かないから、是亦健全なる信仰と云ふ妙境には達せられないであらう。

然らば信仰上の眞正の出發點は何であるかと云へば本文にあるが如く『あゝ神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり』此點です、元來人間は宗教的動物である、此頃スタールボック、コー、ゼームスなど云ふ諸先輩が心理學上より宗教の立場を研究した結果人は信せずしては居られない、信せなければ人として健全なる發達を遂ぐることが出來ない、恰も乾いては水を求め、飢えては又食物を求むるが如く、吾人の心靈は或時期に際しては神を求めずしては居られない、活ける神を求めずしては居られない、これが心の自然の狀態である、信せなければならないやうに造られたものであるから、信ずると云ふのが眞正の出發點であらうと思ふ。

そこで次に來るべき問題は何を信ずるかと云ふことである、先日福井よりの歸途に稻荷の停車塲から一人の紳士が乘り込んで向側に座を

占め、直ちに心易く談話をしかけて、アヽ波羅的艦隊は掌を反すが如くに容易に滅ぼすことが出來たが、戰局は何時治まるであらうか、媾和の條件は何うなるであらうか、貴君の御意見を聽きたいと云ふやうな談で、私も七時間ばかり默して居つたから、好い談話對手を得たと思つてこれに應答をいたして居つた、滊車が京都の停車塲に着くと其紳士は赤帽から多くの荷物を受取つた、それを見た私は發車すると間もなく其人に向つて、あなたは京都から乘り込むべき筈の乘客だと見たが何うして稻荷から御搭乘なされたかと問ひ掛けたら、イヤ一寸稻荷さんを拜して來ましたと云ふことであつた、これより先き知己の辯護士が京都の停車塲から乘り込んで私の横に腰を掛けて談をして居つた、私は嚴然として先の紳士に向つて言ふには、十九世紀も既に過ぎて二十世紀の曙を迎へた今日、而も我日本は世界の檜舞臺に立つて目覺しき活

動をやりつゝあるのに、貴下の如き紳士が狐を拜むとは何事ぞ、其理由を見出すに苦しむと言ひ放つたところが彼はイヤ狐を拜むのではない、其點は又其點に理由があると言つて言葉を濁らした、其時に傍らに座して居つた辯護士が私の事を紹介して、これは宗教家の誰某であると言つたので、先の紳士は名刺を取り出して一禮をし以後は御懇意に願ふと云つた、私は滊車中ではあつたかなれども、苟くも紳士の體裁を備へた者が假令豐受大明神を拜すると云ふ遁辭を用ゐるにしても、其心中には狐より御靈現を授りたいと云ふ下心であると思つたので、嚴然其非を叱責した積りであつた、今我國に於ては此人のやうに紳士の体裁を備へながら稻荷風情を拜する者もある、斯の如きものを拜しては迷信又は妄信に陷ることはあつても、健全なる信仰に到達することは出來ない。

又一方には哲學を嚙つたとか、青表紙讀とか稱する者があつて、吾人は宋儒の所謂天は則ち理なりと云ふ眞理は之れを認むるとか、神とは理想なりと云ふ眞理は誠だと思ふ、去りながら智情意を備へた人格の神など云ふものは何うしても承認が出來ないとして居る、一寸聞けば一理あるやうに思ふが、深く味ふて見れば矢張り極めて冷たい哲學上の眞理の一を認めた丈けであるから、これも健全なる信仰には這入り難いかと思ふ、此間福井に於て二三の婦人連が私を取圍んで種々と質問の矢を放ち、神とは何でせう我本心の延長したやうなものであつて、かの主觀的の神なら了解が出來るが我以外に客觀的の神が存在するてふことは解りませぬと申さるゝ方もあつた、主觀的の神てふ考は一寸面白い、佛敎にては心外~~物~~なしとも云ふので何だか深いやう~~な~~たが、よく考へて見れば、我即ち神と云ふことになるので、是は秘義として置けば興

味があるが、分つて見れば興の覺めた次第である、此考では到底信仰は起らない、蓋し信ずべき目標がないのである。

そこで何を信ずるかと云ふ問題になれば、矢張り本文に歸つて、わが靈魂神をぞ慕ふ、活神をぞしとふと云ふ點に到達いたさずばなるまい、私共はキリストに據つて顯はされたる神を信じて居る、其神は天の父と稱してある、此父に對するときの吾人は即ち神の子である、譬へば茲に一家庭ありとせんに、賢明なる父母があつて其間に多くの子女が生れた、其多くの子女は旦に夕に賢明なる父母の感化を受け、その善良なる行爲を目擊し、高尚なる物語に耳を傾けて居るので、子として其兩親に對するときには眞率順良なる心を以て孝道を盡して居る、此家庭の如く健全なるものは多く見出すことが出來まいかと思ふ、何となれば多くの子女は賢明なる父母を信認して、萬事萬端其好模範に則つて動作

をいたして居るからである。

茲に吾人の心靈上より見れば千々萬々の子女を有する大家庭が宇宙の間に存立してある、其家庭の長は至仁至愛なる天父である、其子女たる吾人は天父の大聖旨が何れに存するか、即ち天父を代表する所のイエス、キリスト、換言れば吾人々類の長兄たるキリストに據つて之れを辨へ、常住座臥父又はキリストを龜鑑として其大聖旨を遵奉して言語動作を成すのであるから、吾人の人格の上にも神々しき感覺を受けて、不知不識の間に高尙優雅なる品性を形成ることが出來る、而して吾人の生涯は此世限りでなく天父又はキリストと偕に其の大家庭の內に在つて永久存在をするのである、要するにキリストに據つて顯はされたる天父を信ずるの信仰と、其天父に從順に奉仕する孝心と、吾人の天父と偕なるべき生命は永久的のものであると云ふ、此三大要件を認む

るのが即ち基督敎の信仰の精髓であらうと思ふ。

嘗て東京に行つて神田の青年會館で演說をいたした事があつた、其時に私の友人で學識もあり智惠もある人が、友人が演說すると云ふので常には餘り敎會に顏出しをしないのであるけれども、好意を以て遙々傍聽に來て吳れたさうであつたが、演說が了ると私に向つて言ふには、今夕の演說は餘程興味を以て聽いた、君等も基督敎の糟粕を說くことの代りに千古萬古易らざる所の基督敎の精髓を說くやうになつたのを見て心中喜悅に堪へない、此精髓を握つて說いてさへ居るならば、如何に科學が進んでも、又哲學が進んでも、これだけは動かすべからざるものと認むると挨拶をいたしたが、其挨拶を待つまでもないことで基督敎を信ずると云つても信じなくても宜い、換言れば何うでも宜いと云ふやうなことでは命懸になつて信ずる譯にも行かず、又主張をする

譯にも行かない、先に段々說き來つたものは眞に基督敎の精髓、又宗敎上の大眞理と謂ふべきものであるからして、諸君が此點をさへ握つて居られるならば追々健全なる信仰が其所に生じ來つて、動かさうとしても動かすことが出來ず、倒さうとしても倒すことが出來ない、大磐石の上に立つて信仰の眼を以て天下に對することが出來るやうな意氣を得るに至るであらう。

近頃頻りと私の胸間に浮び來る問題は人生觀である人間は何の爲に此世に生れ出でたであらうか、何にか此世を益する爲であるとすれば、廿四五まで立派に成人して、イザ是からと云ふ塲合になつて可惜病氣に侵され立つ能はず天死するものもある、米國などでは餘り出來のよい子供は早く天使が迎に來るとて、兩親は其早世せんことを懼るゝと云ふが、質の惡しきものが生延びて、質の善いのが早く逝くやうな傾が

ある、アレヤコレヤ考え合するときは人は此世の中に人格を研ぎ立る爲に出で來たものである、ソコデ早く人格の出來たものからサツサ〱と卒業するのではあるまいか、いかなる人でも死期の近くに從ひ俗に死花が咲くと申して見違へる程人格を揚るやうである、いよ〱人格を研ぎ立るのが生存の目的とすれば、艱難や病氣は此上もない善い砥石で、平常十年かゝる所は病床なり逆境なりに遭へば半年乃至一年位で十分に研ける次第である、羅馬書八章廿八節に『又凡の事は神の旨に依て召されたる神を愛する者の爲に悉く働きて益をなすを我儕は知れり』とパウロが申されたのは此邊の消息を洩したものではあるまいか、折角アレまで修業させて夭折したのは惜いと云ふが、世の利益の爲には實に惜い、然し生れ出た目的は長壽の人と異ならない否な寧ろ長命の人よりもよりよく達した方であるから、其人は天上に於ては大滿足

であらう。

右の如く人格を研き上るには健全なる信仰を養ふのが最も肝要なる點である、此の健全なる信仰に到達しやうとすれば神學思想を養ふも宜し、又宗教學を研究するも宜からう、けれども實は活きた信仰を顯はした書物を讀まなくては不可ない、それは一言に云へば聖書だが、中に就いて最も良からうと思ふのは舊約では詩篇、新約では約翰傳及び約翰第一書であらう、其他と雖も無論健全なる信仰を養ふに適當するものは澤山に在る、けれども此三書を熟讀玩味して其中に潜んで居る、先に私が健全なる信仰に就いての三大要件として擧げたものを學ぶのは甚だ適當であると思ふ。

次にはたゞ讀んだばかりでは妙味がないので、沈思默想してそれを己が物となさなくてはならない、雨が降り地層に水が浸入して行くが

如く、讀書に據り、思索に由り、健全なる宗教思想が腹の中に湛へて來る、其湛へた所のものが遂に健全なる信仰を生み出す譯になつて來る、併し思想ばかり養ふても不可ない、之れを實驗し實行すると云ふことがなかつたならば、矢張り雅各書に在る如く『信仰も行離るれば死するなり』又『その信仰行と共に働き且行に由て信仰全備を得たるを爾見るべし』とあるが實に其通りで、思想上に得た所のものが遂に事實の上に現はれて活きた信仰となり、活きた信仰が活きた人格となり、遂に吾人の言行を生むのであるから其點にまで達すれば確かに健全なる信仰であつて非難の打ち所がないやうになるであらうと思ふ、今や我日本には種々雜多な宗教が輸入り來つて、西洋にて信せられた樣々の信仰を吹き込まうといたして居るが、吾人は幸に二十世紀の今日に於いて信仰をするのであるから、各宗派に附隨いた糟粕は悉く棄て去つて純

白なる信仰を以て我邦人を救ふことにいたしたいものである、諸君も幸に健全なる信仰を養成されんことを希望す。

第十一章　愛　人

第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし

（馬太傳第廿二章三十九節）

『桃李不語下自成蹊』と申す言があるが、これは桃や李の花の咲き亂れてある所には多くの人が集ると云ふ意味であらう、愛のある所には人自から集まると申しても宜からう、雌鳥の羽翼の下には多くの雛が集まり、家庭の内に於て母親の在る所には總ての子供が寄り集まる、即ち母が二階に行けば直ちに二階の部屋が賑ひ、母が下の部屋に降れば直ちに下の部屋が賑ふ、實に世界の中で何處が樂しい所であるかと云へ

ば愛のある所である。何處が悲しい所であるかと云へば愛のない所である、愛ほど宜いものはないかと思ふ、過ぐる聖日には神を愛することに就いてお談を申したから、今日は人を愛することに就いてお談を申したいと思ふ。

先づ人を愛すると云へば人觀と云つて、人を如何に觀るかと云ふ問題を考へねばならぬ、昔戰國の時代には人を見れば敵と思へと云ふことであつた、現今の我日本に於ては人を見れば盜人と思へと云ふことであるが、何うした悲しい情ない社會であるかと思ふ、實は人を見れば神の子と思へ、人を見れば兄弟姉妹と思へと云ふやうな社會になつたならば嘸嬉しいことであらう、私は我日本國内で旅行をすることが大嫌ひである、旅行は私に取つては非常な苦しみである、一度我家を出て我家に歸り着くまでは宛然泥棒の中を歩いて居るやうな心持

で暫くも油斷が出來ない、滊車に乘る、革包を掏られないやうに氣を注けねばならぬ、旅館に泊まる、直ちに下女が來て何かお大切な物があれば預かりませうと注意する、旅館に勘定を命ずる、過分の金を取りはせぬかと調べなくてはならない、腕車を命ずる、直ちに不當の金を取られると云ふやうなことで、實に苦しい譯である、けれども人を見れば兄弟なり、人を見れば姉妹なりと云ふ麗はしい國々を旅行するときには、不見不知の他人の中に時には言語も通じないやうな塲合があつても、掏られやうか、盜まれやうか、騙かされやうかと云ふ心配は無いのであつて、それは實に愉快である、私が歐羅巴の旅行を了へて英吉利の下宿屋に着いたときに、もう是ならば病氣をしても宜しい、此所で病氣をするならば兄弟も啻ならざる、姉妹も啻ならざる深切を以て我を勞慰つて呉れる者が、あるからと思つて安心をした結果、直ちに疲勞が出て來て

熱を發したこともあつた、兄弟なり姉妹なりと云ふ考が啻に僅の人々の間に存するばかりではなくして、多くの人々の間に存して居る國は眞に神に惠まれた國である、いかにも浦山敷いことである。

我日本が世界一等國の仲間入りをしたとか、或は文明國になつたとか申すかなれども、人を見れば泥棒と思へ、人を見れば敵と思へと云ふやうな詰らない考が國民上下の間にある中は實に其國は外道國、實に其國は劣等國と申しても然るべきかと思ふ、どうか吾人基督信者は衆に先つて、我四邊に在る人々は是れ神の子なり、是れ兄弟なり、是れ姉妹なりと云ふ高尚なる考を以て見ることの出來るやう、假令乞食の如き者、下層社會の賤しいと思はるゝ人々に對しても、私共は人間と像をなしたものであるならば矢張り神聖なるものである、兄弟である、姉妹であると云ふ考を持て交りたい、然せざれば人間を造り人間を救はんが爲

にたゞ獨子のイエスをお降しなされたる天の父に對して相濟まないことである、既に我四邊の人は兄弟であり、姉妹であると云ふ考になつたとするならば、偶には迂濶して時計を掏られることもあり、革包を奪られるやうなこともあらうけれども、此基督教の尊い人觀を我日本に敎へる爲には、時計の三ツ四ツ掏られても、革包の一ツや二ツ奪られても決して厭ふことではない、矢張り我四邊の人を兄弟と見姉妹と見る大義の爲には多少の損失は搆はないと云ふ決心を以て立たずばなるまいと考へる。

次の問題は己れを如何に觀るかである、潔められたる己れもあれば汚れたる己れもある、敎育されたる己れもあれば無敎育なる己れもある、上品なる己れもあれば下品なる己れもある、汚れたる己れ、無敎育の己れ、下品なる己れと云ふものは何を望んで居るか、麗はしい衣服が着た

い、美味い物が喰べたい、人々に賞められたいと云ふやうな、常に私の慾を逞しうしたいと云ふ極く下品なる考の外はないのである、けれども潔められたる己れ、教育されたる己れ、上品なる己れはもう少し高尙なる趣味のあることを考へて、飮みたい、喰ひたい、賞められたいと云ふやうなことよりも、どうか主の聖前に己れを磨き立てたいものである、此世に生れたからには切めては何ぞ一ッ主の聖榮になるやうなことをして生甲斐のある生涯を送つて見たい、どうか世の爲め人の爲め有益なることに力を盡して見たいと云ふやうな麗しい考に充たされて居るのである、己れの如く四邊の人を愛すると云ふ場合に當つて、前の詰らない己れを持つて居る人であるならば、自分は飮みたい、喰べたい、或は賞められたいと云ふやうなことより思はないからして、人を愛すると云ふときには飮料、食物、或は無暗にお追從なぞを云つて、それで

愛したかの如くに思ふであらう、後の上品なる己れを持てる者は自分が人から何を貰ふよりも、或は一の注意を受けたことを悦び、好い演說を聽いたことを悦び、趣味ある音樂を耳にしたことを悦ぶと云ふやうな譯で萬事上品であるからして、人を愛する己れの如くせよと云ふときには、アヽ彼のお方を敎會に連れて行つて好い說敎をお聽かせ申したい、彼のお方に好い音樂をお聽かせ申したい、彼のお方に此書物をお讀ませ申したならば嘸かし心が磨けるであらうと云ふやうなことを考へて、總て上品なる愛を及ぼすことが出來る、己れの如くと云ふだけでは甚だどうも不充分である、己れを標準として四邊の人を愛すると云ふことであれば不充分である、下品なる己れであれば、其及ぼす所の愛が頗る下品で困るのである、それで主イエスは約翰傳第十五章十二節に『我なんぢらを愛する如く爾曹も亦たがひに愛すべし是わが誡な

り』とお敎へになつたのである、イエスが私共をお愛しなされるやうに四邊の人を愛すると云ふことであつたならば、是れ即ちイエスの御慈愛を行ふものである、イエスの御慈愛は實に上品なものであつたらうと思ふ、イエスの御慈愛の中には飮みたい、喰べたい、賞められたいと云ふやうな賤しい分子は一も含んで居らなかつたであらう、主イエスは眞に我儕人間を愛し、眞に私共の進歩發達を冀ひ、遂に己れをもお捐てになつた譯であるから、主イエスが私共をお愛しなされる如くに我四邊の人を愛することゝなれば、これがもう一番に尊い標準であらうと思ふ。

次の問題は愛とは何ぞやと云ふことである、愛すべきは四邊の人である、如何に愛すべきかと云へば己れの如くと云ふ、更にキリストは其己れを高めて、我なんぢらを愛する如くと仰しやつた、使徒行傳第二十章

の末尾に使徒パウロがキリストの聖語として『受るよりも與ふるは幸福なり』と申して居るが、愛とは與ふることなりと解釋したならば間違ひはなからうと思ふ、それならば何を與ふるか、箴言第二十三章廿六節に『わが子よ我に汝の心をあたへよ』とあるが此心を與へると云ふことは私は愛の第一であらうと思ふ、父が子を愛すると云ふときには心を子に與へる、子が父母を愛すると云ふときには心を親に與ふると云ふことにならねばならぬ、私共が四邊の人々を愛すると云ふときにも我心を四邊の人に與へねばならぬ、孤兒院の院長が己が手に托されたる總ての孤兒を懷ふと云ふ心になつて居らねばならぬ、何程美味い物を喰べさせても、何程欲しがる衣服を與へても、院長其人の心を孤兒に與へなかつたならば孤兒は成長發達をしない、けれども孤兒院の子供等が院長をお父さん〳〵と云つて、院長が院内を歩くときに小さなる子

供が右から左から來て院長の袖に縋り、羽織の裾を捉へて、さうして甘へるが如き有様を見るときには、院長其人は確かに孤兒に己が心を與へて居ることが分る、夫が妻を愛すると云ふときには何よりも己が心を其妻に與へなくてはならぬ、妻が夫を愛すると云ふときも亦同様の次第である、心を與へると云ふ意味は夫の思の中に妻の知らない思がない、夫の行狀の中に妻の知らない行狀がない、夫の持物の中に妻の知らない持物がないと云ふ所にあらうと思ふ、又妻が夫を愛し夫に心を與ふると云ふ塲合には、夫の知らない思は妻これを思はず、夫の知らない行狀は妻これをなさず、夫の知らない持物は妻これを持たないと云ふのであつて、悅ばしいときも悲しいときも夫婦肝膽相照し偕に悲しみ、偕に悅ぶと云ふことになつたときには確かに夫は妻に心を與へ、妻は夫に心を與ふると云ふ眞實の愛が其間に成立つて居ると申しても

宜からうと思ふ、で私共が四邊の人々を愛するときには其點まで達しなくつても、矢張り四邊の人々のことを眞に思ひ、さうして自分の心の中に在るところは包み隱すことなく其人々に打明けて、我妻なり子なりに對する如き思を以て、四邊の人々に對すると云ふ所になつて來れば、確かに私共は四邊の人々に己が心を與へたと云ふことが出來る、中村敬宇先生の田舍牧師の歌の飜譯に、其牧師が道路を歩くときには、村の童共が來たつて背後から衣服の裾を引く、何の爲に左樣な惡戲をするかと云へば牧師が後振返りて其子供等の顏を見て莞爾と笑ふ、其牧師が背後を振返つて莞爾と笑ふ其笑顏を見たい爲に、斯く子供等が跟いて來て衣服の裾を引くのである、此牧師は確かに村の老人より子供に至る迄に己が心を與へて居る人と云はなくてはならない、己が心を與へたから子供等が來て惡戲をする迄になつて居るの

である。

第二には骨折を與へなければならぬ、孔子のお弟子の誰であつたか、人の爲に謀つて忠ならざるかと云つた、彼の忠と云ふ意味は全身全力を盡して居るや否やを考へるのであらうと思ふ、又聖書の中に示された信の字は矢張り全力を盡すと云ふ意味である、嗚呼善且つ忠なる僕と云ふ彼の忠の字は其眞正の意味は信である、即ち人を愛すると云ふときには骨折を與へる、病人を介抱すると云ふときに、其介抱の任務に當つた所の者は全力を盡して骨折を病人に捧げねばならぬ、親が子を育つると云ふときには其子の爲に骨折を與へる、孤兒院の院長が多くの子供を寄せ集め、澤山の雇人を置き、其雇人の手を通して孤兒を育つると云ふことであつたら確かに失敗であるけれども院長が心を與ふると共に骨折を與へ、弱い子供であるならば抱いても寐る、若し其不潔い

身體を洗はねばならぬ場合には院長自身が手を下して洗ふと云ふやうな譯で骨折を與へるならば、確かに其愛は徹底するであらう、如何に愛の心を有つて居ても骨折を與へることがなかつたならば、其愛は決して徹底するものではない、病人を見舞に行つて、撫で摩りをしても厭はない、不潔な物をも洗ふと云ふまでに骨折を與へたならば、確かに其病人に滿足を與へることが出來るであらうと思ふ、嘗てお談し申したゴルドン將軍が千軍萬馬の間に立つて戰ふときには天晴の大將であつた、けれども彼が病人の寐所の側に行つて『君は滋養物を喰ひましたか』『イヤ未だ滋養物は喰べませぬ、喰べられませぬ』『それならば君は彼の葡萄の熟したのを喰べることが出來るか』『それは喰べられます』と云ふ問答の末將軍自身が葡萄の熟したものと牛肉とを購つて來て、此牛肉を以てはビーフチーをお調理へなされと病人の妻に吩附け、自

身は葡萄の熟したのを持つて病人の側に行き、さうしてその枕頭に座り、其葡萄の房を捥切り、一ツづゝ病人の口に入れて遣つたと云ふことであるが、これは實に善い心懸である、實にゴルドン將軍の骨折を與へて居る所が現はれて居る、口先で何程愛すると云つても骨折を與へなかつたならば愛の實が現はれない、約翰第一書三章十八節に「小子よ我儕愛するに言と舌とを以て相愛する事なく行と實とを以てすべし」とあるが、深く味ふべきである。

第三には物品金錢を與ふることである、ナーニ金を與へる、金さへ與へたら宜いと云ふ人もあらうが、成程金を與へたならば益もあるけれども亦害を起すこともある、ナニ品物さへ與へたらばと云ふが、此物品を與へるのは與へざるには優つて居る、けれども其物品を與へると云ふのにも、其奥に心を與へる、骨折を與へる、而して物品とか金錢とか云ふ

ここになつて參らねばならぬ、たゞ金錢を與へても、骨折を與へても、其心を與へないと云ふ愛であつたならば、其愛は死んだ愛である、金錢や物品は與へられなくつても、心を與へ、骨折を與へると云ふことであつたならば、確かに活きた愛が其處に現はれて居るのである、主イエスは心を與へ給ふた、啻に心を與へ給ふたばかりではない、骨折を與へ給ふた、其キリストの骨折はゲツセマネの園に於ては血潮の如き汗となり、十字架上に於ては人生あつて以來の最も悲慘なる苦痛となつたのである、主イエスほどに人を愛した方はないのである、イエスは我なんぢらを愛する如く爾曹互ひに相愛すべしと云ふ其敎訓を自ら實行して相愛せよと云ふ命令をお下しなされることが出來たのであらうと思ふ。

更に進んで腓立比書第一章の九節を披いて見て、二千年の昔に於て使

徒パウロの心の中には愛に就いて斯くまで進歩した考を持つて居られたかと思ふときには實に驚かざるを得ない、其聖語は『また爾曹の愛智識と諸の智慧の中に益大に爲て最も勝たる所を辨へ知り』とあるが、相愛と云ふことを如何に說いても、其愛が智識と智慧の中に益大きくなると云ふことでなかつたならば、寧ろ世に害を與ふることゝあつても益を與ふることは少ない、十九世紀の半頃からして慈善博愛が非常に發達いたし、二十世紀の曙に於てはいよ〳〵汎く行はるゝやうになつて來たのである、けれども其慈善博愛と云ふことは智識の中に大きくならねばならぬと云ふことであつて、漫りに物品を與ふる是れ害なり、漫りに金錢を與ふる是れ害なりと云ふことで、今日は孤兒院、救貧院、救老院、慈善病院、曰く何、曰く何と、實に樣々の事業が行はるゝやうになつて來たのである、これは專門家が各々科學的に慈善を施さなければな

らないと云ふことになつて來た、例へば獨逸のライプチヒに於ては市の管轄の下に孤兒を救ふ途がある、孤兒が居つたならば之を良家に托して、其處で育てゝ貰ふ、一日に牛乳何合と定めて飲ませて貰ふのである、そうして市から命ぜられたる看護婦は一週間に二回くらゐ衡器を持つて家々を廻り、其孤兒の躰格を調査し、若し規則通りに身躰が大きくなつて居なかつたならば、其處の主婦を呼び出して規定通りに滋養物を與へて居るや否やを糺すことゝなつて居る、凡そ子供の身躰は一週間に何程成長して殖えると云ふことが定まつて居る、さう云ふやうに科學的に愛を施すと云ふまでに進んで居る。

私共が夫等のことから考へて見ると、日本の母親が子供を愛する愛情に於ては變りはないが、其愛が果して智識の中に大きくなつて居るや否や疑はしい、御覽なさい、此春の好き日に母親が子供を連れて花見に

出掛ける体を、裾に綿の多く這入つた衣服を子供に着せて、三寸くらゐもある高さの駒下駄を穿かせ、さうして其子供を塵埃の中を引張つて行くのである、花を見るのは實に宜いことである、又子供に花を見せて天眞美の敎育をするのは亦宜いことである、けれども彼の裾綿の這入つた衣服を二枚も着せられて三寸もあるやうな駒下駄を穿かされ、さうして母親の手に連れられて行く子供は屠所に牽かるゝ小羊の如く實に憐れなものである、眞正に子供を愛すると云ふことであるならば、何故に斯くの如き馬鹿げた衣服を着せるであらうか、何故に斯くの如き馬鹿げた下駄を穿かせるであらうか、實に衛生法に適はない、眞の愛に適はない、遣口をして居るのである、或は夜更しをするまでに音樂會だの芝居だのと云ふやうの所へ子供を引張つて行くやうな人もある、故に親たるものは敎育法を深く研究し、智識を以て子供を愛さなくてはなら

ぬ、尙は智慧の中に益大きくなりてとある、學校あたりでお學びなされる姉妹方は育兒法を研究して居らつしやる、けれども智慧と云ふ應用の二字が付いて居らないから、學校で學んだことはもう夫れ切りだ、家に歸つて子供を育つるときに應用しない、或は衞生のことも學んであるけれども其人が家を齊へて居る所を見ると少しも家庭の食物の中に科學が應用されて居らぬと云ふやうな譯である、それは驚くべきものである、私共男子でも決して女子を笑ふことは出來ない、男子が妻を愛すると云ふ上に於ても、子を愛すると云ふ上に於ても、四邊の人々を愛すると云ふ上に於ても、果して我々の愛が智識と智慧の中に大きくなりつゝあるかを尋ねて見ると、多少の進歩はあるかなれども、何うも、充分に發達して居るとは申すことか出來ないのである。

そこで今日の世の中に於て眞正の愛の應用をしたいと云ふ考である

ならば、私共は何うしたら宜からうか、第一に人を愛すると云ふことであるが、其人が如何様に成る爲に愛したら宜いかと云ふことを考へなければならぬ、其人の進歩發達の爲に益を圖ると云ふことが是れ私共の愛である、子供を愛すると云ふときには實に能く愛するけれども、子供の進歩發達を意味しない愛は子供の爲には害であるかも知れない、私共がどうか子供を愛し、天晴世の中に出でゝ、世の爲め、人の爲に力を盡すやうな人物にしたいと思つて愛するならば、時には子供を叱らねばならぬこともある、時には子供を鞭打たねばならぬやうなことも出來るが、叱つても鞭打つてもそれが子供の進歩發達の爲になるならば敢てしなければならないと思ふのである、四邊の人を愛すると云ふときに、若し青年諸君が少しく怠つて居ると云ふやうな場合には、君は實に怪しからぬ男である、青年の間に怠つて何うなるかと青筋を立て

て青年を叱責、充分に誡しめなくてはならない、其叱ると云ふことが進步發達の爲になるならば敢て叱らねばならない、敢て諫めねばならない、啻に叱り、啻に諫むるばかりではない積極的に申すならば蔭になり日向になりして、我四邊の人々が進步發達するやう、或は聖書の講義をも聽かせ、或は其人の爲に祈禱もし、或は其人を連れて遊びにも出掛けるやうにしなければならぬ、若し諸君が諸君の朋友を眞に愛すると云ふことであつたならば、其人の心靈が救はるゝやうに、其人の智識が進むやうに、其人の身躰が健全になるやうに、其人が獨立ちで世の中を渡ることの出來るやうに盡さねばならない、是れが眞實の愛である。

次に我四邊の人々の幸福の爲に盡さぬければならない、幸福の爲にと云ふときには其人の改善の爲にと云ふことも籠つて居る、其愛は實に

尊いものであるけれども、玆に一ッ注意しなければならぬことがある、私共が常に人を愛せんとするときに當つて、顏は垢の附いたまゝ、衣服は臭氣のするやうなものを着て、さうして人々の間に立ち、私は貴方を愛すると云つたならば、先方の人は何と思ふであらうか、もうあの人の不潔い狀を見るのは嫌だ、見る目が辛いと云つて非常に不快な感覺を起すであらう、これは愛の道に叶はない、故に人を愛せんとするときには我四邊の人々に快感を與へなくてはならぬ、彼の人の爽々した風姿を見るだけでも我輩は實に愉快に堪へないと人々が思ふやうに、何うも彼の人の麗はしい風采を見るだけでも我輩は樂しいと云ふやうに、身の裝飾を愼んで行かなければならぬ、それから私共の四邊に來た人があつて、誰も其人に向つて物を云ふ者がないならば、自分が一番先に其人の側に行つて物を云ふやうにする、又同じ滊車に乗り合したと云

ふときに、其所に座る所がなくして困つて居る人があるならば、自分の坐席の半を讓り、サア此所へ來て腰を懸けなさいと云つて其人に快感を與へなければならぬ、或は病人に對しては、假令其病人の健康の爲に盡すことが出來ないでも、自分が其病人の側に座つて居る間でも其人を幸福に感せしめやうと思ひ、種々樣々の談を聽かせ、其人が笑壺に這入るのを見て、アヽ實に今日は善い事をした、暫くでも彼の病人を慰むることが出來たと自ら悅を得るものである、人を慰むることが出來たならば自身も亦慰むることが出來る譯になるのであるから、矢張り病人に對しても快感を與へなければならぬ、何うも日本人は我四邊の人人に對して快感を與へることは是れ即ち愛であることを知らないと見えて、人が其所に困つて居やうが、立場を失ふて居やうが平氣なもので、たゞ自分だけを樂しましめて居るのであるがそれは實に間違ひで

ある、先づ我四邊の人々を悦ばせ、さうして自分も亦樂しむと云ふ所に眞の妙味があらうと思ふ、どうか我日本を愛人本義の國と致したいものなれば諸君の御盡力を仰ぐ。

第十二章　聖潔なる生涯

汝イスラエルの子孫の全會衆に告てこれに言へ汝等宜く聖あるべし其は我ヱホバ汝らの神聖あればなり（利未記第十九章二節）

聖潔なる生涯と云ふは完き生涯と云ふ意味である、健康なる人は物質的に完全なる人なり、其如く聖なる人は心靈的に完全なる人なりと申した人がある、聖き生涯に入ることは口で云ふは最と易いことであるかなれども、嚴肅に眞面目に聖き生涯に這入りたしとの理想を起して之に對する己が狀態を考へ來るときには、何人も其及ばざる頗る遠き

ことを見出すであらう、何となれば我心霊の一部分が潔めらるゝと云ふのであれば較易いけれども、心の全部が潔らるゝのは極めて困難である、一部分だけが潔まつても完いと云ふことは出來ない、譬へばキリストに從ひたい、神に從ひたいと思ふ其意志がいよ〳〵潔らかに立つたときは、其意志だけが潔まつたのであるけれども、衷には穢い情が燃ゑて其潔らかなる意志を不潔にしやうとする、又幸に情感が潔くなつて穢い念などが起らないやうになつたとしても、我衷に在る思念が穢くあつて、我自らを顧みて斯くまで我は穢い思念に滿つるものであるかと歎息をしなければならないやうなことが多いのである、潔い生涯と云へば意志も潔く、情感も潔く、又思念も潔くあつて心霊其者が透明つた水晶のやうにならねばならないのであるから難かしい、尚其心霊が神に結んで神の思、神の情、又神のやうな品格が其所に發生て來なけ

ればならない譯であるから、實にむづかしいのである、ホッチントンと云ふ監督が『聖潔とは人間修養の冠である、蓋し人の心靈を捕へて智惠、能力、善良の據つて來る源に近接せしむるからである』と申して居る、聖潔は人間修養の冠と云ふ意味は晨に夕に聖潔い生涯に入りたいと思つて勉め勵んで幾十年を經た後に初めて其目的を達することである、舊約聖書を見ると只今朗讀いたした『汝等宜く聖あるべし其は我ヱホバ汝らの神聖あればなり』と云ふのが、此全書を通しての精神であつて、猶太人は此精神に依つて養はれたものである、紀元前猶太國に輩出た預言者の一派は、其心事の聖潔點に於いては遙に羅馬、希臘邊の偉人に優つて居つたと云ふのは確に深い根帶があつたので決して偶然ではない、而してその猶太人は如何にして潔められたかと云ふことに就いては二ッの方面がある、一ッは形の上から潔めやうとした、即ち社祚を

着れば人の精神がシッカリする如く、彼等は神の聖前に禮拜を捧ぐるときは勿論家庭内日々の生活に於ては潔らかなる民として立つべきことを教へられたものであつた、例之ば利未記をお讀みになれば、潔めごとに就いては數多の律法が錄してある、其中には死體の汚穢より潔められると云ふことがあつた、其次第は家族の内なり親戚の内なりに死人があつたとき、凡て之に近接したものは潔めの禮を受なければ神の聖前に出ることを許さなかつた、又食物の汚穢と云ふことがあつた、凡て角の生えて蹄の割れた獸物は潔い、又鱗のある魚は潔い、其他は悉く汚れて居るからして、猶太人は汚れたる食物を喰べるならば確かに汚れると云ふ、又昆蟲の汚穢と云ふこともあつた、利未記十一章二十九節には「鼬鼠、鼫鼠、大蜥蜴、蛤蚧、龍子、鼹鼠、蚯蚓の類は汚れたるなり」と錄してある、此蟲に觸れる者は悉く汚れると教へたものである、其佗癩病患

者は勿論身體に腫物が出て膿が流れるならばこれも汚れたものである、産をした婦人も産の汚穢を受けて居る、總て形の上から其汚穢を去つて潔められなければならぬことを敎へた、尙殿でも會堂でも人の家でも多くの水瓶を置いて清い水を滿たし、各自の身體を潔める用に供したと云ふ、尤も斯くの如き形式上の潔めは幼稚なる人民には幾らか効力がある、併しこれだけであるならば、衞生上には確に有効であらうが其心靈上に及ぼす點は甚だ薄弱である、ソコデ其不足を補はん爲に精神的方面があつて、これが舊約の精華であらうと思ふ、これが猶太國民の眞髓であらうと思ふ、希臘、羅馬にも優つて居る點は此所である、其精神的方面と云ふのは御承知の如く、猶太國には歷代他に比類なき所の人物を出した、其人物は舊約書には預言者として現はされてある。現に以賽亞書の六章に預言者イザヤが神の殿に登つたときに、其殿の

中には神の榮光が充滿て居つた、この御威光に接した彼は「嗚呼禍ひなるかな我ほろびなん我はけがれたる脣の民のなかにすみて穢たるくちびるの者なるにわが眼ばんぐんのヱホバにまします王を見まつればなり」と申した、潔い尊い神の聖前に出で丶、その聖なる神を拜したイザヤは、脣の汚れたる民の中に住んで、我は脣の汚れたるものであるから、もう滅びてしまふより他はない、其所に穴があるならば其中に這入つて死んでしまひたいと云ふやうに感じた、如何にも深く自己の汚れを感じた、而して神の力により全く潔られたりとの感想が彼れの胸間に滿ちて來たときには、主よ我を遣はし給へ、神よ我を遣はし給へと云ふ、勇しい元氣が勃興したのである、ホゼアでもアモスでもハバコクでも、總ての預言者は口を開いて、王侯貴人の汚れたる有様を責め、尚人民が不潔なる生涯を送つて居るときには、實に兩刄の如き鋭い神の聖語

を以て、其人々に斬り込むことが出來たと云ふのは、何所に其原因があるかと尋ねて見たならば、先づ第一に神の聖前に出でゝ己が心を檢べ其衷に潔いものが滿ちて居ることを自覺したときに、初めて上は王侯貴人に向ひ、下は同胞兄弟に向つて、聖なれ〳〵と云つて、旺盛なる勸告をなすことが出來たのであらう。

孔夫子が『内に顧みて直からば千萬人と雖も我行かん』と申されたのは、己が本心に責めらるゝ所がなかつたならば、千萬人が止めても抵抗しても行くぞと云ふ、元氣が出るとの意である、けれども猶太の預言者は本心ではない、聖なる神の聖前に己が潔めらるると云ふ自覺を有つたときには、億萬人と雖も我行かんと云ふ、非常なる元氣を出すことが出來たのである、是れが猶太教の力あり且つ卓越した所以である、又新約聖書の舊約聖書と異なる所は、神は燒盡す火なりと教へることの代

りに、天に在す我儕の父よと教へ、神は不義なる者を悉く罰し給ふと云ふ、嚴格なる語の代りに、天の父は善き者の上にも惡き者の上にも、正しき者の上にも正からざる者の上にも同じく日を照し同じく雨を降らし給ふと教へてある。

尤も新約にも潔い生涯に就いては、愛を説くことに比べて少しも劣らない注意を以て能く教へてある、愛の人と名づけられたるヨハネは、第一書の三章三節に『凡そ神に由る此の望を懷く者は其潔きが如く自己を潔す』と教へ、舊約の方であるならば、シナイ山に雷が鳴轟いて、其殷々と響く雷鳴の中から、神が我は燒盡す火なり、爾曹汚より離れずば悉く滅ぼさるゝぞとて大喝せらるべき所なれ共、ヨハネは綠なす山間から潺潺と流れ來る清水の畔に立つて、此水晶の如く透明つた清き水を指ざし實に綺麗ではないか、天の父は此清水の如く潔く在すが故に、爾曹も

亦この通りに潔くなれよと、愛を含んで而かも嚴格に潔くなれと勸めた所に、非常なる力が存して居る、またペテロは彼得前書一章の十五節と十六節に『爾曹を召給ふ聖者に效て凡の行を潔くすべし、そは錄して我潔ければ爾曹も潔くすべしと有ばなり』と敎へた、我潔ければ爾曹も潔くすべしと云ふは舊約の語である、けれども其舊約に優る所は、爾曹を召給ふ潔きものに倣ひ、即ち主イエスの潔き人格、翠綠將さに滴らんとするが如き仁愛に依つて召されたる吾人は主イエスを模範として總ての行狀を潔くせよと諭した點である、實に何とも云へない深い妙味が存して居る、又パウロは哥林多後書第七章の一節に『然ば愛する者よ我儕この約束を得たれば肉と靈の凡の汚を去て自己を潔くし神を畏れて聖潔ことを成就すべし』と敎えて居る、肉と靈の凡の汚を去つて自己を潔くし、神を畏れつゝ其聖潔ことを成就せよ、聖ことは一朝一夕に

出來るものではない、十日や廿日で出來るものでない、苦心慘憺修養に修養を加へて以て之を成就せねばならないと云ふので、これはバウロ流の筆法を以て潔くなれと敎へたものと思はれる。

終りに主イエスキリストは約翰傳十七章の最後の祈禱のとき『爾の眞理をもて彼等を潔め給へ爾の言は眞理なり』と叫び、門弟子が一齊に潔い生涯に這入ることの爲めに神の聖語を以て彼等を潔め給へとお祈りになつた、其の以前に彼の十三章に於いて、自から手桶に水を汲んで弟子方の足を洗ひ『汝等もし之れを知りてかく行はゞ福なり』と申されたのは、總ての汚から潔めらるゝやうに模範を以て門弟子に敎訓を垂れ給ふたのである、舊約の潔き生涯に入れと云ふ敎は、恰も鞭を擧げて、總ての汚より離れて潔き生涯に這入れよと叱責する如きものなれ共、新約のそれは慈母が赤子を敎へ諭すが如き滿溢れたる愛を以て、愛の

手を伸ばして汚に陷らうとする者の手を曳いて、どうぞ神に倣ひキリストに倣つて此の聖き生涯に這入つて呉れろと勸める如きものである。

いかにすれば潔い生涯に這入ることが出來るであらうか深く考へて見たいものである、希臘に於て倫理道徳が熾んに發達いたしたが、其中には實に味ふべきことがあつて、斯る敎訓も含んで居る『常に子たることを覺えよ、子たるの道は凡て己が持てる者は皆父の持物なりと思へ、萬事に於いて彼れの命に服從し、何人に對しても父を辱むることなく、又彼れを害するが如き言行を謹み全力を竭して彼れを助くる是なり』と子たる者の道を敎へた、次に『兄弟たることを覺えよ、萬事に於いて讓ると云ふ一事を忘るる勿れ、常に兄弟の諫を容れ、彼れを賞揚し、又彼れと競ふことなく、又如何なる利益でも己が力の能ふ限りは讓るべし、兄

が弟に對して友愛の情は斯くあれ』と教へた、次に『市會議員ならば議員たることを覺えよ、若年ならば若年、老年ならば老年、父となれば父たることを覺えよ、左れば毎も其塲合に處すべき道を見出すことを得べし』と教へた、即希臘の倫理と云ふのは、現今私が主張いたすが如く、總て自然に歸へれ、父は父、子は子、兄は兄、弟は弟と云ふことを覺えて、父は父らしく、子は子らしく、兄は兄らしく、弟は弟らしく、議員は議員らしく、年寄は年寄らしく、若い者は若い者らしくあれと云ふ所まで發達をいたしたのである。

ところがこれでは潔き生涯に這入れない、眞に潔き生涯には這入れない、第一世紀の後半に世に出でたエピクチートスと云ふ哲學者は「道德と云ふものは神に始まつて神に終る、我々は神の苗裔であることを覺えなくてはならない、常に目的とする所は神は忠實に在ますから、我も忠

實でなくてはならない、神は慈悲深く在すから、我も慈悲深くなければならない、總てのことに於いて神を標準にして進まなければならない』と教へた。此エピクテートスは一番潔い人格と成つたのである、又我日本に於いても倫理道德が非常に發達したが、殊に德川三百年の間に於いて笑つて死に就くと云ふ所まで忠義が發達した、去りながら此三百年の間に林の如く輩出でたる道德家の中に於いて、富士の山は誰であるかと尋ねて見たならば、私は物部徂徠とは申さない、又山崎闇齋だとも申さない、眞に聖い生涯に這入ることを味ふたのは中江藤樹即ち近江聖人であると思ふ、彼が他の儒者學者に優つたのは其心の衷に神を認め毎朝起きて清水で顏を洗つた後、一室の中に正しく坐して天を拜した一事である、然るに猶太國に於いては先きに申した如く、キリストより千年も前に『爾曹聖くあるべし。そは我エホバ爾曹の神は聖くあれ

ば也』と、聖なる神を基礎として聖潔を學べと敎へた、キリストの使徒方も聖なる神を基礎として、潔くあれと敎へたのであるが、キリストは口頭で神が聖に在しますから聖に在れと敎へ給ふたばかりでなくして、『我は途なり眞理なり命なり』と云つて、聖なる生涯を描き出して我が如くなれと敎へたまふた、實に透明つたる石清泉の流に人を導いて此水の如く潔かになれとて愛あり、情ある所の主イエスが愛の聖手を延ばして、サア爾曹も我懷中に抱いて遣るから、そんな汚れた狀態では不可ない、我に習うて潔くなれと云つて、溫き敎訓を垂れたまふたので其感化と云ふものは非常なものであつた、それで使徒方も主イエスに習つて潔くならねばならぬと云ふことを非常に深く心の中に味ひ來つたものであらう、私共が疇昔の儒者學者などゝは異つて、此尊い聖なる神を日々に拜し、此奧床しい主イエスを日々に味ふて居るからには潔

い生涯に入り意志も潔く、情感も潔く、思念も亦潔くあるのみならず、我衷には實に潔き命が滿ち溢れて居ると云ふ潔いものにならなければなるまいかと思ふ。

諸君は世界の大勢を御存知であらうと思ふ、十九世紀の後半に於いては神は愛なり、即ち天の父を味はなければならないと云ふことが教へらるゝ樣になつて、二十世紀の今日になつては益々其方面が主張さるゝ樣になつて來た、たゞ茲に注意せねばならぬことは、父母が不斷深き愛を以て兒輩を撫で育てゝ行くと、其兒輩は愛に感じて自ら潔め自ら高めて行けば宜いが實際はそうはゆかず、人間の弊として常に撫られて居ると、何時しか不潔な生涯に陷るやうなことがある、それで父母は實に溢るゝばかりの愛を以て兒輩に向ふと共に、彼等が其前に出たならば自ら頭が低り自ら禮儀を慎まなければならないやうな威嚴がありた

い者である、然なければ家庭は潔まらない、其嚴然としたものがない家庭であるならば親子朋友のやうな親しい點はあるかなれども、其嬰兒は實に父母の潔きに打たれて、自ら潔き生涯に入らうと云ふやうなものを見出すことは出來ない、吾人は神なりキリストなり啻に愛の深き御方で在します點ばかりでなく、其聖なる點を思ひ晨に夕に自分の意志は何所まで潔まつたか、情感は如何、又思念は如何と、我心を吟味せねばならぬ、かくするならば先きに申した如く、自分の心があくまで汚れてあることを發見し、終には使徒パウロと共に『嗚呼我禍なるかなと』叫び、イザヤと共に『我は唇の汚れたる民のなかに住みて、汚れたる唇の者』と叫ばなければならぬやうになるであらう、又穢い所を心から嫌ふやふになつたならば、ソコデ初めて神の聖前に潔い生涯に這入りたいとの念が切實となり來るであらう、若し基督信徒と名の附く者の中に於

いて、ナーニ是れくらゐのことはあつても構はないと云ふやうな調子で、實に罪の憎むべき事、言換れば罪を犯すことのいかにも淺猿しい次第であり、一ッの噓言を吐くのも眞に汚れたることで、我々聖なる信者としては爲すべきことでないと云ふことを心から悟つて虚言を嫌ふやうになつたときには、それだけ其人は神の聖前に聖なる方へ進んだのである、又色情の如きものが我心に生じ來つたときには、實に堪えられない苦痛を以てどうか之れに打勝ちたいと云ふ精神になつて、其情念を眞に厭い棄つるといふ考になつたならば、それだけ神の方へ進んだのである、即ち一面には聖き理想を思ふと共に、他面には此汚れを去るといふことを努めるのである、それで罪を憎むと云ふことは一方では罪を排斥り、他方では神の方へ進んで行くと云ふので、初めて私共は潔き生涯に這入り掛る、悔改と云ふのは、此の如き汚れたものを慕うて

居つた我れが此方に脊部を見せて、眞一文字に神に向ひ、聖靈の感化を受くるのである、斯くの如くにして日々勤めて止まずんば、遂に使徒パウロの云ふ如く『肉と靈の凡ての汚を去りて自己を潔くし神を畏れて聖潔ことを成就すべし』と云ふ、潔き生涯に這入ることが出來るであらう。

第十三章　感化の源泉

是の如き祭司の長は我儕に當れる者なり彼は聖潔して不善ことなく穢垢なくして罪人に遠かれり且天よりも高し（希伯來書第七章二十六節）

凡そ此の世の中に生とし生ける者は、草~~本~~木、昆蟲、鳥獸に至るまで皆包圍の感化を受くべき力を備へて居る、殊に其の風土氣候に感化を受くる

ものである、淸人の言に江南の橘を江北に移せば柚となると云ふことがある、東山の草木を又西山に移せば又西山の風に變り、西山の草木を東山に移せば東山の風に變ると京都の植木屋が申して居る、進化論者は之れを名附けて包圍の感化と云ふ、此の如き感化を受くる力は草木よりも鳥獸の方が强く、鳥獸よりも人間の方が强い、人間の中でも神經の鈍い者よりも神經の鋭き者の方が强いやうである。

嚮昔から水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友に由るとか、或は朱に交はれば赤くなるとか云ふ諺もあつて、是れは其邊の意味を敎へたものであらう、己れ一身のことを考へて見ても、矢張り種々な感化を受けて居る、例之ば我が生れた故鄕に突兀として雲際に聳えて居る高き山があれば其山の感化を受け、又廣漠たる平原があれば其野の感化を受けて居る、海岸に住る者は海の感化を受け、又河の邊に居る者は河の感化を

受くると云ふやうな譯で、如何しても人間は感化を受けずしては居られない、我を膝の上に抱いて育てゝ呉れた父母、殊に乳房を含まして呉れた母親の感化は著しく其の子供の上に及んで居る、又我を薫陶へて呉れた先生、我に親しく接して呉れた朋友の感化などは殊更に多いやうに思はれる、世の中には餘りに感化を受過ぎて、自家の本領を失つて、詰らないものになつた人もあるが、是れは寧ろ悲しむべき現象である、感化を受けても自家の本領を失はないやうに注意をしなければならぬ。

感化に有意の感化と無意の感化の區別がある、世の親達や先生方が斯う云ふ感化を子供や弟子に與へて遣らうとか、或は先輩が後輩に對して感化を及ぼさうとか云ふやうなことを思ふのは、皆有意の感化である、又若い輩が酒を飲んでは不可ぬからして、自分達も若い輩の前

では酒を飲まないやうにしやうとか、或は政府に於いては未成年者の煙草を禁じて居るからして、自分達も未成年者の前では煙草を喫はぬやうにして、無理に善き感化を子弟に及ぼさうと云ふやうな考を有つて居る輩もある、是れは別に惡いと云つて攻撃する程の事ではないかも知れぬが、其の感化を及ぼさうと云ふ考の中には極く水臭いものがある、感化を及ぼさうと思つて愼んで居るときには宜しいが、愼まない時、即ち親が窃に酒を飲んで居るとき、其子供が一寸唐紙の隙間から見たり、或は嚴重に煙草を喫うてはならないと敎へた先生が煙草を喫うて居るとき、其弟子が一寸戸の隙間から見たりしたときの其の惡感化は實は甚いものであつて、善き感化を施して遣りたいと思つて努めた親なり先生なりの感化を打消してしまふものである、爾う云うやうな家庭なり學校なりには兎角惡少年が生じて困るのが常である、然るに

無意の感化と云ふのは斯う云ふやうにして感化を及ぼさうとか、如彼云ふやうにして善き龜鑑を現はして遣らうとか云ふやうな水臭い作事は少しも其の間に存して居ないのであつて、只爲すべきを爲し、盡すべきを盡すと云ふ眞に天眞爛熳の狀態であれば、その親が子に對し、先生が弟子に對し、先輩が後輩に對する其の感化は實に麗しい者である、世の牧師とか傳道師とか云ふものが自分は牧師だから斯う云ふ行狀をしなければならぬ、又傳道師だから斯う云ふ事をしなければならぬ、爾うして信者に對して善き龜鑑を顯さうとか、善き感化を及ぼさうとか云ふやうなことであるならば、實に其底を穿つて見ると何だか水臭い詰らない物があつて、決して善感化は及ばないものである、私の友人某が或敎會の牧師をいたして居つたが、その際には奈何にも嚴重な男で、酒屋へ參つてお前は信者に成つたから酒を造る事は廢せとか、陶器

屋へ行つてお前は信者に成つたから酒を盛る器を賣つては不可ぬ、德利だの盃などは皆毀してしまへと云つて忠告をしたくらゐであつたが、一たび牧師を辭めて或地方の學校教員となつたときには、座敷の机の上には三文小說が積んである、臺所へ行つて見ると奥さんの側にも詰らない小說が横はつて居るから、君は斯う云ふ小說を讀むのかと云つて尋ねて見たらば、其人が自分は牧師ではないからと申した、自分は牧師ではないからと云ふ一言は實に私の心の底に其男を輕蔑するの念を生せしめた、夫れならば前に嚴格なる生涯を送つたのは牧師であるからであつたか、今極く緩慢なる生涯を送るのは牧師でないからであるのか、實に酷い男であると思ふたが、遂に其人は悲しむべき墮落に陷つて、私共とは交際も出來ないやうな事になつてしまつた、斯くの如く職務上から人の爲に善き感化を及さなければならぬと云ふ淺薄な

る精神で行つた事は、其の感化が決して正當に及ぶものではない、親たる者、師たる者、又先輩として世の中に立たなければならぬ者は、より深くより清き感化を有つことが極めて大切である。

今日世界の表に於いて善き感化を及ぼしたる人物は、林の如く星の如くに多くあるかなれども、其中に二千歲の今日に至るまでも非常なる感化を及ぼした者はイエス、キリストの外にはあるまいかと思はる、イエス、キリストは現世に御存在なされたときに、其の使徒衆に著しい感化を及ぼされたから、ガリラヤの湖水の漁夫共は僅か三年にして實に彼れが如き清き尊き人物と成る事が出來たのである、爾うしてキリストの敎を奉ずる所の者は、其國を問はず、其の時代を問はず、何れの所に於ても大なる感化を及ぼして居る、流石のナポレヲンも自分の感化は左まで世の人々に及び難いが、キリストの御感化は最う人心の奥底に

刻込まれて、彼の爲には幾千萬の人が命をも棄てやうと云ふ程にお慕ひ申して居ることを見て、實にキリストは人でないと云つて驚歎したと云ふが、是れは左もあるべき事だと思ふ、此のイエス、キリストの御感化と云ふものは何所から發て來たか、キリストにして斯う云ふ樣にして感じさせて遣らうとか、おれは救主だから斯う云ふやうな善き鑑を顯して遣らうと云ふやうな、水臭き意があつたならば、キリストの御感化は決して四邊のお使徒方にも及ぶことは出來なかつたであらう、して見ればキリストの御感化は全く無意の感化であると申さなければならぬ、或は使徒方の足をお洗ひなされたときに『我汝等に例を示せり』と仰せられた事がある、是は親が子に對して自分がお前に斯う云ふ事をして遣るのは、お前に自分の行狀を學ばしむる爲だと云ふやうな意味で、其の使徒方に極く親密に打明けてお話をなされた譯である、即

ちキリストの御精神は斯う云ふ感化を及ぼさうとか、斯う云ふ善き龜鑑を示して置かうとか云ふやうにお考へなされたのではなからうと思ふ、キリストには無論無意識の感化が餘程多うかつたと申さなければならない。

而して其のキリストの御感化は只善き詞をお話しになつたと云ふ所にあらうか、又キリストが善き行狀をなされたと云ふ事にあらうか、其邊を能く考へて見ると成程何うも山の上の說敎の如き、或は路加傳第十五章の放蕩息子の比喩の如き、夫れは實に善い感化を天下後世に及ぼして居ることは明瞭である、西洋の文學上の書物を開いて閱ても、其の他の倫理道德の書物を開いて見ても、キリストの善きお聖語が感化を及ぼして居ることは甚いものである、又キリストが使徒方の足をお洗ひになつたとか「我は人を役ふ爲めではない、人に役はれる爲である

と』云ふやうな行狀は確かに大なる感化を及ぼして居ることは明白である、けれども其の御感化の源、御感化の泉とも云ふべきものは善き言葉や良き行狀と云ふよりも、最う少しく奥深い所にあつたらうかと思はれる、如何であらうか、イエス、キリストが我は途なり、眞理なり、生命なりと使徒方に示すことの代りに、我は眞理を説き、途を行ひ、生命を與へる爲に生命を棄つるのであると、斯う説法をなされたならば果して其の感化は總ての者に及んだか何うだか私は疑はざるを得ない、けれどもキリストは其樣な事は仰せられなかつた「我は途なり、眞理なり、生命なり」と仰せられたのである、聖人賢者も途を説いた、聖人賢者も眞理を語つた、聖人賢者も或意味に於いては犧牲となつて生命を棄てたのである、けれどもイエス、キリストが『我は途なり眞理なり生命なりと』仰せられたのは最う少しく深い意味があつたらうかと思はれる、私が今日

本文に引いた「彼は聖潔して不善ことなく穢垢なくして罪人に遠かれり且天よりも高し』と云ふのは何うであらうか、イエス、キリストは實に聖らかである、言換ゆればイエス、キリストの聖意は清淨無垢であつて、少しも其間に不善がなかつた、尙イエス、キリストの大聖意には少しの垢も附いて居らなかつたのである更に進んで罪人に遠ざかれりと云ふの意味は稅吏や、罪人の中へ足を踏込んで、夫等の人々と共に食事をなし、共に酒宴をなされた事もある、然るにそのイエス、キリストが罪人に遠ざかれりと云ふのは、イエス、キリストの聖意に於いても、其の行狀に於いても、一點の罪、一點の穢もなかつたと云ふ意味であつて、希伯來書の記者は「天よりも高し」と云つた、如何でせうか、世の中の聖人賢者よりも高しと云つたのならば、私共は左程に思はない、諸々の天よりも高いと云つたのはナポレオンの所謂人間以上と云ふ事であつて、總ての

者よりも高き御方だと云ふのである、之れを此頃流行る語で云へばイエス、キリストは高尙高潔なる人格を備へ給ふたる御方と云ふのである斯くの如く高尙高潔なる人格をお備へになつたと云ふ所が見處であらうと思ふ。

諸君私が知れる、某氏は明治五六年の頃から自由民權の說を唱へられた、而して其家は赤貧洗ふが如く食物さへも餘り裕にはなかつたと云ふくらゐであつたが、夫等の事は毫も意に介せず、自由民權の爲に力を盡され、一たびは其主唱する所の主義の爲には生命を賭して盡瘁されたが、其頃私は氏を以て實に高潔なる剛毅なる人物だと思つて居つたから、氏が青年會館へ來て演說をされると云ふときには、其の風采を仰ぎ、其の人物の感化を受けたいと、態々會館へ足を運んで演說を拜聽したこともあつた、然るに星移り物變り今日となつては、氏も割合に立派な

家に住はれるやうになり、割合に裕なる生活を送られるやうになつた、而して今日も尙世の公益の爲に盡しては居らるゝものゝ以前程の感化はない、二十年前にはパトリック、ヘンリーと並び稱すべき程の人物だと思つて居つた、其人が今日では何だか下らないと云ふやうな念を人に與ふるやうになつたのは何であるか、確かに人格の點に於いて變化を來した譯ではあるまいかと思ふ、若し爾うであるならば奈何にも氣の毒だと云はざるを得ない、夫れで世の中に於いて人々に其の感化が及ぶと云ふのは決して口で立派な事を云ふからではない、又時々立派な行狀を人々の前でして見せるからではない、若し左樣なる茶番狂言が善い感化を及ぼすことが出來るならば、團十郎の如きは時に大石良雄となり、時に楠正成となり、時に加藤清正となるのであるからして、其の感化は確かに總ての者に及ばなければならないけれども、彼れは

舞臺に立つたときだけ一時良雄となり、一時正成となり、一時清正となるのであるから、是れが感化は其の家庭の者にすら及ぶことは出來ないのである、イエス、キリストは非常なる感化を當時の人々に及ぼし給ふた而已ならず、二千載の今日尚ほ私共の上にまでも之れを及ぼさると云ふのは何處に在るかと尋ねて見たならば、孔子も釋迦もソクラチスも其他の總ての聖賢も少しも有たなかつた所の天よりも高き人格をお備へになつて居つたと云ふ點に歸着するであらうと思ふ、其の高尙なる神の子と謳はるべき御方が此の世の中へお降りになつたので、其の御方が使徒方の足を洗ふたと云ふところに感化がある、下女下男が主人の足を洗ふことは屢々ある、併しながら少しも感化は及ばない、けれども其の主人公が下女下男の足を洗ふと云ふときには初めて感化が及ぶのである、子が親の足を洗ふと云ふ上よりも親が子の足を洗

ふと云ふときに感化が及ぶのである、イエス、キリストが人の召使であつて使徒方の足をお洗ひになつたと云ふ事であれば何でもない、けれども神の子、救主、聖人の聖人と仰がれ、天よりも高き人格をお備へなされたる御方が、ガリラヤの湖水の邊に漁業をなせる漁夫共の汚穢しき足をお洗ひになつたと云ふので、今日では歐米の帝王達も其のキリストの御龜鑑を思ふときには王冠を脱ぎ、極謙遜つて人々に交はると云ふやうな譯になるであらうと思ふ、斯る尊き御方が人を役ふ爲に世の中へ來たのではない、人に役はれる爲だと云つて、人の爲に勞することを少しもお厭ひなさらなかつたと云ふのだから、其の感化は實に上より下に至るまで、基督敎國に生れた人々の上に及んで居る譯である、此の世の中に於てはなるべく人を使ひたい、なるべく人の頭に立ちたいと云ふのが人情である、然るに、キリストは人を役ふ爲ではない、人に役

はれて謙遜なる生涯をお送りになつた事を思ふときには、私共の高慢なる頭は自から低つて來て、車夫に對しては車夫さんと云つて親しく言葉を掛けるやうになり、乞丐の如き者を見れば、アヽ氣の毒なものである、一言詞を交へて遣らうと思つて、其の乞丐の居る所へ態々談に行く事が出來るやうに感化を及ぼすものである、して見ればイエス、キリストが人に役はれて生涯をお送りになつたと云ふ所が即ち感化の生づる源泉であらうと思ふ。

更に進んで疇昔より今日に至るまで奈何に神學說が變り、奈何に敎會の組織が異つても、イエス、キリストの大なる感化は我々信者の心を摑んで放たない、夫れは何故であるかと云ふと羅馬書第五章に『キリスト定りたる日に及て罪人のために死たまへり、それ義人の爲に死るもの殆ど少なり仁者の爲には死ることを厭ざる者もや有ん、然どキリスト

は我儕のなほ罪人たる時われらの爲に死たまへり神は之によりて其愛を彰し給ふ』錄してある、看られよ、キリストが使徒方の足を洗ひたまふたのでさへも驚くべき事である、キリストが人に役はれて生涯をお送りになつたと云ふのも實に驚くべき事である、然るに其のキリストは我儕が尙罪人たるとき我〳〵の爲に死たまへりと申して、彼の苦しき最期を十字架上でお遂げになつたと云ふのは、正義い我〳〵を救ふと云ふ爲でもなく、高潔なる我〳〵を保護すると云ふ爲でもない、罪と汚の中に陷つて、恰も鳥黐桶の中へ足を突込んだ如くに我〳〵が罪と汚に纏附かれて、何うも斯うも仕方のないやうな境遇に陷つて居る、是れをばイエス、キリストは生命を棄てゝ救て下されると云ふ所に妙味がある、諸君は或は自由派の人々、或は『ユニテリアン』の人々の間には、アヽキリストは聖人である、アヽキリストは賢明なる御方である、キリストのお說

きなされたる山上の說敎は如何にも感ずべきものであると云つて居ることを知らるゝであらう、其人々も感化を受けて居るに相違ない、けれども自分は人知れず斯う云ふ罪を犯して居る、人々は我を立派なる者と思つて居るかも知れないが、自分は神の聖前に於いては斯の如き罪を犯して居つた、此罪に打勝ちたい、此罪を排斥したいと思つても自分の力では何うも斯うも出來ずして、實は此の兩三年否四五年の間と云ふものは、其罪の爲に苦しんで身も瘦る程であつたが、キリストは其罪をば赦して下された、之れを赦さんが爲に生命をお棄なされたと云ふ事を深く感ずるならば、看る〳〵うちに其人の心の中にはキリストを信ずるの念が昂まつて來て、其人の憂の顏色は忽ち變つて平和の顏色となり、今までは己れあることを知つて人あることを知らなかつたと云ふやうな慾の深い男でも、全然己れを忘れて人の爲に盡すと云ふ

やうな實に麗しき意に變つて行くのを見る、斯の如き感化は孔子も釋迦もソクラチスも如何なる聖人もキリストの如くに及ぼすことは出來なかつた、如何なる人物でも眞個にキリストが我の爲に死に給ふたと云ふ事を感じさへすれば、一大感化を受けることゝなるものである。是れが基督教の感化の源泉である、其源なり其泉なるものは何所に在るかと尋ねて見ると、イエス、キリストが天の最と高き位をも棄て難き事とせず、塵の浮世に降り、下僕の形となつて人の足を洗ひ、遂に罪人の爲に十字架上で命をお棄てなされたと云ふ事に歸着するのである。私は今日諸君と共に麵麭を割いて之れを食し、又葡萄酒を注いで之れを飲むときに、其の意味は何所に在るかと尋ねて見たならば、神の子なるイエス、キリスト天よりも最と高き人格を備へ給ふ所のイエス、キリストが塵の浮世に降つて、主人公の如くに現世を過したのではな

い、下僕の如くに現世を過し、爾うして人の足を洗ひ、人に役はれて人の爲に謂ふべからざる困苦を受け、現世をお去りになつたと云ふ事を紀念せんが爲である、若し諸君は此の聖餐の式に列なる場合に於いて少しも斯る尊き意味のある事を考へず、自分は信者だから自分は學校の教師だからと云ふやうな水臭い淺墓なる念を持たずして、此のキリストより流れ出る生命の水を飲み、爾うして最う人が感じやうが感じまいが、人が善き龜鑑として呉れやうが呉れまいが、夫れは自分の知る所ではない、自分はキリストの御龜鑑に倣ふて爲すべきを爲しさへすれば宜い、又盡すべきを盡しさへすれば宜いと云ふ事になり、夫れで天眞爛熳として人々の前に現れるやうになれば感化を及ぼさうと思はなくとも、善き龜鑑を現はさうと思はなくとも、私共より出で來る所の感化は人々の意に感動を與へない事はない、

蓋し今日に至るまで彼のアシヽのセントフランシス、佛蘭西のセントベルナルド、蘇格蘭のヘンリードラモンドなどが、其の偉大なる感化をば當代の人々は勿論死後數十年若くは數百年の後にまで及ぼすのは、其の人物が非常に高尙であつて其の高尙なる人物からして愛の泉が滾々として湧出たからであらうと思ふ。

是を以て私共は只仁愛の行爲をすると云ふのでなく、私共は只口にキリストのやうな言葉を遣ふと云ふのでなく、其の奥底へ這入つてイエス、キリストの如き意を有ち、イエス、キリストの如き人格を備へて、此世の中に立つ事が甚だ大切である、我子を可愛いと思召す所の母親は、今までよりも高尙なる人物となり、今までよりも高潔なる精神を以て其の子供の爲に祈り、其の子供の爲に盡して戴きたい、又我子を可愛いと思召す所の父親は、子供の見て居らない所で酒を飲み、煙草を喫ひ、其他、

子供に見せては害になる所のものをば見ないと思つてするやうな出事があつたならば、天の神は確に其罰をお與へなさる、即ち其の家庭は紊亂し其の子供は救ふべからざる不良の行爲をするやうになる、是れは私共が往々にして目撃する所である、私共は只天眞爛熳なる正義を以て天の神の前に謙遜して祈りつゝ、神よ、どうぞ我上に、我家庭の上に我四邊の人々の上に祝福を與へ給へと云つて、只爲すべきを爲し、盡すべきを盡して行くと云ふ麗しき心を有ちたいものである、どうぞ諸君、今日此の聖餐をお守りなさるに當つて、水臭い心は露程も持つ事なく、若し左樣な心があるならば、直ちに之れを去つてしまひ、感化の源泉なるキリストの人格に重きを置いて、其の高尙なる人格から流れ來る所の愛の水、生命の水を飮んで下さるやうに、即ち感化の潤ふ所に於いて麵包を食し、杯より飮んで貰いたい。

第十四章　死の榮

イエス彼等に答へて曰けるは人の子榮を受べき時いたれり誠に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落て死ずば惟一にて存んもし死ば多の實を結ぶべし、その生命を惜む者は之を喪ひ其の生命を惜ざる者は之を存て永生に至るべし、

（約翰傳第十二章二十三節至二十五節）

今日の題は『死の榮』と云ふのである、疇昔ユダヤの詩人ダビデ謳うて曰く『諸々の天は神の榮光を現はし穹蒼はその手の工を示す』と（詩十九篇一節）又私が散文的の詩人と稱するパウロ謳うて曰く『天に屬ける物の體あり地に屬ける物の體あり天に屬ける物の榮は地に屬ける物の榮

に異り日の榮あり月の榮あり星の榮あり此の星は彼の星と其榮各々異り』と(哥林多前書十五章四十節)、又イエス、キリストは(是れも散文で書いてある)お謳ひなされた曰く『爾曹野の百合花は如何して生長かを思へ勞ず紡がざる也我爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ばざりき』と(馬太傳六章廿八節、廿九節)右の如く天體の巡り行く有樣を見れば、日や月や星は非常なる榮を現はして居るものと謳はなければならぬやうになつて來る、春の彌生の頃に四方の山邊を見渡すときに草木は悉く神の榮を現はして居ると謳はなければならぬやうになつて來る、其の天地が神の榮を現はし、草木が神の榮を現はすと云ふときは、即ち草木自躰が其の榮を現はし、天地自躰が其の榮を現はして居るのである。

或人が高尾山に行き、あの楓葉が如何にも麗はしき裝ひを着け、錦を飾

つて居るのを見て、其の葉に接吻したと云ふことであるが、如何にも接吻したらうと思ふ、白百合花の花や荊棘の花を取つて見れば接吻せざるを得ない、如何にも其所に榮が顯はれて居る、天地萬物が皆夫々の榮を有つて居るならば、其の天地よりも優り萬物よりも優れたる我々人間は神の像であり、神の榮であると示されてあることが眞理とすれば、天地萬物よりも優つて此所に一つの榮を持たなければならない筈である、然るに人間社會を見れば、此の人こそは眞に神の榮なり、眞に神の聖姿なりと見るべき者が甚だ少なくして、見渡す限り鳥獸類にも劣り果てたる醜狀を現して居る、蓋し彼の日や月や星は曾て罪を犯したことはない、草木鳥獸も曾て罪を犯したことはないのである、たゞ萬物の靈長として造られたる人間のみ罪を知つて居る、故に人間のみ其の榮を失ふた、誠に口惜しき嘆かはしい次第である。

斯くの如き体裁であるからして、天の神は日や月や星を見てはほゝ笑み、鳥獸類の野原に踊り舞ふ有樣を見ては善哉と賛し、草木が今を晴と錦を飾つて居る有樣を見ては之を祝し給ふであらう、けれども天の位より此世の人を覽はしたときには『善なる者一人もなし、義しき者は一人もあるなし、皆悉く罪を犯せる者となれり、皆悉く邪曲なる者となれり』と示してある、實に人の有樣を見ては天の神はいたく歎き給ふであらう、是を以て諸君の知らるゝ如く千九百年の疇昔に方つて一人の聖子主イエスを此の世の中に下し給ふた、實に其のイエス君は日や月や星が造られた儘の榮を保つが如く、又草木鳥獸が造られた儘の榮を保つが如く、獨り生れたる儘に神の聖姿をお保ちなされたのである、世に人間多しと雖も生れながら其の神々しい榮をお保ちなされたのはイエス、キリストあるのみと申さなければなるまいと思ふ、私共萬物の靈

長たる人間が保つべき筈の榮はイエス、キリストに依つて顯はれて居る、約翰傳一章の十四節に『それ道肉躰となりて我儕の間に寄れり我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り』とある、卽ち約翰傳の記者が二十一章を通じて力を竭して描いたのはイエス、キリストの榮と云ふことであつた、其の榮は眞理と恩寵にて充てりと斷言して居る、眞理と云ふ方面は人格の榮と申すことであらう。

私が嘗て熊本洋學校に居つたときに、一日長崎の方から英國人で宣敎師のモンドレルと云ふ人が支那の監督であつたボルデン師を伴ふて參つた、其時は丁度敎授の時間であつて、キャプテンゼンス氏は左の方に白髮童顏の監督ボルデン氏を、右の方に英國人の風采を保てるモンドレル氏を立たしめ、自ら正面の講壇の上に立つたときには子供心に

非常に感じたのである、亞米利加の陸軍砲兵大尉のゼンス氏は豫て軍人の教育を受て居る上に、其の志操が非常に高尚であるからして、殊とに立派であつた、私は之れを見て初めて人の榮と云ふことを悟つた、實に立派なるものだと思つたのである、又六年ばかり前に亞米利加の會衆教會の萬國會議に臨み、マサチウセッツ州の知事オルコット氏が講壇に立つて悠然として口を開いて演說をする、其狀を見たときに其の人格風采の眞に榮を帶びて居る有樣に感服いたして、如何にも高尚い知事であると云ふ思念が心に滿ちたのである。

約翰傳を讀んで見ると、ナタナエルが主イエスに初めて顏を合せた時に、其足許に俯伏して『爾は神の子なり爾はイスラエルの王なり』と叫んだと書いてあるが、如何にも主イエスが悠然としてナタナエルにお臨みなされたときに、ナタナエルの心の中から思はず知らず神なり王な

りと云ふ稱讚の聲が出たのであらうと思ふ、確かに其所に主イエスの人格の光明が顯はれたものと見なければならない、尙ほ約翰傳の中に下吏共がイエスを捕縛に來たときに、其のお話をなされる人格の榮に眼が眩み、遂に捕へることが出來ず、上役の許に歸つたときに爾曹は彼れを捕へ來つたかと尋ねられたれば、下吏共は聲を揃へて『未だ斯の人の如く言ひし者なし』と申したのは、キリストの人格の光明が此の下吏共の眼に映じた樣を描いたのである、イスカリオテのユダが最先きに立つて羅馬の兵士共を率ゐ、ゲツセマ子の園に主イエスを捕へに來たときに、イエスが進み出でゝ爾曹は誰を尋ぬるか、汝が尋ぬる所のナザレのイエスは我なりと云はれたときに、皆其の聲を聽いて脊後に仆れたと書いてある、人格の光明が其所に現はれて、遂に兵士共ば其光りに堪えずして脊後に仆れたものであらう、又ピラト

の前に引かれて審判をお受けになるときに、主イエスが我は眞理に就いて證明する者なりと云はれた、其時傲然として高壇の上に立ち構へて居つたピラトは直ちに高い座を下り來つて、イエスの許に至り眞理とは何ぞやと、謙遜なる態度でお尋したことが示してある、如何にも主イエスの人格の光明が其所に現はれたのである、眞理に滿ちたりと云ふのは天の父の聖姿を其儘にお保ちなされたる主イエスに天の父の人格が宿つて、其の人格が太陽が東の天を押破つて顯はれ來るときに光りを放つが如く、其の榮光が現はれたのであるから、何人も主の聖前に出たときに、其人格の榮に服せずしては居られないのである、千八百歳を經て十九世紀の世の中となつても、主イエスの傳記を讀み去り讀み來るときに方つては、佛蘭西のルナンもルーソーとボルテールも亦獨逸のゲーテーも、如何なる人も其のキリストの神々しい人格の榮

を仰いだときには人以上なり、空前絶後の人物なり、天下後世驚くべきことありとせば、イエス、キリストの人格に優る人格の出でないと云ふことだと言つて賞讃して居る、是れ實に神々しい榮がキリストの人格を通して現はれて來た證據である。

恩寵に滿てりと云ふ、此の恩寵と云ふは愛の發現である、人格の發現と云ふときは神々しい姿をお現はしになつた、愛の發現と云ふときは、イエスの唇頭よりは愛の言葉が迸しり、其の手先きには愛の電氣が現はれて人を引くの力を現し、一擧手一投足愛の工であつたことを意味するのである、私の眼に今尚ほ映じて居る所の畫が三つある、一つは幼年の頃、まだ七八つであつたらうと思ふ、田舍の宮の樓門に狩野元信の描いた畫が架つて居る、他の武者畫も私の眼に映じて居るけれども、今尚ほハツキリと私の眼に映つて居るのは、あの常盤が牛若の手を引き、今

若を脊に負ひ、乙若を懷中に抱いて簑笠を被て、雪の降る所を歩いて居る有樣、是れは常盤の鞍馬落ちを書いたものである、或人が其の有樣を謳うて『滿天風雪母子情』とやつた、實に雪の降り頻る中に簑笠を被た常盤が三人の子供を連れて、其の鞍馬を落ちて行く有樣は、母親の愛を畫いたものとして、私の心に映じて居るのである、一つは獨逸のドレスデンの美術館に這入つて、ラファエルが畫いたシスタインマドナを見たときである、實に是れは世に稀なる名畫で、マリアが幼兒のイエスを抱いて立た等身大の肖像畫である、注意すべきは二人の眼である、茲に何とも云へない慈母の愛情が現れて居る、其の抱かれて居る幼兒には天地の中にたゞ獨り、世界萬民を救ふ救世主となるべき面相現れ、母には救世主の母親として身に餘る天の寵愛を受けたと云ふ感謝の念が溢れて居る、實に私は其筆の神々しさに打たれて茫然として其畫に見

惚れて居つたことである。

今一つはテームス河畔の英國國會議事堂に這入つて餘りに立派なる壁畫が多いので、彼方此方見て歩いて居るうちに、一つ我眼を引いたのは、ラッセル公が陰謀の罪を犯したと云ふ訴へで、裁判所の審判を受る所の歴史畫であつた、それはラッセル夫人が良人の後方の机に凭れて、良人の述べる辯護の語を筆記して居る所である、賢明なるラッセル夫人が良人の一大事と云ふ場合に當つて、恰も影の形に添ふ如く裁判所の白洲にまで隨行して、誠を竭す眞情を思ひ、暗涙を禁じ得なかつた、是は妻としての愛情を現したものであらう、以上は東西の名家が畢生の力を盡して愛の發現を描いたもので、いづれも大作である、眞理と恩寵にて充てりと約翰傳の記者が謳うた恩寵は、イエスキリストの愛の發現を書いたものである、母親が子供を連れて來たときに、使徒方は喧ま

しいから彼方に退けよと叫ぶときに當つて、イエスは其の幼兒を抱いて天の祝福をお求めになつた狀を書き、人々は罵り騒ぐときにイエスの御聲は巷に聽えなかつたと云ふ、其の優しいイエス、キリストの愛を書き、ゲッセマネの園に血汐の如き汗を流して祈り給ふときに我身は碎けても總ての人間を救ひたいと云ふ其のイエスの愛を描いたのである、十字架上に鮮血淋漓と流れ出づるときに『彼等は其爲すところを知ず願ば彼等に罪を歸給ふな』とお祈りなされたのは、實にイエス、キリストの愛の迸り出でた所である、それを描いて『恩寵に充り』と錄いたのである、私共の人格が茲に榮を現はし、其人格の中に滿る愛情が人の目狀に現はれ、人の手に現はれ、人の働きに現はれて來るときには其所に人間の榮がある、神の姿にして萬物の靈長たる人間の榮が其所に現はれて居ることを認めなければならない。

併し以上お話する所はみな生きての榮である、更に一歩進めば死しての榮、俗に云ふ死花が咲くと云ふ榮であらうと思ふ、石川五右衛門の如き大賊が油釜の中で煮られるに當り、死花が咲いたであらうか、盜跖が死刑に處せらるゝと云ふときに死花が咲いたであらうか、五右衛門の釜入は實に悲慘なる死である、けれども彼れの全生涯は強盜として送つたものであるから悲慘なる最期を遂げても死花は咲かないのである、人格の榮、愛の榮、卽ち私のなき生涯を送つた所の者が愈々其の犧牲の生涯の終りの冠として犧牲の死を遂ぐることを許されるならば其點に死榮がある、其點に死花が咲くのであらうと思ふ、此度の日露の戰に君と國との爲に生命を捨てた者は澤山に在る、けれども軍神として人に謠はれた所の者は廣瀨中佐と橘中佐のみである、同じ彈丸に中つて君と國との爲に死んだのに何故此廣瀨、橘の二君のみ他の人よりも優

つて謠はるゝかと尋ねて見るならば此二人は生きての榮ある人物であつた、部下を愛し又四邊の人々に對して愛情の濃かなるものがあつて、眞に人の心を捕へる愛の引力を有つて居つた人であらうと思ふ、さうして其二人が悲慘の最期を遂げたと云ふので、眞に海での軍神は廣瀬中佐、陸での軍神は橘中佐であると謠はれたのであるが、私共は歷史あつて以來生きての榮に於いてはナザレのイエスに及ぶ者はないと思ふ、故に死しての榮を得た者もナザレのイエスに及ぶ者はなからうと思ふ、イエス、キリストの死は彼れの獻身犧牲の生涯の冠として神がお與へになつたものではあるまいか、悲慘と云ふ上から考へたならば實にイエスキリストの以前にも亦イエスキリストの以後にも彼れが如き悲慘なる最期を遂げた者はない、けれども其最期は全く人を救ひ全く世の人を救ふと云ふ獻身犧牲の死であつたが爲に、キリストの死は

其死なれた目的の通りに遂に世界萬民を救ふと云ふ大いなる榮を現はすものとなつたのではあるまいか、私共は何うせ死なねばならない、疊の上で死ぬるのも死である、彈丸に飛されて死ぬるのも死である、十字架上に悲慘の最期を遂ぐるのも亦死である、其死は何れを撰ぶべきか是れ人力の及ぶ所でない、廣瀬中佐が今や端艇に乘移らんとする刹那、彈丸に撃たれて死んだならば、後世までも武夫の芳しき香を傳へる事が出來やうから、さう云ふ死を撰びたいと思つた事は決してなかつたであらう、又縱令さう云ふ希望を懷いたとしてもさう希望通りに行くべきものではない、死ぬると云ふ一段になれば如何にして死するか、是れ寧ろ大御神の聖手に屬することである、我々人間の撰には據らないものである、たゞ人間の撰ぶべきものは何であるかと云へば人格の榮を現はす爲に十年生きれば十年、五十年生きれば五十年、百年生きれば

百年、常に琢きに磨きを掛けて參つたならば、其の琢磨に依つて人格の榮を放つやうになる、其人格の中に愛が充ち溢れて來たならば、それが私共の業に榮を現はすやうになつて來て、遂に恩寵と眞理に充りと云ふ生涯を形造ることが出來る、さうなつたならば、假令寐床の上で安らかに死んでも死花が咲くのである、キリストが十字架上に架らずしてエルサレムの高殿の中でお死になされても、キリストの如き生の榮を有つた所の方は必ず死の榮をもお持なされたに違ひないと思ふ、けれども矢張りキリストは天の父の聖旨に依つてエルサレムの都に近さカルバリ山の麓で、而かも十字架の上に擧げられ、多くの人々が眼を着けて居る其中央に於いてあの榮ある死をお遂げになつたのであるから、キリストの十字架の死はキリストの人格の花となり、キリストの愛の花となり、キリストの全生涯の花となつて現はされたのである、其十

字架の死を私共が味ふときに當つては、愈々其キリストの人格の神にて在まさなければならぬと云ふ事を悟ると共に、其神の子なるキリストの愛が宏大無邊であつたと云ふ事を悟ることが出來る、さすれば私共の心の中に愈々キリストを慕ひ、愈々キリストの聖手に救はれたいと云ふ心が增加はつて來る譯である、そこでキリストにしてエルサレムの高殿に於いて筵の上に安らかなる死を遂げさせ給はずして十字架上に悲慘なる最期を遂げさせ給ふたと云ふのは、是れ神が愈々キリストの死の榮をして一段の光を放たしむる御趣意であつたと見て差支はなからうと思ふ、尚ほ十字架上の死を遂げ給ふたる主イエスは天の父の右の聖手に擧げられて永久の榮にお入りになつたと云ふことである、私共もキリストイエスの聖足の跡を踏んで、たゞ一度礫刑に遭つて死ぬると云ふのではなくして、毎日々々キリストの爲に死ぬるな

らば『爾曹生命を惜む者は之を喪ひ我爲に生命を惜まざる者は之を得べし』と仰られた如く、イエスの爲に此生命を失ふて行かうと云ふ覺悟になつて献身の生涯を送ることが出來るならば『彼と偕に苦む者は又彼と偕に榮を得べし』と使徒パウロが申された如く、私共の死ぬる寢床には必ず死花が咲くであらう、それは寢床の上で死ぬるのも或は人々の爲に八裂にされて死ぬるのも、如何なる死を遂げても死花が咲くに違ひないと思ふ。

諸君は何うせ一度はお死になさらねばならぬ、其死に出遭ふたときに諸君の寢床から臭氣紛々として鼻を突くが如き惡き香氣が立つことであれば、私共は實に死んだ後までも諸君の爲に泣かなければならぬ、然るに諸君の寢床から實に馥郁たる香氣が發するやうに諸君の死花が咲くやうなことであつたならば、私共は諸君の死を見て感謝しなけ

ればならぬ、死んだ後に人をして泣かしむるのも、又死んだ後に人をして感謝せしむるのも、何所に其秘密が存するかと云へば、生きて居るときに其榮を現はし萬物の靈長として、神の聖姿として眞理と恩寵に充てりと云ふ境に達することである、其立派なる人格が神の召を被つて現世を去ると云ふときに、神は必ず死花を咲かせずしてはお置きなさることはないと思ふ。

曩昔から今日に至るまで我國の武夫が戰場に骸を曝すと云ふ場合に當つては決して醜き死狀をすることはならぬ、笑つて死ぬると云ふのが即ち榮のある所だと敎へたのである、私共クリスチヤンたる者は此の世に生存する間は、右お話申すが如き生きての榮を得て、イザと云ふ場合になれば笑を含んで『主よ我を聖許に往しめ給へ』と云ふ其麗はしき祈禱を以て最後を告げることが出來たならば、天の父は我を祝し我

我の後に殘る所の者は感涙に咽んで、斯くの如き高尙偉大なる人格が我儕の衷にあつたかと云つて悅ぶであらう、何うせ死なゝくてはならぬならば生きた榮を帶びて潔く死に就き、榮ある死を以て此世を終ることが甚だ大切なことであらうと思ふ、又私共がキリストの聖語を見て『一粒の麥もし地に落て死ずば唯一にて存んもし死ば多の實を結ぶべし』といふ實に神々しき生涯を送り、死の榮を以て此世を終ることであつたならば、一人の我が死んでも多くの人々が其感化を受けて更に榮ある生涯に遷つて行くと云ふやうに、愈々芳名を竹帛に垂るくらゐのことではない、生きた人類の間に我々は死しても死なず、生存つて其感化を及ぼすことが出來るといふ生涯になるから、何うか死の榮をお望みなさるならば生の榮をお望みになり、愈々生の榮を贏ち得てお死にならんことを私は諸君に切に希望いたす次第である。

第十五章　實驗の價値

聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す

（羅馬書八章十六節）

或西洋の人が申した言葉に云く二十歳迄は準備の時代である、四十歳迄は失敗の時代である、而して四十歳以後六十歳迄は成功の時代であると、是は確に眞理に近い語であると思ふ、孔子は『四十而不惑』と申されたが、我國に於ては四十以後は分別盛りと唱へて居る、古今東西言ひ樣は異なるかなれども、是れは人生は多くの經驗を積んで其處で初めて成功に入ると云ふことを言現はしたものである、此處にチヨット申して置きたいことは、實驗家は學問は餘り必要がないと云ひ、學者の方では實驗は大切であるけれども、學問の無い人は詰らないと云ふ考があ

つて、學者と實驗家とは何だか合はないやうな氣味合が見へる、併し學問とは何かと尋ねて見れば、古人の實驗を書いた書物を學ぶか、又は先輩の實驗した事を學ぶのである。

さうして見れば實驗家の方では數千年來の人々が、色々と積んだ實驗を學ぶと云ふことは、非常な利益であらうと思はれる、尤も其學問の眞髓は昔の人又は先輩がやり損つたと云ふ點を多く學んで、後人は其覆轍を踏まないやうにすると云ふに歸するのである、又古人や先輩が曾て斯う云ふことをやつて置いたと云ふ、所謂積極的の方面で學ぶ所も多々ある、然し夫れは愈々となつて參ると、其眞似をすれば却て失敗を招くやうな實例があるからして、どうも古人又は先輩が如何に善い道を遺したと思つても、それを悉く眞似する譯にもゆかないと云ふ場合が甚だ多いやうである、殊に宗教の方面にては、學說よりも寧ろ實驗の

方が大切であらうと思ふ、譬へば三十九卷もある舊約全書を繙いて、創世紀の始めから馬拉基の終りまで、一々細かに之を讀んで、それから本を閉ぢて、偖て舊約全書と云ふものは何であるかと尋ねて見たならば、猶太國民としての實驗と、又猶太の王なり、祭司なり、豫言者なりが、個人として實驗したことを、書いたものが殆ど其三分の二を占めて居る、若し其王なり、祭司なり、豫言者なり、或は猶太國民全体が實驗した事柄を舊約全書から拔去つたならば、此舊約は紙屑籠に放つて仕舞ふ外に仕方のないものとなるであらう、又新約の方も同じやうな譯で、キリストと弟子達の宗教の實驗を記載したものであつて、其實驗を取去つて仕舞へば何が殘るであらうか、或は默示錄の赤い馬が飛出したり、白い馬が躍出したり、或は十本の角の生へた大きな怪物が飛出したりすることが殘るか、然らざれば想像と空想とが殘るだけであつて、新約全書の

價値はなくなつて仕舞ふのである、是亦反古箱の中に棄てるより外はなからう、ソコデ私共が聖書を重んじ、而して大に力を入れて深く味ふ點は、確に古人の實驗であらうかと思ふ、併ながら其古人が實驗した所を究めて大に蘊蓄すれば、即ち一種の宗教學者とはなれるが、只宗教學者となつた所で、宗教家として立つには、是亦餘り益を爲さないと云つてよからう、大學に何某と云ふ博士があつて、宗教の學問と名の附いて居るものは、婆羅門教であらうが、回々教であらうが、佛教も基督教も、何も彼も能く其教の眞理を辨へて居るので、苟も宗教上の話をさしたならば、如何にも旨く話をすることが出來るのである、併し本當の宗教家としては何か足らない、大なる或るものが足らないやうである、丁度大なる像を製作へて其の像は宛も人間の如く見へるかなれども、其の中に活きた魂が這入つて居ないから、人形としての價値は充分であるが

人間としては見ることが出來ないのと同じことである、吾人も亦同じ譯で舊約も讀み、新約も讀み、又基督教の道理、昔から今日に至るまで如何に發展して來たかと云ふ、其成行も能く分つて居るかなれども、偖て其心の中に入つて、何物を握つて居るかと云へば無一物である、それでは宗教家としても、或は基督信者としても其價値は殆ど零となつて仕舞ふのである。

私は同志社で三年間神學を修め、又三年間聖書に關係ある書物を讀み、殆ど七八年乃至小十年の間宗教の學問をして、偖て講壇に立つて話をした所が其話は皆な人々の頭の上を飛んで仕舞つた、或日說教が濟んで教會から歸るときに一人の信者で山路一靜と云ふ人が後からポッポッ尾いて來る、不思議なことゝ思ふて、後を振返つて山路さん何ぞ用がありますかと尋ねた所がチョイト申たいことがある、曰く貴方の說

敎を伺ひまして敎會の人々が申して居ります、それは外でもありませんが敎會で說敎を聽いて居ると云ふと、何か學校の敎塲で學問上の話を聽くやうな氣持がするけれども、一向腹の底に屆かないやうに思はれると、其時私の腹の中にギクッと應へたものがあつたので、それから山路君それではどう云ふやうな話をしたら宜からうと尋ねた、イヤ有難い話をして貰ひたいと言はれた、それで私は默つて其儘別れ、それから熟々考ながら自分の家に歸り有難い話、どんな話をしたら宜からう、どうも自分の腹の中には基督敎の學問は入つて居る、難有と云ふ感じは少しも無い、無いものを話せと云ふのは出來ぬことで、無いものを有るごとく話をするならば僞善である、虛僞つきである、出來ることではない、其處で是は宗敎の學問は致したか、なれども、自分はまだ宗敎の實驗はやつたことがないと云ふ所に歸着したのである、然らば自分には

宗敎の實驗がないから、人の實驗を聞いて來て其實驗を述べ傳へたら宜からうと云ふ考が起り、六日の間に彼方此方訪問して、さうして此人は信仰家である、此人は熱心家だと云ふ、お婆さんや奥さん達を始めとし、色々實驗談を聞いて、それで說敎を拵へて敎會に立つて話をすることゝして居つた、丁度其の頃隣敎會にリバイバルがあつて、牧師澤山氏は、古の豫言者の如く、非常に信者達の罪を責める、それで其處に行く人は皆泣いて歸り、私の所に來て、どうしたならば此の罪から免れることが出來ようか、どうしたならば救が得られるだらうかと尋ねられた、所が丁度大學を卒業した醫者が病氣を治した實驗がないのと同じであつて、私は問はれて答が出來ない、段々困りに困つた結果、いよ〳〵宗敎と云ふものは頭腦で研究すべきものではない、宗敎は腹の中で研究するものである、宗敎は書物の上よりも、日々實際の上に味はなければな

らないものであると云ふことが、苦しい、苦い經驗の結果として、自分の腹の中にすつかり入つたのである。

そこで新約全書を繙いて羅馬書を讀んで見ると、其三分の一は神學書で、三分の二はパウロの實驗したことである、羅馬書の七章を繙いて、段段讀んで往つて遂に半過ぎになつた、さうすると眞にパウロと同情同感になつて仕舞ひ、善を爲したいと思へば惡念が生じ來る、誡を守らうとすれば、守らんでも好いと云ふ、イヤ守りたいけれども迚も自分の力では守られないと云ふ考が出て來る、祈禱を爲やうとすれば形式の祈禱などは詰らないから、寧ろやらぬ方が宜からうと云ふやうな、惡魔の試が出て來る、いかにも心の中には非常な戰が始まつて、とう〳〵其結果は肉に負けて仕舞ひ、眞に顏色憔悴形容枯槁せりてふ有樣と成り了つた、遂に自分のやうな奴は仕方がない、迚も不可ないと思ふた、それが

『噫われ困苦人なる哉この死の苦みより我を救はん者は誰ぞや』と云ふ叫とあつて、恰も汗の海に沈んだやうな心地が致した、種々苦悶の結果イエスキリストなるが故に感謝すると言つて、漸く波上に浮き上る愉快を得たのである、それから八章のパウロの經驗となり、終に罪を殺し雜念妄慮を拂ひ、何も彼も悉く神の御前に差出して、どんな難儀が來ても、どんな苦難が來ても、キリストの愛より我を離すことは出來ない、天の父の慰藉より我を遠ざけることは出來ないと云ふことになつて、兩手を擴げて、キリストに抱付き、天父の溫かなる手に抱かれ、パウロと共に加拉太書の二章の廿節にある如く『我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり』と云ふ實驗に達するやうになるのである、其處になつて來れば、大丈夫、其處まで實驗が進めば、笑つて死の海を越へて天國に入ることが出來るだらうと思ふ、

けれども諸君それまで實驗を積むのは容易のことではない、矢張類の肉は落ち、顏の色は青くなり、人よりは貴方の御顏色は惡い、いたく御瘦せなさつたと云ふやうな、挨拶を受けるやうなこともあらう、然しかゝる苦戰が安心立命を產出し、アバ父と呼ぶ子たる者の靈を受けて眞に我は神の子であると云ふことを、聖靈が我靈と共に證據立てるやうになるのである、こゝに達すれば元氣は百倍し來り遂に無病息災、何物が來ても、それ等のことに就て決して氣を痛めるものではない、決して打負けることはない、どうしても其實驗を積むと云ふことが基督信者たる所の第一であらうかと思ふ。

諸君が此聖書をお讀みなさる時に、何の實驗もない所の方は、心の中の戰と云ふ意味さへ分らない、十年、十五年、二十年、此戰をやつた所の者は、是はパヴロの實驗ではない、我が實驗だと思つて、非常なる興味を以て

其處を讀むことが出來るのである、又羅馬書八章の廿八節に「凡ての事神を愛する者の爲に悉く働きて益を爲すを我は知れり」とあるのを讀んでも經驗の無い所の者は、文意は分るけれども、其眞意は分らない、それで經驗に經驗を積み、而も苦き經驗を致したと云ふ人は、打れても、敲かれても、又倒されても、神を愛する者の爲には悉く働きて我靈性を發展せしむることを悟るであらう。

此聖書は實に奇妙な書物であつて、前にも御話し申した通り、其三分の二は古人の實驗を書いたものであるからして、私共の實驗が積れば積る程、聖書の味が段々出て來る、さうして面白くつて堪らないやうになつて來るのである、所が十年前に洗禮を受けて居つても、二十年前に洗禮を受けて居つても、苦き經驗をしたこともなければ、別に修養したこともない方は、此大切なる聖書を讀んでも、一向深い興味を感じないで

あらう、今日お互が本當に我日本に於て基督教を廣めようと云ふ考であり、又吾人の使命は、何處までも此道を天下に傳へなければならぬと云ふ考があるならば、唯だ聖書を以て人に傳へたと云つても何の利目もないのである、此聖書は一度び己の腹の中に入つて、さうして腹の中で消化されて、それが我實驗となり、我信心となり、我祈禱となり、我行爲となり、我神學書となつて、現はれてこそ始めて成功するものである、例へば醫者の藥を何ぼ貰つても、亦其藥の効能書を何ぼ多く讀んで見た所で、少しも病の助にはならないのであるが、其藥を用ひ其が我病に的中すれば、如何なる病でも直ちに直るのである、丁度其如く、古人の實驗に出でた所の聖書の言葉が、我臟腑に一度入つて、再び出るならば、忽にして神を見ることが出來、忽にしてキリストを握ることが出來、忽にして自分の心の中に安心が出來る、又己が罪を打伏せることが出來るの

である、其實驗の一つ何れでも宜しい、或は諸君が祈禱の實驗に入りたいと思召すならば、何か一つ問題を捉へて、夜更け人靜まつて後、寢床の上に起直つて、熱心に祈つて、或は七日の間、或は十日の間、或は三十日、或は六十日の間も、其一つの問題に就て眞から祈禱られたならば、果して神は其誠なる熱心なる祈禱は聞き給はるであらう。

實に私共の小さな實驗は書物に載せてある千百の大實驗談よりも己が靈性の發展に取りては大切なものである、實驗は實驗を生み、而して己が實驗によつて古人の大實驗を我有となすことも出來るので、何んでも聖書を讀んで一々實驗して、泰然不動の信仰に入り、終に全日本を動かすやうな大信仰を生み出して貰ひたいものである。

靈界妙趣　終

明治三十五年五月　八日印刷
明治三十五年五月十二日發行
明治四十年一月二日增補再版印刷
明治四十年一月五日增補再版發行

靈界の妙趣奥附

復製不許

著者　宮川經輝

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發賣所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店

印刷所　横濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社

宮川經輝先生著書目次

○約翰傳釋義	定價金一圓	郵税金十錢
○羅馬書註釋	定價金卅五錢	郵税金八錢
○活る基督	定價金廿五錢	郵税金四錢
○蘇溪教話	定價金二十錢	郵税金四錢
○金言集	定價金十錢	郵税金二錢

是れ先生が多年、關西の講壇に於て講述せられたる説教清話の骨子、靈覺の秘義、堅信修德の妙趣、輯めて此の數册にあり

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS
URBANA.

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
252 M69C C001
Sublime thoughts concerning the spiritua
3 0112 087623390